

の時代を過て新マールカンデリズム社會政策の時代に達す。此の變遷を完成せむとするに當りては期間に長短の差こそあれ第一期を経たるものにあらずれば第二期に至る可からず、第二期を終りしものにあらずれば第三期を樂む可からず。充分なる都府經濟時代の訓練なくして一躍して國民經濟時代に觸れたるものは必ず國弱く民衰ふ。露國の偉人彼得大帝惜むらくは這般の學理に通せず、國民的氣風本質の進化を圖らずして徒に文明の漆を外面に塗る、一見燦たる光明人目を射ると雖も表皮一葉剝し來れば内は、是れ未だ中世の餘香紛々たる韃靼的特性のみ。韃靼的野蠻國よりして一舉西歐の文明國の墨を摩せむと試みたる彼得の盡力は其貴族をして巴里の豪者を學ばしめ佛語を操つるに至らしめたるに止り、未だ以て營利的企業的近代精神の圓熟を招くに至らず。従て吾人が彼に呈し得べき最上の讚辭と雖もヴェルトの一句以上に出づ可からず。曰く「彼得は野蠻國を進めて獨立半開の強國たらしめたり」(Peter hatte ein Barbarenreich zu einer selbständigen, kaiserlichen Macht erhoben)。(註四)茲に於てか吾人釋然として第三階級の缺乏を覺る可く、工業發展の遅々たるを悟る可し。知らず、讀者の果して吾人の所謂中

世的經濟生活存續説を是認するに吝ならざるや否やを。

論じて茲に至つて吾人は露國發展の大道は實に侵略主義に存せず、全露西亞主義に存せずして中世的經濟生活の脱却に存すと云ふ、露國工業進歩の要諦は保護關稅にあらず外資輸入にあらずして營利心企業心の養成にありと云ふ、露國が先づ打破すべき最大の強敵は之を英に求め獨に求め將日本に求む可きにあらずして其「ミール」に求め其「アルテル」(Arteil)に求め、又其「ツアドルガ」(Zadruga)に求む可きを主張す。其國粹主義者が依て以て疲れたる西歐を救はむと號する經濟組織が實に各國民が一度は通過したる初期の遺物なるを知るに於て、此の如き「不名譽極まる救主によりて救はれむことは謹んで謝し恐れて謙退せむ」とするもの豈ブレンタノのみならんや。(註五)吾人をして再言せしめよ、文化の發展には間道なしと。パクローニン(Paklounin)をして其「露西亞主義の妖怪は既に全く消失せり、然らずともやがて消失すべきものなり」(註六)との論斷の適中を誇らしむると否とは一に繋つて露國々民が如上明白なる眞理を看取し速かに中世時代を經過して歐洲諸國と同一狀態に到達し得べきや否やにあり。

註四 Wirth, Die Entwicklung Russlands, Berlin, 1901, S. 18.

註五 岡田博士專著の文化的使命とドレーラの近世經濟學研究九一〇頁。

註六 Emil Reich, Success among Nations, London, 1904, p. 193.

第二節 其前途の三大難關

若し露國にして中世的經濟組織より進化して純乎たる近世的經濟組織に移らむか、其政治上經濟上の勢力は著しく増進すべく、他日再び乘ず可き機あらんには、忽ち之を捉えて發展を企圖すべし。而て今彼が前途に横はる障害たる可き國家を數ふれば三あり。東に於ける日本、南に於ける英國、西に於ける獨逸即ち是れ也。

第一款 日本

日露の關係は必ずしも樂觀すべきにあらず。乞ふ、鑛産に林産に無限の富源を藏し、農耕に牧畜に茫漠たる平原を有し、將來發展の策源地たる可き西比利亞開發の爲には日露戰役と國內叛亂とに依る瘡痍の癒えざるに早く經營の歩を進めつゝある遠大なる精神顯著なる事蹟を見よ。鐵道外債遙かに三十億を超え、其利子のみにても一年一億三千萬留に達し、且つ國有鐵道の缺損三億にも及ばむとするに關せず、九千八百萬留を投じて後貝加爾復線工事を進捗せしめむとせる其一な

り。東清鐵道の缺損優に二千萬留を算せる、際、物産としてはセヤ金坑の金と非常なる保護を以て養へる農産物あるのみなる地方に其競争線たる可き黒龍江鐵道を建設すべき經費一億七千八百餘萬留がストリピン首相の「露國の二頭鰲は東方を望めり。黒龍江鐵道は自ら支拂ふ可き賠償金なるを覺悟せざる可からず」との辯護の下に通過し、然も其線路が露清の國境を避けて人口稀疎の北方を擇み全く國防兵備の目的に出ることを明にせる其二なり(註一)。絶東航路補助法案が財政委員の有力なる反對を排し、コ、ツ、ォ、フ大蔵大臣の「露國々旗は決して日本海上より撤去すべきものにあらず」との絶叫の下議會を通過せし其三なり。滿洲の撤兵を貝加爾附近に止め、絶東移民を後備兵にとりたるのみならず、今日貝加爾以東の歩兵二百六十大隊砲兵百三十四中隊を稱へて戦前に倍す(註二)と云ふ其四なり。頻りに西比利亞移民獎勵に努め千九百七八兩年の移民合計百萬人を過ぎたるを報ずる(註三)其五なり。此の他浦鹽自由港の閉鎖と云ひ、黒龍江、撻靼海峡の凍凍と云ひ(註四)ニコラエフスク要塞及び軍港建築と云ひ、皆これ吾人をして其志望の遠大にして其劃策の堂々たるを三嘆せしむると共にウワロフ公が日本の平

和主義なるを信ずる能はずとなす際が「我等は復讐に就て語る可からず、然れど常に之を忘る可からず」との佛國愛國者の激語を引用せし一事に重大なる意味を發見せしむるものと云ふ可し。

露國復讐戰企圖説を以て疑心暗鬼の類と見る能はざる此の如し(註五)。然りと雖も本年一月米國政府の滿洲鐵道中立提案に對し日露兩國の峻拒の理由大體に於て一致し意思の和合ありたるが如きに察し、又最近巴爾幹の形勢露國をして容易く再び極東に事を構ゆるを許さしめざる觀あるに鑑み、吾人は以上の諸計畫を解するに總論所述の如く財權保護に政權を要する時代の趨勢に應ぜざる處置を以てし日露協約の精神を尊重せむと欲す。若し夫れ國民黨領袖大石正己の提唱せる日露同盟論にして露國政府の贊同を得、一九〇一年十一月英國^{ナショナルレビュー}々民評論誌上に現はれ徒に世人をして論旨の奇妙に驚かしめたる英露同盟論の筆者をして其先見の適中を誇らしめたる時勢の變遷が他日大石代議士をして亦其遠大の識見に誇らしむるを許すに至らむか、是れ豈氏一己の慶事のみならずや。

註一 此の點に付ては

外交時報第百二十六號大庭景秋氏「黑龍江鐵道の敷設確定」
同第百二十七號興來治郎氏「米露の國防」(下)

同第百三十一號川島清太郎氏「露國極東政策の主眼」

同第百四十三號及び四號大庭景秋氏「北滿州及東露の近狀」
等参照の價値ある可し。

註二 竹越與三郎氏三又演說集一九七頁

註三 從來四比利亞移民は多く失敗せり。是れ其移民者が多く無資産者なりしと四比利亞に行かば本國に於ける如き租税の壓迫と生活の困難とを免がる可しと思ひ輕卒に農具家具馬等を携えずして移住せしによる。然るに一九〇六年以來露國政府は大に之を獎勵し小農救済のため土地を買収し彼等に領與せむとの計畫を立てたる程なれば從來一年平均一千戸六萬六千人に過ぎざりしもの俄然増加し

	移住費額	移住戸數	移住人口
一九〇六	五百萬圓	三萬戸	十八萬人
一九〇七	千三百萬圓	六萬八千戸	四十萬人
一九〇八(豫算)	千九百萬圓	七萬戸	四十二萬人

となれるが其後の報道によれば一九〇七及び一九〇八兩年の移民合計百萬人を越ゆと云ふ。(國家學會雜誌第十四卷第百七十七號百〇三頁以下、四十一年六月二

十日大阪毎日新聞社設露國極東策の確立(全年十二月二十二日同第五面浦港通信参照)

註四 黑龍江の流域は生産力の發達を目的とすると同時に砲艦隊常備のためにして、糧糧補給の波瀾は大艦通行に連せしめむがためなり。

註五 反對説あり。東洋經濟新報第四四九號以下連載植松孝昭氏「露國果して復讐戰を企圖すべき乎」参照

第二款 英吉利

轉じて英露の關係を見むか、西藏(註一)よりして土耳其に至る疑々五千哩の間は一時と雖も兩國係争の地たらざるなき地理的關係あり、ナポレオン戰爭以後互に歐亞の覇權を争ふて犬猿も管ならざりし歴史的關係あり、加ふるに露國にして數百年間の千辛萬苦よりなる中央亞細亞の經營に實效あらしめむとすれば即ち百尺竿頭一步を進むるの政治的經濟的必要ありと雖も今や二國は舊怨を捨て、新讎を結び、レザアルに於ける兩帝の會見及び露國皇帝の訪英に愈々其交情を暖めたるを思ひ、又波斯に於ける革命並に「クーデター」に(註二)印度の國境に於ける騷擾に(註三)巴爾幹問題に又西藏問題に充分なる効果を現はしたるを見、更に英國に於

ては前外相ランスダウン氏が露國の對亞細亞政策の根本的變更を指摘して今後絶對的の信任を置いて可なるを論じ、露國に於ても外相イズヴェルスキ氏が英露協商の目的は某々問題に限られたれども之に依り兩國の關係一層親密となり範圍外の問題に於ても一致の行動を採り得べしと演説したるを聞けば、吾人は到底近き將來に於て兩國間に戦雲の蟠るが如き不祥あるべしと豫想するを得ざるなり。「兩國が其活動を亞細亞のみに止めず獨逸が最も痛切に利害を感ずる地方に及ぼすべき不利ある英露協約を其未だ批准せられざるに妨遏する能はざりしを遺憾とすとせるコンクリエーション隨從通報の論説(註四)は裏面より同協商の効果と證して餘あるもの、——波斯に付て過大なる露國の勢力範圍を認め、亞富汗に關しては無償に從來何等の權利なかりし露國に干與權を與へ、西藏に對しても從來無勢力なりし露國に英國と同等の權利々益を認めたりとのカーゾン卿の批難あるに拘らず之を目して英國外交の成效となすを辭せざる所以なり。

註一 日露戰爭中露國の餘力なきを見て英國の行ひたる西藏遠征は露國の一部に不快の感情を興へたり。(North American Review, July 1904, Art. "The English in Tibet, A Russian View" by Prince Esper Oukhtomsky を見よ)

註二 波斯は嘗てカーゾン卿をして「今日尙ほ不定なる波斯の運命如何は英露兩國の將來及び勢力を決定する試金石たり」と云はしめ、「タイムズ」をして「將來政界の暗雲を捲起し真正の政治的戰場たる可きは波斯灣頭ならむ」と斷言せしめたるの地なり。然るに今や同國に於ける兩國の外交は全く一致協同の行動に出て何等拮据する所なきに至れり。

註三 「英露協商の有難味は今回印度の國境に起れる騷擾に依り十分に認識せられたり。」(四十一年五月七日大阪朝日二面六日發倫敦電報)

註四 詳しくは慶應義塾學報第百二十四號七八頁以下を見よ。

第三款 獨逸

唯夫れ一道の妖雲は露獨の間に横つて吾人をして轉た其將來を危ましめずんばあらず。

由來國際場裡獨逸の態度は常に曖昧にして陰險なり。對露の關係に至ても一統一離容易く瞻睨すべからざるものあり。當初獨逸人が露領波羅的沿海を殖民地となせし頃には露國は即ち獨逸を師として西歐の文明を學び兩國の關係大に親密善を助けて那破翁の蹂躪を免れしめたる效少からざるも露國也。一八

七〇年の役動もすれば佛に與せむとする埃丁伊を制せしも露國也。然り乍ら是れ露國が獨逸を助けむとして獨逸を助けたるにあらずして佛の興隆を防かむが爲に策技に出てたるもの、從て一朝事豫期に反して獨逸の勢威旭日の天に冲するが如きを見るや、態度漸く一變し來り、内に在ては波羅的沿岸の獨人同化に努めて後日の禍患を除かむとし、外に向ては一八七五及び一八八六年の兩度獨の對佛陰謀を妨げて其跳梁を止め、兩國の間復昔日の如からざるに當り、伯林會議とピスマルクの退隱に意疎隔を生じ、果ては露佛同盟の成立を見るに至れり。然るに現獨逸皇帝は近東政策に着目すると同時に露國の障害を恐れ、巧に極東經營を慫慂して間隙を利し、殊に露國の一敗地に塗るゝの時忽如として假面を脱し、埃太利を促して高手の政策に出てたれば、露國は憤慨の念抑ふ可からず、日本と和し、英國と結び猛然として此の失敗の恢復に着手せり。露獨の衝突遂に免る可からずと云ふ可し。

以下如何に兩國の帝國主義の衝突するかを見む。

第一項 波斯に於ける暗闘

夫れ波斯は既に英露協約に依て其運命を定められたる邦土なり。然るに野心滿々たる獨逸は此の間に侵入して利權を收めむとを期し、或は窃に武器を與へて革命黨を助け、或はテヘラン府に大學を設けて思想界を動かし、或は獨逸商業銀行四十五ヶ年間營業の特權を得て經濟界に勢力を扶植し、或は皇室の財政窮乏を救ふて威勢を増進し、或は官吏實業家及び代議士の類を懐柔して私利の増長を希圖する等其活動頗る刮目を値するものあり。最近倫敦電報が波斯軍隊教官の供給鐵道特權讓與の請求、及び借款契約の締結等に關する獨逸の對波斯提議につき露國が公然異議を申立てたるに、波斯は英露兩國と借款契約を締結すると拒否したりと傳へ、又維也納電報が波斯のウルミヤ湖上の航海權を獨逸に讓與せるに對して露國が抗議を提出し、却て自ら獨占權を得むと要求せるを報ずるが如き(註一)吾人をして獨逸の手腕の凡ならざるを三嘆せしめずんばあらず。實に或意味に於ては獨逸の波斯經營に對する恐怖こそやがて英露協商となつて現はれたりと云ふ可く、此の如きは英露特に北部波斯に據る露國の利益と相容れざる所而て將來

に於けるバグダッド鐵道の延長が更に其衝突を助長すべきは疑を許さざる所見
 可し、獨逸の利益は先づ波斯に衝突することを。

註一 四十三年四月五日及び九日發倫敦電報同、二十一日維也納發倫敦電報七日十一日
 二十二日大阪毎日新聞第二面

第二項 小亞細亞巴爾幹に於ける反目

一八六九年ホフマン(Hofmann)がハイファ(Haifa)に上陸して殖民の端緒を開いて
 より獨逸が小亞細亞に垂涎すること茲に四十年、地は温帯に位して氣候温和、伐開
 を要する大森林なく、恐る可き風土病なく、他日埃を併せ巴爾幹を制し土耳其を操
 つるの時至らむか途を遮るもの僅にボスフォラスの地峽に止り、加ふるに天然の
 富源饒かに棉花培ふ可く、羊毛産す可く、石油汲む可く、小麥植う可く、以て、獨逸の自
 給自立を助くる事測る可からざるメソポタミヤ、アッシリア、シリヤ、バビロンの大
 平原は實に獨逸帝國主義者の主要なる標的たる可き運命を荷ふ。ロッシヤをし
 て一八四八年の昔既に、小亞細亞の相續權は獨逸の手中にあり、されば政府は宜し
 く米國行移民を同地方に送る可しと警告せしめ、スプレングァー(Sprenger)をして、こ

はこれ世界最良の殖民地、獨逸にして機を失はずんば必ずや新世界を得むと唱導
 せしめ、フォン、ジューイデン、ホーブスト(Von Suedenhorst)をして「アナトリア、ユッラテス
 地方を通ずる鐵道を敷設して露の西北利亞鐵道、英の蘇西運河に對抗し以て中歐
 の經濟的權力平均を確立すべし」と痛論せしめたる(註一)蓋し理なきに非るなり。
 翻つて露國の心事を窺はむか、彼が累弱の土耳其を斃し、内には其暴政に苦める
 同胞を救ひて全露西亞主義の實現に一步を進め、外には此の形勝の地に據て、歐洲
 を控撃せむとするは建國以來の大政策、經濟上よりするも南部地方の農産地は只
 ボスフォラスを通じて輸出せらる可きもの、かくして政治上軍事上經濟上露は是
 れ土耳其永遠の國敵(註二)近時極東に事を構へて聊か壓迫を緩めたりと雖も素志
 舊に依て牢たるを見る。

註一 The Pan-Germanic Doctrine, New York & London, 1904, pp. 194—198

註二 M. H. Hervey, The Trade Policy of Imperial Federation, London, 1902, p. 174 に曰く「Discrimination: While
 yet the German holds Alsace and the Turk Constantinople? Vain hope!」新き意味に於て尙ほ眞なるを

失はざる前途の尙、拙考なる譯筆を以て原文を損ふに忍びざるなり。

されば土耳其は勢力白國の保全を援助すべき強國を求むるの必要に迫らるゝ

を破せる獨逸は陽に恩惠を施與して陰に自利を進捗し以て小亞細亞に及ばむことを期し、ルーマニア虐殺事件以來頻りに政治的經營の歩武を進め、軍事上にはフン、デル、ゴルツ將軍を派して其兵力を強め、財政上には獨逸銀行を通じて土國政府の財政權を收め、希土戰爭に當つては公然土耳其に好意を示し、南阿戰爭に際してはトランスバール及びオレンジ在留土耳其人を保護し、遂に機熟せりと見たる一九〇二年秋獨帝ダマスカス(Damascus)に遊んで英委颯爽、永久に三億に達する回々教徒の親友なる旨を揚言し、足を轉じて甘言美語土帝を説くやバクダッド鐵道敷設權容易く其掌中に落ちぬ。一八八九年一月英人の合同經營に拘るハイダーバ、シニ(Haider Pash)イシニョット(Ishmidt)間の鐵道が突如として十三萬九千磅の賠償金を以て土帝に奪はれ而て直にイシニョット、コニア(Konia)間敷設權と共に獨人の創設せるアナトリアン鐵道會社に下附せられたる眞義茲に至て明白に解す可し。這般迅雷耳を蔽ふに遑あらざる底の行動は甚だしく英露兩國を憤らしめ、ノ、ウ、ニ、ゼ、レ、ミ、ヤの如きは、我露國は獨逸の亞細亞土耳其侵畧に自己の利益と希望とを破壊せられ乍ら尙ほ袖手傍觀せざる可からざるかと憤慨して駐土公使の防

害運動に聲援し、英國政府亦自國公使を以て土國政府の補助金を要せず且つ英國ヂシンケートのみを以て同鐵道の敷設に當るべき旨を申込みたるも遲きに失し、加之、時恰かも南阿戰爭酣にして獨逸の中立を必要としたれば態度自ら強硬なるを得ず。唯露國が小亞細亞の東北部に於ては露國臣民以外に何等の鐵道敷設權を附與せざる可き保證を得たるのみにて空しく獨帝をして名を成さしむるに了りぬ。爾來獨逸土國政策の進運一日も止む事なく、一八八〇年僅に三百四十萬圓なりし獨土貿易は一九〇五年二千二百五十二萬圓に達し、歐亞土耳其を通じて鐵道延長三千四百四十六哩中一千七百三十二哩は獨逸監督の下に立つに至りしと共に巧妙なる政策愈々巧妙を加へ、一九〇五年の列強聯合示威運動にも地中海に艦隊なきを辭柄として参加するを避け、一九〇八年一月埃國を援けてノヴィザール鐵道敷設權を獲得し一面セルビア、モンテネグロの連絡を中斷して全露西亞主義の實現に致命傷を與へ、他面イリジアン海に出て、他日の雄圖に備へむとせり。これ正にかの露國にして土都を窺はざる限り埃國はサロニカに指を染めざるべしとせし露埃約定の蹊蹌なり。憤懣の情燃ゆるが如き露西亞は蒼皇セルビアを

誘ふてダニエーブ、アドリアチック鐵道敷設權を要求し以て同鐵道の效力を中絶せむと圖りぬ。

然るに同年下有青年土耳其黨の活躍により土耳其一變して立憲國と化し、土都政界の風潮は急轉直下、苦心慘憺二十年漸く扶植せし獨逸の勢力は根底より破壊せらるゝに至りぬ。獨逸派たる政務總長フェリッポ、バシヤ其地位を失ひて、英國派たるキヤミル、バシヤ及びサイド、バシヤ權勢を恢復せる一なり。土國土木大臣が道路修築及び灌溉の大計畫を補助すべき専門技師の派遣を英佛に求めたる二なり。海軍再興顧問として英人を、財政顧問として佛人を傭聘するに決したる三なり。獨逸の抱ける悶々の情云はずして知るべきにあらずや。

革命幸にして成れりと雖も一瞥を東歐の形勢に與へむ者、必ずや内治に忙しく軍隊動搖して外顧の餘裕を存せざる土耳其を見、次て日露戰役國內叛亂の創傷治癒に汲々として對外硬の政策を執るを許さざる露西亞を見む。異志を巴爾幹に有する邦國今や一日と雖も緩すべからざるなり。

三十年獨立の機を俟つこと早天に雨を望むが如かりし勃牙利何ぞ此の機を逸

すべけむや、況んや先にグシゴフ事件あり、後に東方鐵道事件あるに於ておや。往て親く埃帝を訪へる勃王フェルデナンド十月五日故國に歸るや、直に古都チルノオに於て獨立の宣言を行ひて王位に即くと共に埃帝勿卒としてボスニヤ、ヘルツェゴヒナ二州の合併を宣言せり。英國首相アスキス即ち曰く、勃牙利の獨立と埃國の二洲合併とは之を分離して考ふ可からず。と眞なる哉。

一波起て萬波之に従ふ。クリート島民は希臘との合併を宣言せり。モンテネグロは伯林條約第二十九條の破棄とスピツアの讓與を要求せり。セルビアはドナ河とノヴィパザールとの間に横はる一帯の土地割讓を強請せり。土耳其政府は伯林條約關印諸國に列國會議の開催を請求し其商人は埃貨を排斥せり。露國外相イズツォルスキは急行西歐の諸國を歴訪し、セルビア太子は微行露國に至つて拔を乞ひ、而て獨逸首相ビュローは議院場裡、平和は破られざる可し、何者戰爭をなさむと欲するものは餘りに弱く、之をなし得るものは之を欲せざればなりと説いて暗に軒昂たる意氣を示す。

列強は先づ巴爾幹諸小邦を戒めて干戈に懸ふるとなからしむると同時に露國

は卒先土國の哀訴を容れ單獨行爲による伯林條約の變更は一八七一年の倫敦條約の原則違反なりと稱へて列國會議開催を主張し、英佛二國之に和し、大體に於て關係諸國の要求を承認せる議案を基として會議の開催を獨塊に説く。獨逸の態度は不明なり。埃國は傲然として拒むらく、「二洲合併を議に上す可き會議の開催には賛同するを得ず」と。

此の間巴爾幹の形勢は益々危殆を加へ、セルビアの示威あり、モンテネグロの武裝あり、之に對する埃國の壓迫あり。「スラブ」小邦の活躍見るに足ると雖も固より未だ以て獨力埃國に對抗して勝算あるべきにあらず。從て切りに宗國露西亞の救援を乞ひ露國々内の全露西亞主義者之に應じて盛に政府の怠慢を攻撃すと雖も、結局兵力に訴ふるの覺悟なくして抗議を呈するは政治上の大過失なるを悟れるイズヴォルスキーは國運の現状に鑑み敢て積極的政策に出る事なく、宿望たるダーダネルス通航問題をも固執せずして誠意を示し、唯窮餘一條の活路を發見して革新せられたる土耳其を首領とする物牙利、セルビア、モンテネグロの同盟を提案せり。是れ實に巴爾幹に於ける、スラブ人種大同團結に一段の發展を齎す妙計、

暫時雌伏するの外なき地位より打算すれば近東に瀰蔓せむとする獨逸勢力防遏案としては實に最上の政策なり。

機敏なる獨逸は早くも形勢の不穩を觀破せり。土貨二百五十萬磅は還般同盟説を畫餅に歸せしむ可き代價としては決して不廉なりと云ふ可からず。土國財政の困難に乗じ埃國を促して突如土耳其と和せしめたる所以なり。

埃國即ち兵力を國境に集中してセルビアを威嚇すと雖も、露を憚り容易く戰端を開く能はざる可きを看破せるセルビアは頑として屈せず。三月漸く露國の勦獎に應じて埃國に對する賠償請求の意思を抛ち又二洲合併問題を伯林條約諸國の決定に任ず可しとせるも埃國政府未だ満足せず。茲に獨逸はセルビアの頼れる露國に對して壓迫を加へ東部軍團に動員を行ふて威を示し遂に露國をして列國會議を俟たず二洲合併を承認せしむ。

露國にして既に屈する以上大勢遂に動かす可からず。英佛兩國之に倣ひ、セルビア亦涙を吞んで埃國の主張を容れ、越て四月物土兩國の合意成立し列國孰れも物牙利の獨立を承認するに及んで久しく結んで解けざりし紛紜略ぼ結着するに

至れり。佛國新聞「タン」即ち嘆ずらく、今や國際間に法律なく強者は是れ勝者なり。露國と其同盟國と其友邦とは正義は劍を手にするにあらざれば服従を命ずるの力なきことを學び得たり」と。穿ち得て妙なりと云ふ可し。

述べて茲に來つて吾人は伏魔殿内二個の大潮流の衝突せるを思ふ。一はセルビア、モンテネグロの露國を宗として動く傾向なり。一は埃太利匈牙利の獨逸を頼として動く趨勢なり。前者功を奏すれば巴爾幹の霸權は露の手中に落ち、後者勝を得れば巴爾幹の王冠は獨の頭上に輝く。東歐問題の真相は茲に達せずしては遂に釋然たる能はざるなり。

夫れ獨人笛吹けば埃人即ち踊る。埃國は全く獨逸の傀儡のみ。勃牙利を制し、セルビアを壓し、モンテネグロを抑へて埃太利が半島を支配する、實は是れ獨逸の勢力が滔々として土耳其を壓迫せむとするの謂なり。埃國國旗の背後には記するに東方政策(Dring nach Osten)の四字を以てせる獨逸民族の旗幟潜む。伯林會議席上諸宗教信者雜居の結果土耳其に屬せしむれば改革を望み難く、獨立せしむれば無政府の狀を呈すべきボスニア、ヘルツェゴビナ二州をセルビアに與へて一大

ブ國を現出せしむるを欲せず、寧ろ埃國に託してスラブの前進を阻止せむと圖り、又露國の前衛たる勃牙利を強からしめむを嫌ひてマセドニアを奪ひ、東ルーマリアを分つゝの舉に出でたる英國が今や却て露に與し、佛之に和し、伊亦之に同ぜざる、蓋し怪むを要せざる所なり。

人をして歸趨の如何を危ぶましめたる巴爾幹問題は斯くして收まりたれども收まらぬは全露西亞主義者の心中なり。殊にバクダッド鐵道會社がトゥラスラビマヤス山脈を越えてアシップに出でユウフラテス河に架橋してエル、ヘリフに至る八百四十基米突の延長工事に着手せむとせる、クリート問題に關し英佛露伊に反對し埃國と共に土國に同情して忽ち二州合併以前の親和に復せむとせる、又露物の親近を利し土國の非スラブ的精神を鼓舞しつゝある、を見ては露國たるもの何んぞ委如たるを得べき。即ち二州合併に依て大セルビアを再興せむとする民族的憧憬と海に達せむとする國家的希望とを葬られ遺恨遺る處なきセルビアを壓さ、夙に武勇の名高く埃國のセルビア抑壓甚だしきを加ふるに當り武器を取て起ち極力其聲援に努めたるモンテネグロを誘ひ、更に大勃牙利樹立の當時と

比す可からざる小面積に降すれども名君實相輩出し國富み兵強く獨立の便宜上
 埃國を利用したるも永遠の發達は露國と協同するの優れるを悟れる物牙利を引
 き三國を打て一團とせる大スラブ同盟を建設し獨埃勢力の増大を防制して全露
 西亞主義を遂行せむことを企圖し、物牙利セルビア兩國王の會見及び露都訪問に
 其親近の度を發表せる遠大の劃策は蓋し之を證するものよし露埃協商の成立よ
 り一時の平和を裝ふとも露獨兩國間裏面の暗闘は到底根絶するに由なきなり。
 即ち知る獨露の利益は二度小亞細亞及び巴爾幹に衝突せることを。

第三項 埃太利匈牙利に於ける衝突

埃太利匈牙利の將來は幾度か政客に依て論議せられたる所然も人は多く獨逸
 の野心を云爲して未だ其間露獨の衝突ある可きに及ばず。固より獨逸の野心は
 毫も疑ふの餘地なしと雖も露の真意亦推し難きにあらざ。吾人は茲に先づ獨逸
 の地位を論じて半面より露國の心事を尋ねむ。

元來獨逸が埃匈國に對する覬覦の念を絶たざる所以のものは左の二大理由の

存するによる。

第一、政治上の理由

若し獨逸にして埃匈國の全部を自國主權の下に羅致し得むか、地を擴むること
 二十六萬方哩人を増すこと四千七百萬、北は北海より南はアドリアチック海に至
 り、右足を漢堡に置き、左足トリエントを踏み、右手はキールに備へ、左手はポーラに
 据え、歐洲中原の霸業茲に固く、地中海上他國の跳梁を許さず、佛伊の二國は膝を屈
 して憐を乞ふの外なく、露國と雖も輕々しく獨逸を脅かすを得ざるべし。

更に斯くして得たる地理的地位に乘じ、斯くして備ふべき地中海艦隊を利し、以
 て土耳其に迫らむには、其權力の偉大なるや英を凌ぎ露を超えて巴爾幹小亞細亞
 の經營茲に成る可く、ルーマニヤは陪從者となり、物牙利は隸屬者と化し、塞耳維、モ
 ンネグロは前進の門戸として鐵路一條、直に漢堡と波斯灣とを結ぶべし。

第二、經濟上の理由

近時獨逸人口の激増と工業國化とは漸次農産品の不足を告げ、勢ひ之が供給を
 國外に仰かざるを得ざるの狀にあり。然るに今歐洲屈指の農業國たる埃太利匈

牙利を得れば其自給自立を助くること甚だ大なる可く(註一)又埃甸の農民は獨逸工業製造品の消費者となりて販路の擴張を來す可く、更に地中海岸のトリエストは極東近東諸國に對する獨逸の貿易上至大の利便を供し、現時の如く事あれば忽ち東洋貿易を遮断せらるる危険を感ずるの要なきに至らむ。

註一 歐洲各國が外國より食料品を輸入せざる時は一年中食物なかる可き日數左の如し。

英	吉	利	一八八一—一九一年	一八九四—九五年
獨	逸		一七八	二七四
伊	太	利	六九	一〇二
佛	蘭	西	七六	七五
奧	太	利	三二	三六
			二	七

一 表直に獨逸の工業國化と埃甸併呑の利益とを數ふ(東郷實氏日本植民論二二三頁)

獨逸帝國の現状は此の二大必要を訴ふることに愈々急にして加ふるに獨逸の經濟關係は益々密接に赴き、全獨逸主義の著者すら

結局政治的同盟に終る可き獨逸經濟同盟は決して全獨逸主義者の夢想にあら

ずして實に獨逸人の自然的熱望たり。自然的なるが故に實現の望あり。實現の望あるが故に國家の努力を値ひす

と斷ずるに至れり。(註二)

註二 The Pan-Germanic Doctrine, London & New York, 1904, p.65

翻て埃甸國の國勢を見るに、日に月に衰滅に傾き、往時聖彼得斯堡より君士坦丁堡に至る途上維納ありを叫びし意氣は何處にも之を求む可からず。巴爾幹に於ける乾坤一擲の快舉嶄然として其位地を高からしめたる觀ありと雖も、合併宣言以來一年ならず、早くも埃甸々民は陸海軍費の増額と二州合併に要せる一億三千萬圓の巨費とに伴ふ重税の負擔に怨嗟の聲を發してエーレンタール伯の政策を嘲罵措かざるあり、他方向牙利人民は獨立の氣抑ゆ可からず、或は財政分離を劃し或は洪牙利銀行設立を叫び、埃帝と匈牙利議會との衝突は如何なる内閣と雖も調和の途を發見する能はずして更迭又更迭、遂にフランツヨーゼフ陛下自ら獨立黨首領コッスートを引見し、兩國分離不承允を宣して漸く一時を彌縫せられたりとは云へ、禍根は舊に依て深く、共同國費負擔問題と云ひ、匈牙利軍隊マジヤール語使用

擴張問題と云ひ、孰れも他日の一大波瀾を豫想せしめ、遂に吾人をして前日の活躍は正に燈火の滅せむとして大に輝くの類たらざるかを疑はしめずんばあらざるなり。實に埃太利、匈牙利は國にして國にあらず。實合國の形體を備へて實合國の精神を存せず。人種を異にし、宗教を異にし、言語を異にし、歴史を異にし、又政府を異にし、其間何等共通の連鎖なき人民雜居の地理上の名稱、カイツクスと言をかれば、獨逸の國旗がダニユロプ沿岸を蔽ふに至る迄保持さる可く、歐洲東南部の獨逸化を使命とせる一前衛にすぎずして、現帝萬歲、埃匈分裂の機運に際し、獨兵一度南を指さば、ハツプスブルヒ(Hapsburg)家の將來や察す可きのみ。宜なる哉、ビスマルクが晩年嘆じて、憐む可し、埃國、汝の生命は既に限られたるぞとなせしことや。述べ來れば、全獨逸主義の將來大に樂觀すべきものあるが如し。然れども、眼眸を一轉して其暗黒面を見れば、悲觀の原因たるもの亦少からず。以下内外の二因に分つて之が説明を試みむ。

(一) 内部的原因

獨逸が埃匈國を呑むとする口實は主として同國在留獨逸人の保護にあり。

從て若し其人口にして絶對的に或は相對的に漸減の傾向あらむには獨逸の苦痛は決して尠少にあらず。然るに今之を統計に徴するに、本國に在ては一年百萬人以上につき一萬五千人を増殖する獨逸人が埃太利に在ては八千三百八十人、匈牙利に於ては僅に三百二十五人を増すに止る(註三)結果一八八〇年には埃太利の全人口中三六、七五パーセントと占めし獨逸人は十年にして三六、〇四パーセントに降り二十年にして三五、七八パーセントと減じ、匈牙利にては一八九〇年乃至一九〇〇年の間に全人口の一割二歩より一割一步に退き、從て重要都市に付て見るも他人種に對する割合漸次薄弱を加ふる(註四)のみならず、他人種と混合して生活せる地方に於ては容易く同化吸收され(註五)自國民のみ群居せる地方には増殖の現象ありと雖も、道德的墮落著しく(註六)其將來頗る寒心すべきものあり。一言にして盡せば、獨逸の内部的勢力は漸減の勢ありと云はざる可からず。

註三 獨逸人増加表

	一八九〇年	一九〇〇年	一年百萬人の増加數
埃太利にあるもの	八、四六一、五八〇人	九、一七〇、九三七人	八、三八〇人
匈牙利にあるもの	二、一〇七、五七七人	二、二一四、四三三人	三二五人

(O. Elzbecher, Modern Germany, 2nd Edition, London, 1907, p. 42)

註四 重要都市在住獨逸人の全市民に對する百分率

ブダペスト (Buda-Pesth)	一八九〇年	一九〇〇年
プレズブネツ (Prezburg)	二四	一四
オムチンブネツ (Odenburg)	六〇	五〇
テメスフンネ (Temesvar)	六四	五四
ヘルマンスタット (Hermannstadt)	五六	五一
アラート (Arad)	六一	五五
カシユプン (Kaschau)	五三	一〇
	一三	九

(Ibid. p. 49)

註五 獨逸人の同化され易きは最も顯著なる事實にして、匈牙利の如きは非常なる速度を以て同化作用を行ふ。唯從來英國政府は獨逸人を保護し其永續を助くるが如き態度に出でしが、「チエツク人」(Czechs)等は大に排獨的行動をとり、官衙及び學校用語として獨語を用ふる如く、ホヘミヤ本部及びモラヴィアに於て「チエツク語」の使用を許すべしとの運動盛にして遂に獨逸黨と「チエツク黨」との反目を生じ、一九〇一年六月には獨逸黨を狂げてブラチクに至り親く「チエツク人」を慰撫して兩黨の和睦を圖られしことあり。然るに反感は益々激しきを加へ、就中ブラチクの排獨

熱の盛なるや一昨年末市街鐵道或は劇場等より獨人を放逐するに至れり。(四十年十二月一日發ロイテル電報同四日東京時事第三面所載、同四日發タイムス特電五日大阪朝日第二面所載參照)斯くの如くして進めばホヘミヤにある獨人三百萬は遂に同化或は排斥の結果復事をなす能はざるに至らむ。尙ほシレンヤ、チロル、ガリシヤ等にあるもの或は波蘭人、伊太利人により、或は「マジャール人」「チエツク人」により吸收されつゝあり。獨太利全人口の六割は「スラフ人」なるを以て如上の形勢永續せば獨太利は遂に「スラフ人」のものたる可し。

註六 之を最もよく説明するものは出産兒總數に對する私生兒數の率にして歐洲各國に於ては

佛蘭西及び獨逸	九歩
匈牙利	八歩五厘
蘇格蘭	七歩四厘
英蘭、和蘭及びヴェーテルス	四分二厘
なるに獨太利にては一割三歩七厘に達し然も之が内容を檢すれば「チエツク人」波蘭人伊太利人「ルセニヤ人」等の多き地方は七歩にすぎずして獨人が全人口の九割を占むる地方に在ては	二割四歩に始り
ステイリアの	二割五歩一厘
下獨太利の	二割六歩九厘及び
サルツブルヒの	

維納の

カレンシアの

三割二歩を経て

四割二歩六厘に及ぶ。

(O. Fitzbacher, op. cit., pp. 52—53)

假令併呑策効を奏せりとするも、今日六千萬中僅に三百萬の「スラブ人」を抱いて統治に苦める獨逸が頑強なる「マジヤール人」八百萬に加ふるに二千二百萬の「スラブ」を統御するを得べきや否やは智者を俟つて知る可きにあらざるが上に、連絡たる正統ハツプスブルヒ家の聲望は決して一朝一夕に烟散霧消すべきにあらず、否却つて普埃對立の時代を再現し、普國嫌忌の情強き南獨の諸邦は靡然として南方に傾き、さらぬだに難き統一は愈々難く普魯西永く覇者として安んじ得べからざるに至らむ虞あり。賢なる哉、ビスマルク。彼は既に已に之を察せり、曰く、「オーストリアン、シレンシヤ及びボヘミヤ」一部の獲得は決して普國を強うするの道にあらず、又維納は單純なる屬地として伯林より統治さる可きにあらず」と。(註七)

註七 Scetus Vidor, the Future of Austria-Hungary, London, 1907, p. 9, & p. 12.

(二) 外部的原因

進んで獨逸が何等の點よりするも野心實現の望なき匈牙利を除外して唯埃太

利を狙ひ、風雲の變に乗じて軍を同國に進めたりとすれば、歐洲列強の探る可き政策果して如何。埃太利は正に腐朽の大木、獨逸の恐る可きは埃太利自體にあらずして列強の態度にあり。而て紛糾錯綜、朝以て夕を推す可からざる國際關係の將來を察するは殆んど不可能に屬すと雖も、現狀にして豹變せざる限り、嘗てビスマルクの唇を漏れし、埃匈國政府の隆盛及び獨立を維持するは獨逸にとつて歐洲權力平均上必要なりとの言は事ろ歐洲諸國の宣言となり、獨逸の地位は四面楚歌の狀況に陥る可く、勢激するの極ホーヘンツォルン家に對する全歐洲の合縱連衡を見るに至らざれば真に幸たる可し。(註八)

註八 Vidor, p. op. cit., p. 3 & pp. 4—5.

先づ伊太利 は三國同盟の一員として獨逸に親密なるべき理なれども元來彼が此の同盟に加入するに至りしはナポレオン三世が獨立統一援助の報酬としてサボイ、ニースを略取せしに含む所あるに乗じ、又マツヂニの所謂「伊太利の相續財產たる北亞非利加及び地中海に於ける權力爭奪上佛國より被る可き襲撃を恐る」を利したるビスマルクの陰謀の美事に成功せるに因る。即ちビスマルクは

マツデニを煽動せむが爲には

伊太利と佛蘭西とは地中海に於ける相互の利益上協同すると能はず。もと地中海たるや二友邦の間に分割し得ざる遺産財産にして然もそが佛に二倍する海岸線を存する伊太利に屬す可きこと言を俟たざるなり。地中海上の帝國建設は伊太利の常に忘る可からざる所、其爲政治家の目標とすべき所、又其内閣の基礎的政策たるべき所なり(註九)

と云ふが如き書を送るを辭せず、後英佛密約の締結を探知するや、忽ち佛を勸めてテュニスを占領せしむるに至れり。伊太利の官民は茲に火の如く激昂し、人種上地理上歴史上經濟上信頼補翼すべくして反目争闘すべからざる佛國に背き自ら求めてビスマルクの術中に陥り三國同盟に加入せり。之を以て三國同盟加入の徑路となす。

然るに年月の経過は一時の感情に驅られたる伊人をして冷静ならしめ、伊佛通商條約の廢棄に其對佛輸出四億六百萬法を一舉にして二億千八百萬法たらしめ、又一八八二年一億二千七百萬法に過ぎざりし負債を三年にして二億千二百萬法

に達せしむるが如き犠牲を供して得たる三國同盟約款には自家直接の目的たる地中海に關する保障なき事を發見せしめたり。一八八六年三國同盟第一期更新の前日伊太利外務大臣ド、ロピラン伯が公言して

一八八二年に於て吾人は同盟の締結を交渉したりと云はむよりは寧ろ哀願したるの觀ありき。然も締約後吾人は大陸戰の危險に脅迫せられつゝ海戰に對する何等の保障をも得たる事なし。されば余は自ら進んで獨逸宰相と會合し新商議を開くを避けむと決心せり(註十)

となせるは即ち伊國が過去の輕卒なる行動の邦家百年の大計に非るを悟りたる確證として可なり。されば十九世紀の終末以來、或は通商條約の改正に、或は紅海問題の解決に、或は伊國艦隊のツーロン訪問に、更に或はトリポリ協約に佛伊兩國の親交大に加はり、一九〇三年十月伊王巴里を訪ふや翌年佛國大統領之に答へて伊國を訪ひ、斯くて兩國の意思自ら疎通し其合理的要求が何等矛盾する所なきを覺ると共に、多年の經驗に同盟國としての獨逸の舉措の如何なるものなりやを教えられたる伊太利は三國同盟に對し甚だ曖昧なる態度を持するに至れり。

今三國同盟の事實上二國同盟たる例證として吾人は前後三つを示す可し。伊佛兩國の宣言、アルゲシラス會議、巴爾幹問題即ち是れ。

一九〇二年三國同盟の更新に當り伊太利政府が決して此の同盟を佛國に對する侵襲の爲に利用することなかるべき旨を明言して自國の地位を全く防禦的たらしめたと呼應し佛相デルカッセは宣言せり。曰く

三國同盟あればとて伊太利の政策は直接にも間接にも佛國と衝突することなく従て外交上又は軍事上如何なる場合にも佛國に對する威嚇の原因たることなく、且つ如何なる形式に於ても伊太利は佛國攻撃の手段たり助力たることあり得べからざるなり云々。(註十二)

次で一九〇六年四月の頃獨逸新同が頻りにモロッコに於ける伊國の態度が獨逸に不誠實なるを批難せるに對し伊太利政府は半官報をして實に次の如く辨明せしめたり。

伊太利はトリポリ協約に依てモロッコにおける佛國の利益を認め、其進捗を許し、之が代償として佛國をしてトリポリに於ける伊太利の利益と其進捗とを承

認せしめたり。若し佛國にしてトリポリに野心を挟まむか、伊太利は勢ひ兵力に訴へて之を阻止せざるを得ざる可く、事茲に至らば獨逸二國亦同盟條約上佛國と闘戦せざるを得ざる憂あり。然るにトリポリ協約あるが爲に此の憂患なしとせばこれ實に三國同盟の爲に大に利益とする所にあらずや。况んや、ビュロー、宰相自ら伊相ブリネッチに對して、伊佛協約は三國同盟を補充す。何者三國同盟の目的たる平和は伊佛の交驛に依て最上の確保を得ればなり」と明言せるに於てや。アルゲシラス會議席上伊國の地位の不誠實を論ずるは失當なり云々。

辭令の妙を極めて而て真意の存する處を付度するに苦しまざる可きにあらずや。

以上尙ほ忍ぶ可しとするも彼が最近の紛争に處して採れる政策に至ては遂に三國同盟の實質的消滅を前提するにあらずんば到底解決の道なきを奈何せむ。

前首相フォルナスが議會に於て埃國の巴爾幹政策に頗る激烈なる攻撃を加へ、伊國にして一朝闘戰の虞あらむには其第一の敵國は即ち是れ現に同盟國たるの

露國なるの形勢存するを説けるが如き(註十二)外相チットニーが二州合併問題に關して英國首相アスキス外相グレイの兩氏と同一の意見を發表し、又露伊兩國親近の結果今後相共に塞耳維、モンテネグロをして平和を保持せしむる機助言を與ふるに至るべしと宣言したるが如き、露國外相の議會に於ける演説が合併問題に關する英佛伊露四國の意見の一致を報ぜしが如き、更に昨年四月二十六日佛國大統領フワリエールがウイルフランシ市に於て佛伊西三國艦隊の觀艦式を行ひ、遡ること三日にして前英皇露國のマリー皇太后と相携へて公式に伊王を訪問したるのみならず、十月下旬には露國皇帝亦伊太利に至り、何れも交驩の狀察す可きものありしが如き、徐ろに吾人をして、孰れか是れ盟邦？孰れか是れ友邦？の感あらしむると同時に、埃國半官報ノイエ、フライエ、ブレッツセの伊太利は露國に與して三國同盟を破壊せむとすてふ痛歎と、獨逸皇帝が伊太利を同盟國視せざる前參謀次長フオン、シュエリッフェン、伯の意見に對する同意(註十三)とに首肯せざるを得ざらしむ。最近伊太利が銳意アドリアチック海軍備の充實を務め、軍令部長ベツト・中將は、埃國の二隻建造に對し、伊國は三隻を建造せざるべからずと明言して一

萬九千噸の戰艦六隻を建造し、埃國軍港トリエストと呼應すべきヴェニス軍港を修築して將來地中海方面より海軍力を此の地に轉動せしめむとせるに對し、埃國亦ポローラを初め諸要地に軍事的設備を施し、ドレツドノート型戰艦四隻の建造を計畫せりと云ふ。是れ豈同盟國間に發生すべき現象ならむや。

既に然りとすれば伊太利が獨逸のトリエストを奪ふて商港となし、ポローラを武装して軍港となし、勢せずしてアドリアチック海の霸王となるを傍觀すべきや否やと云ふが如きは殆んど問題をなさず。人或はトレンチノ(Trentino)を伊に許せば可なりとなすも、トレンチノの一地は果して伊太利が彼の恐る可き強國と接觸するの危険とアドリアチック制海權の喪失とを償ふて餘あるべきや如何、若し獨逸にして伊に贖るにトリエストを以てするの勇あらむか、多年之に垂涎せる伊國の膨脹主義者(Irredentist)も埃國併吞を承認すべきや、未だ俄に測り知る可からざるものありと雖も、トリエストはこれ埃太利の生命、埃太利全土を收むるとも此の一港に及ばざれば正に龍を畫いて睛を點せざるの恨あり、到底全獨逸主義者の肯んず可き所にあらざるなり。

著者 André Panfiliu, France and the Alliances, New York, 1908, p. 88.

註十 長岡善一氏最近世界外史三三三頁以下

註十一 Tardieu, op. cit., p. 80

註十二 國家學會雜誌第二十四卷第一號小野塚博士以國に於ける最近の状況七頁

註十三 獨逸皇帝は毎年一月二日各司令官を宮中に召して宴を賜ひ獨逸帝國の軍事上の地位を演説せらるゝを常とす。然るに一九〇九年は演説禁止中の身におほすを以て一月號の「ドイッチェ・レヴァー」に現はれたる前參謀次長の論文を朗讀し是れ朕の所見と一致すと稱へりしが、其一節に伊太利は既に三國同盟を離れ澳と互に相善化するに至れり云々の句ありしなり。

次に佛蘭西の地位より見れば獨逸の埃國侵略は歐州に於ける佛國勢威の根本的絶滅を意味す。従て二洲合併問題の如きに對して抜く可き劍を有せずと唱へて同盟國の苦境を顧みざりし同國も茲に至つて死力を盡して妨害を試むべし。論者或は佛國の好意的中立を得るの代價としてアルサス、ローレーンの二洲を返却すれば可なりとなすと雖も、自國を一統して帝國たらしめし偉大なる戰勝の象徴と失ふは果して獨逸の敢てする所なる可きか、假に一步と讓つて獨逸二洲

を割受するも佛國は斯くして二等國に下るを甘んず可きか、甚だ疑ふ可き問題なりと云はざるを得ず。轉じて

英國より觀むか、一朝獨逸の大望成就の晩には地中海上の地位幾々乎として危きものあり、東洋航路の側面防禦の爲にはクリミヤの野に一戰を賭するを難せざりし彼は決して這個傍若無人の行動を看過する能はず、必ずや歐洲の大合戦を組織して高手の政策に出づ可く其際直に旗下に參ず可き強國は即ち北方に虎踞龍蟠せる

露西亜帝國 ならずんばある可からず。夫れ埃國は全露西亜主義の呱呱の聲を掲げ、然も埃國政府の保護に依て第一回會議をブラーグに開くを得たるの地なり。唯「スラブ人」は諸處に散居せると種々の國語を使用せるとに依て團結力弱く、一旦埃國政府が前策の非を悟るに及ぶと共に獨逸人、マヤール人等の享くる自治權其他の特權を得るに至らずと雖も、數より云へば二千二百萬獨人に二倍し、マヤール人に約三倍し、數十年來母國の救済を望んで現ハツプスブルヒ業に對してすら不滿の情を抱くもの、何ぞホーヘンツォルンレンの麾下に立つを

恐ばひや。獨兵南してビスマークの所謂こゝに主たるものは即ち歐洲に主たり得べき形勢の地ボヘミアに闖入する時は即ちチエツク人の襟を本國に飛ばして救援を請ふの時なる可く、從て又克薩克の馬首伯林を指すの時なる可し。

更に歴史に徴するに埃匈國に對する野心は獨逸に先ちて露國に發し、獨逸帝國統一の以前從て小亞細亞經營、土耳其壓迫波斯侵入の如きは夢想だもせざりし時代、露國は早く埃國を祖上の魚たらしめむと欲せるなり。埃國の名將ラデツキヤ(Radecky)元帥は八十年前此の關係を論述して曰く、

露は是れ埃の最も危険なる隣國、二國が絶えず平和を維持し得むと信ずる能はざる所なり。今日に於て其人口は既に我に倍し且つ出産率の高さや五十四年にして之を二倍し百八年にして四倍すべく、且つ農工業を保護涵養せば優に世界に冠たる可し。然るに埃國にはブコヰイナ(Bukovina)よりクロアチヤ(Croatia)に跨り露人と言語宗教を同する有力なる一團の民衆の露人の征來を待てるあり。而て露埃戰爭を避け難きに至らしむる有力なる原因は土耳其に存す。蓋し露國は地理上ボスフォラス及びナウンド(波羅のより北海に通ずる三海峡の中最安全なる通路を指す譯者註)の

開放を絶對的必要とするに埃太利亦其主要動脈たるダニユール河を自由に用ひむとせばダーゲネルスをも自由に用ふる要あればなり。(註十四)

此の後埃國の勢力漸次失墮して自國內に於ける露人の跋扈を防ぐ能はず、匈牙利の一部に存する排露的氣風亦重きをなすに足らずして形勢の推移に委ねられむには、露人フアデイエフ(Rosislav Fedejev)將軍の所謂露國濟度の唯一の方法たる埃國の解體(註十五)を見る日必ずしも遠からざりけむと時恰も教興の氣運沛乎たる獨逸は自家發展上露國に對峙して埃匈を保護し機の至るを俟て其併吞を斷行し内には千百萬を數ふる自國民の運命が曩日波羅的沿海の露領に任せし者の如くならむを防ぎ、外には巴爾幹小亞細亞波斯に達すべき捷路を確保せむとするに至れり。ハツン(Brunst von Halle)が嘗て「中世の後半に於ける獨逸の歴史的使命が、スラブ人を東に驅逐するにありしが如く、近世に於ける獨逸の使命は、スラブの手よりダニユール河口を奪ふて彼が西漸を抑止するにあり」と論ぜしは即ち之を説明せるもの也、從つて知る、露獨の利益は三度埃太利匈牙利に衝突するを。

註十四 O. Ellisbacher, Modern Germany, 3rd Edition, London, 1909, p. 108.

註十五 Secus Victor, The Future of Austria-Hungary, London, 1907, p. 17.

第四項 解決如何

一度波斯に衝突し、二度小亞細亞巴爾幹に衝突し、三度埃太利匈牙利に衝突せる「チエートン人種」と「スラブ人種」との利益は到底調和の途を尋ねるに由なく、前者は後者の進路を扼し、後者は前者の發展を妨げ、露にして退かずんば獨逸は進む能はず、全獨逸主義にして抛たれずんば全露西里主義成るの期なく、結局兩國互に于戈に訴へて運命を決するの外なきを見る。

此の露獨の將來に關し露の弱點を指摘して到底勝算なかる可きを暗示するもの洋の東西其人少しとせず。即ち埃人エミール、ライヒが露國の特質たる商業の幼稚、交通の不便、資本の缺乏、人種的言語的宗教的心理的不統一等を痛論して、露人結合の唯一の連鎖は八九十萬の軍隊に依て維持せらるゝ政治上の表面的統一のみ露國を研究する愈々深くんば露國の大に恐るゝに足らざるを悟る愈々深かる可しとなせる(註一)は以て福田博士が三十九年末露國社會並に經濟組織發展の程

度幼稚なるを論ぜる舊稿を校訂するに當り、當時露國の兵力又は財力に恐るゝ論者少からず、而して今果して如何。予何ぞ先言を誇るものならんや(註二)と附記して實は大に先言に誇られたるに比すべく、デロンが「單獨に獨逸と戦はむには露國皇帝及び露國皇室は勿論恐くは露國の安全に至る迄一切總て絶滅せむ、如何なる讓歩も屈服も尙ほ之に優る可し」と悲觀せる(註三)は獨逸帝國主義者が露國兵力の脆弱を罵倒し且つ其國內叛亂の危険を喋々して埃國能く單獨以て露に對すべしと樂觀せる(註四)に應ずべし。もし夫れ之れに加ふるに波羅的艦隊の全滅に伴ふ海上の無力と滿洲野戦より來れる陸軍力の不足とは獨軍をして十四日を出てずして無防禦状態にある聖彼得斯堡を占領せしむ可く、其局波羅的沿岸諸州を失ひ、且つ巨額の償金を拂ふの止むなき悲運に陥る可しとの恐怖あるが故に、三國干涉當時の日本以上の屈辱を忍んで、獨帝の脅迫的請求を容れ、無條件に埃國の二州合併を承認したる一大事實を以てせむか、何人と雖も容易く獨の優勢を信ずべし。然り乍ら戦後の疲弊は戦後の疲弊にして永遠の疲弊にあらず。露國の文化一段の進歩を創し、海軍再興せられ、陸軍整頓せられ、而て財力増進し國內統一せらるゝ

日雖ずしも遠きにある可からず。其時來らば獨逸に侵入せる軍隊が所在食糧を得べきも露國に侵入せる軍隊は此の望なしと云ひ、首都陥るも露國は何等大痛痒を感ぜずして戦争を繼續し得べきに反し伯林陥れば獨逸は崩壊すべしと云ひ、更に露國々境より百十里にして伯林に達すべきに獨逸國境よりは露都迄四百五十哩、莫斯科迄六百哩ありと云ふが如き事實は著しく獨逸の樂觀を減殺するに至る可し。

註一 Ernst Reich, *Success among Nations*, London, 1904, pp. 193—196.

註二 經濟學研究 一六三頁

註三 *Nineteenth Century & After*, Aug. 1909, Art. "Great Britain and Russia: an Alliance or an Illusion" by Dr. E. J. Dillon, p. 222.

註四 *Unsere Zukunft liegt auf dem Wasser?* München, 1905, S. 201 ff. 著者の露國陸海軍の價值少きを論ずる處は大體に於て讀む可し。但露國一度大戦せば高加索人中央亞細亞の土耳其人其他の回教徒、波蘭人、小羅西亞人、波蘭人、波羅的沿海住民等の獨立戰爭叛亂暴動現はる可しとし更に日本支那亦此の機に乗じて火事場泥神的所業に出づ可しと斷ずるに至ては寧ろ一驚を與せざるを得ず。

按ずるに國際上殆んど孤立の地位に立つ獨逸が佛と結び英と和し、經濟上自給

自立戰數載に亘つて顧みざる農業國と戰ふは愚之より甚だしきはなし。されば「徒に獨逸の欲する有物をも有せざる露國と係争せむよりは、如かず寧ろ彼を驅つて東方を經營せしめ其虛に乗じて着々經營の歩を進めむには」とは歴代爲政家の期せずして一致したる所見、ビスマルクが甘言一番露國の使命は亞細亞にあり露國を指いて亞細亞に文明を代表すべきものなしとし、美名以て侵略の醜を蔽ふて東洋征略を促したる、現皇帝陛下が一擒一縱巧に露帝を翻弄し、前には黃禍に對する西歐の防衛者と尊崇し、後には太平洋上の提督と煽動し、滿洲に適用なしとの宣言に英獨協商をも空文たらしむる等百方手段を講じて其野心を挑發したる又遂に日本と衝突の徵あるや雄辯を以て説き、親翰を以て勸め、使節を以て獎まし、開戦の機を早めたる後、頻りに好意を示しつゝ、或は新通商條約の締結を強ひ、或は鐵道線路の新連絡を迫りて利を收め、且つ波斯土耳其巴爾幹に策略を弄したる、何れも其證據たり。

然も此の如きは戰敗の結果獨逸の敵本主義を覺り、東隅の失を桑榆の間に償はむとする露國の能く忍ぶ可き所にあらず。されば同國內に隱見せる排獨的風潮

は益々激烈となり、全露西亞主義と獨逸憎惡の念とは結局歸一すとのノルマンの喝破(註五)正鵠を得たるを思はしめずんばならず。風雲の變果して如何なる日如何なる處に如何なる新生面を現出し來る可きか讀者と共に刮目して全露西亞主義の將來を觀ん。

註五 Henry Norman, All The Russias, New York, 1903, p. 396.

第四章 獨逸の帝國主義

第一節 獨逸の勃興

「英國は海を支配し、佛國は陸を支配し、而て獨逸は雲を支配す」と冷罵せしボルナイルの舌根未だ乾かずして、早く既に丁抹に勝ち、埃木利を破り、佛蘭西を斃して四分五裂の聯邦を統一し終るや、其國民主義を抛つこと弊履の如く、多年蓄積せし政治經濟的實力を提げて國際競争場裡に鹿を逐ひ、人をして轉た其活動の縮腕すべからざるを恐れしむるもの、是れ即ち帝國主義の獨逸なりとす。

固と彼が地は確確にして沃野千里に跨る北米合衆國の比にあらず。内憂外寇交々起りて蒼生英吉利の如き平和を得ず。殖民地なく、海運なく、良石炭なく、好氣候なし。運河鐵道之を開設するを要し、港灣河流之を修築するを要す。斯くの如くして幸うじて勃興せる産業は出て、先進英米二國の夫れと争はざる可からず。加ふるに内外の形勢重大なる軍備を要して重税を負ふ。何等の點より見るも獨

國際上の優勝者たり得べきにあらず。一八四四年バルメルストーン卿伯林を訪ふや、其貧弱未開に驚きて思へらく、機械的技術に於て、獨逸到底英國の敵にあらずと。宜なる哉、英國自由貿易論者の衆口一致、獨逸の永久に農業國たる可きを斷ぜしことや。

然かも彼が抱負の大にして精力の偉なるや、百折撓まず千挫屈せず、時難愈々溢くして益々其本領を發揮し來り、六十年の後、軍事に、政治に、商業に、工業に、復吳下の舊阿蒙にあらず。官府學者グスタープ、シュモラーをして自ら其著商業政策と權力政策 (Handels und Neapolitik) の第三頁に「百年の昔は農夫と工匠と、思索家と詩人とよりなる貧弱の小國なりしもの今日に於ては其隆盛に於て、其大工業に於て、其技術に於て、其軍備に於て、其政治に於て、將其權勢に於て、遙かに四隣の諸國を超越するの強大なる帝國と化せるを、誇り且つ感謝せしめ、吳越相容れざる仇敵佛蘭西の論者をしてさへ其大著英國論を結ぶに次の一節を以てせしむるに至りぬ。曰く

世界は英國の勝利の偉大に驚き六十年の太平に眩惑せられて思へらく、天下復

アングロサクソン人種に敵すべきものなしと。…然るに南阿の一戰突如として此の崇敬の念を減ぜしむるに至れるの時、世界は莊嚴なる新光明の燦然として登るを見たり。看よ、百年の苦心經營空しからずして亭々たる大木となり、時に至つて花を點じ今や、技藝美果の累々として垂るゝあると。英國は此の失敗を償ひ、更に帝國主義に依て尙ほ舊時の盛榮を維持するを得べしと雖も、世の信認は既に舊の如きを得ず。砲彈轟く間、喇叭響く間、歌曲聞ゆる間、祝杯舉げらる間、カントの獨逸、ビスマルクの獨逸、ワグナーの獨逸、要之、進歩的建設的強大なる獨逸は二十世紀の支配者として起てり(註一)。

蓋し獨逸の將來は國際上最大未知の一、今正に分水嶺頭に立つ彼が進んで海上の覇者となり世界的強國に位するか、退ひて二等國と化し埃伊佛の列に加はるか、は頗る趣味深き問題なりと云はざるを得ず。唯吾人は一派の論者が「ナポレオンをして戰陣勿忙の間尙ほ二ヶ月をワルサウに徒費せしめしワレウスカ夫人 (Madame Walewska) の如きを出せる波蘭女子の同化力強きを喋々し、他日埃甸帝國と同じく獨逸帝國の建設を見、然も其結合は唯僅に外部的關係に止る可し」と預言し

(註三)或は北獨逸と南獨逸とが人種を異にし、宗教を異にし、經濟狀態を異にし、又地理的狀態を異にするが爲に鞏固なる國家構成の一大要素たる思想の統一(註三)に難きを捉へ詩人シムルンの「Zur Nation auch zu bilden, Ihr hofft es, Deutsche, vergebens!」(獨逸人よ汝を打つて一國となさむとするは望み難き事なるぞ)(註四)てふ絶望の聲に和して、その將來は一に分裂の外なしと斷ずるに賛意を表する能はず。吾人と雖も亦獨逸國民は決して一致結合せず、歴史以前より中世紀に至り、中世紀より三十年戦争に至り、三十年戦争より普墺戦争に至る迄兄弟牖に闘ぎたるを知り、又次て此の關係が帝國成立後にも作用し、合して一帝國を組織するにも拘らず、互に融和し難き二十五個の聯邦が帝國政府の勢力の増大を忌み、聯邦政府の勢力維持に勉むるより、國富充實と財政缺陷との著き對照は獨逸の政治的財政的混亂を曝露する探燈となり、財政の紊亂は社會民主黨以上、法王全權論以上に獨逸帝國の危險物(註五)たるを示し、昨年ビュロー公遂に財政改革案を提出するや南部農業地を代表する中央黨は地主黨富豪黨たる保守黨と握手して遺產税の制定相続税の改正を排斥し、之に代ゆるに専ら北部商工業者の負擔に歸すべき消費税の新設を

以てし(註六)南北獨逸の利害の衝突よりビュロー宰相の辭職をも惹とせざりしを知る。知つて而て論者の所説に賛せざる所以のものはアルサス、ローレーンに住する羅典民族も漸次獨化せられ、民族性を頑守するに死力を盡して變ぜざりし波蘭人も既に一九〇八年初葉普國議會を通過せし強制土地買収法案が實行せらるゝと共に漸次其勢力を失墜すべきを察することは是れ一なり。今日の獨逸民族は僅かに一普魯西の專横を憤り、隆興を嫉みて、南北相争ひ、東西相討ち、徒に希臘諸市の轍を履んで第二のフイリッププをして名をなさしむるを顧みざる迄に愚なりと信ずる能はざる事是れ二なり。議會場裡農業黨と商工黨との衝突の如きは先進英國は勿論、後進日本にも之を見る可く、然も依て以て國家の分裂を來すが如き事例なく、又なかる可きを思ふ事是れ三なり。况んや、内を眺むればビスマークの怪腕になる獨逸關稅同盟の益々經濟關係の均一を來すあり、外を望まむか、列強の壓迫と發展の要求とは日に月に強きを加へて内争の餘力を存せしめざるあり、相俟ち相應じて其協力協働を促す可きに於てをや。

以下獨逸帝國主義の過去現在を見て其將來に及ばむ。

註一 Victor Rérard, *British Imperialism and Commercial Supremacy*, trans. by H. W. Foskett, London, 1905, p. 295.

註二 Emil Reich, *Success among Nations*, London, 1904, pp. 189—191.

註三 Friedrich Ratzel, *Politische Geographie*, München und Leipzig, 1897, S. 207.

註四 A. Kirchhoff, *Mensch und Erde*, Leipzig, 1905, s. 76.

註五 Jawsen, *The Evolution of Modern Germany*, London, 1908, pp. 406—407.

註六 此の最近の財政改革に付ては國家學會雜誌第二十四卷第一號上杉助教獨逸に於ける憲法に關する近事六二—六七頁及び國民經濟雜誌第七卷第二號第三號瀧本美夫氏獨逸帝國の財政改革と宰相の辭任の二篇有益なる資料を供す。

第二節 殖民政策

第一款 殖民政策の發生

吾人は既に人口の増加が殖民地獲得の必要を生ずる事を叙述せり。今獨逸に徴するに一八七〇年より一九〇七年に至る期間に其人口は四千八十一萬八千人より六千七百七十二萬餘人に達し、之を同期間に於ける英吉利の三割二歩の増加に比して五割を示す。此の如きは世界廣しと雖も米露を措て見る能はざる所然も米國の増加は移民に俟つ事多く、露國の數字は統計上の不完全より容易に信じ難きを知れば獨逸人口増殖の趨勢の如何に偉大なるかを察す可し。况んや死亡率の減少出産率の減少を償ふて餘ある結果(註一)文明進歩に伴ふ増加率減退の原則は却て反對の適用を見るに於てあや(註二)。

註一 獨逸帝國人口の五分の三を有する普魯西に於て左の趨勢を見る。

人口千人の出産率(死産を除く)

以上死亡率

一八五一—一八六〇

三七、六〇

二六、八〇

六一—七〇

三八、三〇

二七、〇〇

第二節 殖民政策

第四章 獨逸の帝國主義

七一	七五	三八、八〇	二七、七〇
七六	八〇	三九、二〇	二五、四〇
八一	八五	三七、四〇	二五、四〇
八六	九〇	三七、五〇	二四、〇〇
九一	九五	三七、二〇	二二、八〇
九六	一〇〇	三六、七四	二一、二〇
	一九〇	三六、五二	二〇、七〇
	一九〇	三五、八五	一九、三〇
	〇二	三四、七三	一九、九〇
	〇三	三五、〇四	一九、五〇
	〇四	三三、五〇	一九、六〇
	〇五		

一九六

註二 獨逸人口増加率(一ヶ年百萬人につき)

一八二〇—一八八五	八、九〇〇人
一八八五—一九〇〇	一〇、七〇〇人
一九〇〇—一九一五	一一、二〇〇人
一九一五—一九三〇	一五、〇〇〇人

(O. Hirschfelder, Modern Germany, 2nd Edition, p. 32.)

獨逸農業調査第一圖(一八八二年)より第二圖(一九一五年)に至る迄人口増加の割合は一割五分五厘なりしが第二圖より第三圖(一九〇七年)迄には一割九分二厘餘を示す。

茲に於てシュモラーが一九六五年に於て獨逸人口は一億四百萬人に登る可しと論じ、ヒンツベ、シュライデン(Hinze-Schleiden)が一九八〇年には一億五千萬人を算すべしと推し、ルッア、ポリーリョーが一世紀内に二億人に至る可しと察する(註三)を否定し難き増殖率に對し國內の富源果して如何と顧みむか、其土地と氣候とは約四千萬人に對する穀物生産力あるに止り、將來國民の半數が外國より食料品を購入せざる可からざる恐あるに此の食料輸入を償ふに足る餘利生産物なきは勿論、多額の貴金屬なく、有用の植物なく、一袋の棉花を産せず、又一捆の生糸をも出さず、銅と云ひ、羊毛と云ひ、亞麻と云ひ、何れも皆之が供給を外國に仰がざるを得ざる状況にあり。

北歐に偏して貧弱なること以上の如き生産力を以てしては到底自給自立、所謂世界の三大帝國の壘を摩し難く、勢ひ熱帶温帶の邦土に新領土を獲得して自國經濟力の不足を補ひ、進んで之を基として更に地方面に新市場を開拓するにあらず

んば、他日凋落の悲運に陥るの憂あるを悟ると共に、六十年前學者机上の空論として輕侮せしリスト(List)ロシュヤー(Roscher)トライチケ(Treitschke)ツロイセン(Droysen)シリーマン(Schliemann)等の殖民地要求論は獨逸上下の輿論と化し、一八八四年以來(註四)其可能なる否とに關せず、又之を希望する否とに拘らず、實行すべく、又實行せざる可からざる(註五)世界政策を採つて國際競争場裡に出現するに至れり。

註三 O. Elzbacher, *op. Cit.*, p. 125.

註四 此の點に付ては、ヘリタスに從ふ(Vertus, *The German Empire of To-day*, London, 1912, pp. 125-126 & p. 201.)

註五 *Unsere Zukunft liegt auf dem Wasser?* München, 1905, S. 70.

然るに憐む可し、彼が國內四分五裂の小邦を統一し、頻りに窺窺の念を抱く強敵に對する防備に力めつゝありし間、豊饒肥沃の邦土は早く既に列強の割取する所となり、彼が起つて雄圖を施す可き地を求むるも容易く其意を遂ぐる能はず。前日組織的移民に反對し本國を見捨てし獨逸人の如きは獨逸人として保留するの

價值なしとせし非干渉放任の政策を悔むの念禁じ難き者あり。苦心慘憺漸くにして亞弗利加の一角獨逸國旗を樹立し、次で東洋に來つてラドロイン群島及びニギニアを奪略し、宣教師の殺害を口辭として電光石火膠洲灣を占領し、更に南阿戰爭に乗じて英米と共にサモア群島を分割せりと雖も未だ以て豺狼の慾を満たすに足らず、閔々の情を極めて四方を望む。ピロー公議會に於て遺憾なく心事を吐露して曰く、論者或は支那の分割を説くと雖も吾人は決して分割を起さざるべし。唯吾人は事件が如何に發展すとも吾人自らは手を空うして終る可からざる機に準備せむと欲するのみ。汽車の出發時間を決する能はざる旅客と雖も、其愈々發車する時には乘遅れざる事は確言し得べきなり云々と。

第二款 殖民地の現在價值

獨逸殖民地の總面積は百二萬七千方哩、本國面積の五倍に垂んとす。然るに向ほ且つ不滿の情甚だしきは何故なりとするか。

先づ殖民地の人口吸收力を檢せむに、殖民地在住白人總數は一九〇五年度に於て八千四百四十三人、一九〇六年に至つては五千六百六十八人、一九〇八年末に於

ても一萬人内外に過ぎず(註一)然も其大部分は軍人たり、官吏たり。殊に殖民地
 總面積の九割を占むる亞非利加主要殖民地に在ては白人一人に對し五人、獨一人
 人に對し七人の軍人官吏あり、結局定住獨逸人僅に七百二十三人なりと云ふ(註二)
 獨逸由來人口の稠密を以て鳴ると雖も豈僅々一萬の人口を養ふに歳々二百五十
 萬磅を費やすの必要あらむや。不滿の聲ある亦當然なり。

註一 左の表による。

地域	面積(平方基米)	人口	白人數	
			一九〇五年	一九〇六年
東亞弗利加	九九五、〇〇〇	七、〇〇〇人	一、八七三	二、四六五
南西亞弗利加	八三五、一〇〇	二〇〇	—	—
カメルーン	四九五、六〇〇	三、五〇〇	八二六	八九六
ニューギニア	二四〇、〇〇〇	三〇〇	四六六	五二九
トールギア	八七、二〇〇	一、〇〇〇	二二四	二四三
サモア	二、五七二	三三	三八一	四五四
マインヤル群島	四〇〇	一五	八四	八三
州	五〇一	三〇	四、七二八	一、二三五
東カロリン群島	—	—	九二	七七
西カロリン群島	—	—	四七	七三
マリアン群島	二、〇七六	四一	三二	三三

合計

八、四四三

五、六六八

(Dawson, op. cit., pp. 387—388.)

政治年鑑に依て亞非利加殖民地の人口を示す。(一九〇八年一月現在)

地域	白人數	内獨逸人	内軍人	合計	註ニ エリス、マーカ の亞非利加所在 主要獨逸殖民地 に關する調査左 の如し。
東亞弗利加	二、八四五	二、〇一四	不明	—	—
南西亞弗利加	八、二一三	六、二一五	四、六〇〇	—	—
カメルーン	一、一二八	九七一	一四九	—	—
トールギア	二六八	二三九	不明	—	—
合計	一二、四五四	九、四三九	四、七四九(?)	—	—
カメルーン	四〇八	—	—	—	—
トールギア	四九	—	—	—	—
東亞弗利加	五一〇	—	—	—	—
南西亞弗利加	?	—	—	—	—
合計	九六七	—	—	—	—
内外國人	二四四	—	—	—	—
獨逸人	七二三	—	—	—	—

第二節 植民政策

(Nineteenth Century & After, Oct. 1905, Art. "The German Danger to South Africa," by O. Elzhoher.)

獨逸殖民地人口收容力の少きや以上の以し。されど殖民地の價值は此の一點を以て判じ終る可きにあらず。ローレンツ曰く「濠州、加奈陀、及び南阿が英帝國の勢力を増進するは單に英國の領地なるが爲にあらず、又數百萬の英國人及び其子孫が在住せるが爲にもあらずして、實に是等の殖民地との貿易に依て母國の富力從て國防力を増進するが爲なり」と(註三)。既に然りとすれば吾人は獨逸殖民地の經濟的價值を検せざる可からず。今貿易關係を取らば、一九〇七年度に於て獨逸本國と殖民地間の貿易六千五百八十九萬三千馬克(本國への輸入二五、九三二、千馬克)之を本國の總貿易額百六十一億三百九十萬馬克と比し來る處、僅に千分の四に止り、九牛の一毛なる形容詞は一點の變更をも加へずして茲に適用せらるべし。殊に殖民地中最も重要な亞弗利加各殖民地の如きは軍人官吏の衣食住用品による莫なる輸入超過を示し、徹頭徹尾生産的殖民地にあらずして消費的殖民地たり(註四)。一九〇八年三月十日、殖民大臣デルンブルヒ帝國議會豫算委員會に説明して曰く「南西亞弗利加百五十萬磅の輸入に對し輸出なるもの殆んど存せず、然も輸入

は殆んど皆是れ一萬人の獨逸人支持に必要な物品なり」と(註五)。殖民地の經濟的價值如何と云ふが如き、茲に至つて問題をなさざるにあらずや、如何。

註三 Dawson, op. cit., p. 343.

註四 一九〇七年度の獨逸の亞弗利加殖民地貿易一覽

	輸入 千馬克	輸出 千馬克	入超
カメルーン	一七、二九七	一五、八九一	一、四〇六
南西アフリカ	三二、三九六	一、六一六	三〇、七八〇
東アフリカ	二二、八〇六	一一、五〇〇	一一、三〇六
トール	六、七〇〇	五、九一六	七八四

主要輸出品(千馬克)

	カメルーン	トール	東アフリカ	南西アフリカ
橡 樹 核	二、八五四	九八一		
全 油	一、三二八	四一八		
豆	七、六四一	一、〇九五	一、六一一	
象牙	一、〇七四		六四四	
玉 蜀 黍	二、七〇四			
一ツツ		一、一九九		
一ツツ			二、一四九	

銅	---	一、三四五	---
主要輸入品(千馬克)	---	---	一、二八三

南西亞弗利加	トーラー
綿糸	一七七
綿布	一、五九一
酒類	四〇二
鐵及び鐵器	二六一
麥酒	---
一、九六七	---
穀類	三、四四〇
糖類	二、六一九
木村	九五八

他の二殖民地に付ては金額の調査なく唯品目を示せるが其多くは上掲と同じく、白人の消費に終るものにして土人との交換の用に供せらるゝは僅に綿布の一部のみ。

註五 Dawson, op. cit., p. 303

轉じて更に獨逸政府が以上殖民地の獲得維持の爲に支拂へる代價を思考せむか、利害の數愈々明白なるものあり。吾人は獨逸の一世界主義者の主張するが如

く「獨逸皇帝陛下の世界政策の性質は何等攻勢的征服的色彩を帯びずして唯文化的なり」と信ずる能はざるが故に「殖民地の領有が獨逸國民の特性たる文化的使命に矛盾す」との高尙なる損失を此の代價の中に算する雅量なく、同時に又論者の所謂「獨逸の將來は海上にあらずして陸上にあり」との豫言に服する能はざるが故に「一八七三年及び一八八四年の海軍擴張案以上の巨大なる軍費は殖民地領有より生ずるものなり」として之を殖民政策の債務勘定に屬せしむるの勇氣なし(註六)。然りと雖も、其今日迄に殖民地に投ぜる十億圓の巨費(註七)と平均一年二千五百萬圓に達する年々の統治費補助金及び軍事費(註八)とに至ては全部之を殖民政策勘定の借方に記入せざる可からざるを承認し、之に基きて論者が「利益上より打算して殖民地領有は無益有害、國富浪費の奢侈物にして經濟上無智の行爲なり」とする(註九)管見に裏書するを躊躇せず。

註六 Unsere Zukunft liegt auf dem Wasser? S. 90, 155, 112 ff. und 156.

註七 戸田博士が殖民地統治費補助金、海軍鎮定費、損害補救費下附金等を合算推定せられしに從ふ(我獨逸國四一三—四一三頁)

註八 フォッソは二十五年前に殖民地費は全く國家に存せざりしこと、一八九八年にも

僅に六萬磅を要せしのみなること、然るに最近五ヶ年間は平均年額二百五十萬磅を要すること、財政上獨立せるはカメルーンのみなること、等を叙べて「殖民地は直接に間接に巨大なる支出に對し責任あり」と説けり。(op. cit., p. 389 & p. 404.)

註九 Unsere Zukunft liegt mit dem Wasser? S. 154.

第三款 殖民地の將來價值

現在は然し乍ら將來を決定せず。今日に於てこそ有害無益なれ、若し他日大に發展するの豫測あらむには、之を維持し保護する必ずしも是認し難きにあらず。吾人は豫め膠州灣が千九百七年度に於て五百八十七萬圓千九百八年度に於て五百二十四萬圓を支出せしめたるは是れ支那經營の策源地たる理由に出づとなし將來の希望少きを批難せざることを明言し、唯此の如き特別的理由なき爾餘の殖民地に就て觀察せむに、不幸にして獨逸殖民地繁榮の遅々たる根本原因は決して或は土着の法律慣習を蔑視し一に學究的官僚的なる軍事組織行政組織を強ひたりと云ひ、或は官吏の選擇宜しきを得ず、内國に失敗せし吏員の避難的赴任多かりしと云ふが如き枝葉末節に存するにあらずして實に殖民地の自然狀態に存し、從て現在の悲觀すべきと同一の程度に於て將來も亦悲觀せざる可からざることと

發見す。

獨逸の熱帯殖民地には熱病及びマラリヤ熱流行し就中カメルーン及びトローブには極めて悪性なる亞非利加熱猖厥を極め、赤痢亦其勢を逞うす。此の如き風土病は土人をも襲ひ、動物にも及ぶ以上、風土馴化と云ふが如きは一に妄想のみ。加之、周圍の寂寞は自ら郷土病ヤンセンを招き、粗悪なる食物は肉體を害し、惹ひて神経病となり、鬱憂病となり、癡狂となる。一言にして盡せば熱帯の特質と感化とは遺憾なく其影響を現はし、若し成立し得べき産業ありとするも土民を使役する栽培事業に止る可し。

反之、亞熱帯に位する南西亞弗利加は特に其南部に於て健康に適し、デルンプルヒ殖民大臣の如きは英領喜望峯殖民地に匹敵する人口吸收力ありと誇稱すれども、依然として肺病及び程度輕き熱病の流行あり、降雨乏しく土地焦燥、内地に入る數哩にして一水なく一木なく、荒涼サハラ沙漠と相如くを見む。固有植林としては稀疎なる草叢と矮小なる樹木あるにすぎず、組織的農業を發展せしめむすれば巨額の費用と勞力とを要す可く、牧畜業盛ならしむべしと云ふも必ずや遊牧を脱

する能はざるべく、鑛脈の富源噴すべきありと稱ふるも今日未だ重視するに足らざる也。

一步進んで交通状態に至らむか内地との天然的通路なるもの殆んど存せず、土人隊商の通路は僅に數呎の幅員を有せるにすぎざるのみならず、沿岸には良港稀に、國內には良河乏し。カメルーンには江灣あれども、波高くして貨物揚卸に危険あり、トコゴリにては公海に碇泊し土人の熟練を俟て個々の荷揚を行ふ外なきこと存するにあらずや(註一)。

註一 Keller, Colonization, Buxton, 1908, p. 546 et seq. Unsere Zukunft liegt auf dem Wasser? S. 151, Dawson, op. cit., p. 341 et seq.

夫れ失敗は之を改む可く、叛亂は之を鎮む可し。獨り如上自然的缺陷に至つては何の妙策か之を補正し何の手腕か之を改善するを得む。或は本國民の移住を奨励し或は内外資本の輸入を鼓舞し以て殖民地の進歩を希圖せし爲政家豈少しとせむや。カブソビ、然り、ホーヘンロー、然り、ビエーロー亦然り。而て今にして回顧一番する所、其何れか果して殖民地の絶望を救へしものにあらずや。

されば一九〇五年九月ワイースバーデン(Wiesbaden)に於ける急進黨大會が現時の殖民政策の繼續擴張に反對すとの決議をなせしを輕視する勿れ。又同黨の一議員が喝采聲裡萬一希望者あらば現殖民地を競買せむと絶叫せしを奇矯の言と嘲る勿れ。一九〇六年外務省所屬殖民局を獨立の殖民省たらしめむとせる計畫が端なくも議會の反抗を買ひてより、翌年末南西亞弗利加殖民地叛亂鎮定費三千萬馬克が殖民局長ポトビエルスキ、氏の私曲事件發覺に依る辭職に勇氣を得たる中央黨保守黨より痛烈なる反對を受け、ビコーローの雄辯もデルンブルヒの辯解も一六八に對する一七八の多數を以てせる否決の悲運を防ぐ能はず、其局議會の解散を來せしは殖民地反對熱の勝利を意味せるものにあらずして何ぞや。

第三節 中歐關稅同盟說(註一)

註一 之に關する研究は既に甚だ多し。例は

津村教授「獨逸の全獨逸主義と世界政策」

(國民經濟雜誌第二卷第二號八二—八九頁)

神戶博士「獨逸の新關稅法案と萬國自由貿易同盟歐洲關稅同盟及中歐關稅同盟」

原(國家學會雜誌第十四卷第七十七號)

河津博士「十九世紀に於ける歐洲商業政策の變遷を論ず」

(國家學會雜誌第十四卷第六十四號)

同上 商業政策 一〇五—一〇六頁

されば茲には順序上簡單なる叙述をなすに止む。

殖民地經營の效果舉らざるに煩悶せる獨逸は顧みて自己の周圍の諸國を視、何等かの奇計以て此の沃土を自國權勢の下に置かむ事を希へり。恰かも好し、北米合衆國經濟力長足の發展は歐洲の一部に米禍論を惹起し、維納に歐洲關稅同盟說生じ、巴里に萬國自由貿易說發するや、自國工業力の發展優に歐洲大陸諸國を壓し

て餘あるを知れる獨逸は歐洲關稅同盟が自國經濟的勢力を増進せしめ、遂には政治的勢力を進捗せしむるの所以なるを觀破して忽ち贊意を表し、後二說共に行はれざるを見ると同時に寛和なる中歐關稅同盟說を提唱し、或は米國の侵略を誇張し、或は歐洲人民の自負心を挑發し、進んで永遠の大利を收めむと欲せば眼前の犧牲は之を辭す可からず、不朽の繁華を樂まむと欲せば過去の怨恨は之を捨てざるを得ずとなし、更に其主張は先づ單に穀物關稅の撤廢に止めて他に及ぼさず、鋒銜を包み、禍心を藏して甘言至らざるなく、シモラーの如きはチェンパレーンが特惠關稅主義に依て英國政治上の地位及び國利民福に一新生面を開くも毫も異議を唱へざる可きを理由として他日世界商業の大勢の變遷に伴ひ中歐關稅同盟の企圖あるも之を目して對英國反抗の政策となし報復をなすべしと云ふが如き事ならむと希望するに至れり(註三)。

然りと雖も歐洲各國亦自ら知るの明ありて輕々しく獨逸をして其意を遂げしむるを許さず、加之、諸國の對米貿易關係は輕卒に米を捨て、獨に就くを利とせず(註三)。國內早くエーレンベルヒの如く三國同盟を變じて關稅同盟となすの、エー

トピア」なるを嘲る(註四)者ありて漸く成就難を覺ゆる頃、獨逸國內農業黨の勢力は一九〇二年農業保護主義による新關稅法案をして議會を通過せしむるに至り、歴史學派諸氏の健闘も全く畫餅に歸しぬ。

叙述の事を進めて茲に至り吾人はオスカ、アレキサンダーが其新著英國商業政策反動論に於て尙ほ米國の經濟的侵略を云々し、今日互に嫉視せる歐洲諸國が速かに此の危險の襲來を認識して豫め其防禦の手段を講究するに非れば、歐洲は必然米國の經濟的隸屬者と化し、次で政治的隸屬者と變ず可し(註五)と斷じて中歐關稅同盟税を主張せるを讀み、座ろに六昌十菊の威なくんばあらず。

註二 Scholler's Jahrbuch für Gesetzgebung, Verwaltung und Volkswirtschaft, 1904, 3. tes Heft, S. 23.

註三 柴崎壽次郎氏譯歐洲對米國關稅戰團(國民經濟雜誌第三卷第四號一一五—一二四頁)參照。

註四 河津博士譯商業政策一〇五頁。

註五 Oskar Alexander, Die Reaktion in der englischen Handelspolitik, Berlin, 1909, S. 28 ff.

第四節 全獨逸主義

第一款 意義及び批評

殖民政策效を奏せず、中歐關稅同盟說亦敗るゝに及んで氣鋭の獨逸は茲に第三策を提げて起てり。全獨逸主義即ち是れ也。

もと全獨逸(Alldeutsch, Anglice, Pan-Germ)なる語は獨逸に創まるにあらずして瑞典の詩人アルン・(Arndt)が甚だしく佛人を憎みて獨人を愛し、一八四一年其詩に於て、擴つてラインに達すべき使命ある全獨逸よと歌ひたるに始り、唯詩的感興を現はすの語に過ぎざりき。然るに約半世紀を経たる一八八六年ペーテルス博士(Dr. Karl Peters)發起の下に獨逸國內國民的協會の總會伯林に開かれたる結果、所謂獨逸協會(German League)の成立を見るに至りぬ。同協會は不幸にも内訌を生じて分裂し終りしと雖も、一度發せる國內の氣運は容易く消滅せずして一八九一年其の再興を見、ハセ教授の會頭就任に依て内訌による頹勢を挽回し、一八九四年レノ(Lehr)博士を主席として全獨逸新聞(Alldeutsche Blätter)を發刊すると同時に會名

を改めて全獨逸協會(Pan German League)となし、同種の目的を抱く他の五十有餘の機關(註一)と協力して盛に獨逸國勢の振起に力めたり。然も這般の全獨逸主義が遂に嚴として動かす可からざる大政策と變ぜりしは一八九六年一月十八日現獨逸皇帝がケルンに於て其堂々たる所信を告白せられたるに基く。

註一 例は獨逸國民協會、海外獨逸主義維持協會等の如し。(The Pan-Germanic Doctrine, London & New York, 1904, pp. 52-54 参照)

然らば全獨逸主義とは何ぞや。乞ふ、皇帝の長廣舌を借りて之を説明せむ。曰く夫れ故國を離れて世界的帝國は勃興せり。多數の獨人は世界至る處に其生を送り、獨逸の富力は海外に用ひられ、獨逸の智識は海外に顯はれ、獨逸の活動は海外に行はれ、獨逸の海上財産は今や數十億を以て數ふ可し。此の諸方に散在せる獨逸民族を糾合する事は是れ吾人の重大なる責務なり、云々。

ビロイ公の如き亦一八九八年海軍豫算案討議に際して演説して曰く、吾人は決して諸強國が吾人に對して、世界は既に處分せられたりと云ふとを許す能はず。又商業上政治上除外せらるゝを忍ぶ能はず。英人の如く、佛人の如

く、將露人の如く、吾人も亦大獨逸(Greater Germany)を要求するの權利を有す、云々。實に今や獨逸人の海外に在るもの約三千萬に達し(註二)其富力亦甚だ大なるが故に萬一獨逸にして是等世界に散在せる自國民を統一し得むには、國力の増進如何に偉大なるべきかは殆んど説明を要せざる所、之に反し獨逸政府が彼等の獨逸性維持に努めざらむか容易に民族的特性を失ふて同化せられ終り(註三)有爲の人才は或は政治家となり或は科學者となり、或は軍人となり、或は商人となるも徒に他國富強發達の原因をなすに止り毫も本國に寄與する所なかる可きは既に過去の歴史の昭々として教ふる所、獨逸有識者が夙に之を憂ひて最初歐洲にある獨人を統一し一轉海外にある子孫を併せて茲に大獨逸帝國建設の大業を完成せむとする、蓋し開れなきに非るなり。

註二 獨逸人の分布左の如し。(單位千人)

奧地利匈牙利	一一、五五〇
瑞 西	二、三二〇
露 西 亞	二、〇〇〇
歐洲諸國	一、一三〇

北米大陸	一一、五〇〇
中米・南米	六〇〇
亞細亞、亞非利加、濠洲	四〇〇
合計	二九、五〇〇

(O. Elzacher, Modern Germany, 2nd Edition, p. 41)

尙ほ詳しくはハッセの統計あり。(津村教授論文國民經濟雜誌第二卷第二號九一—九二頁に引用)

註三

獨逸人同化の傾向は征服者として侵入せし北佛蘭西の「フランク人」(Franks)伊太利の「ロンゴバルド人」(Lombardi)等の間にも現はる。北米合衆國が獨逸主義の墳墓たるは第二章第二節第二款に述べたるが如し。但是れ豈に北米合衆國のみならずや。露西亞にある「バラキ人」(Balki)然り、「ゴス人」(Goth)亦然り。

然り、謂れなきにあらずと雖も是れ甚だ奇怪なる現象なり。全獨逸主義の著者輕妙に説て云ふ

試に多産の郭公が永年に亘つて至る所の諸國に順次一卵を落し行き、後日郭公化して大島となり其力よく成長せる子孫を一族と共に請求するに足るを覺るに至て其引渡を請求するに至りしと思へ。因て生ずる混亂抑々幾何なるべし

とするぞ。然も、匪せよ、是れ全獨逸主義に依て生ぜし状態なることを。

多年忘却せられたる外國在住の獨逸人民は再び本國に回想さるゝ代りに昔の親族を想起すべく命ぜられ、移民者殖民者は獨逸開拓の先鋒として賞讃せられ、昔に獨逸人のみならず、其居住する土地、其代表する利益、亦併せて要求せらる。是れ或は當然なる可し。然り、實に當然なり。然も同時に又人をして不安ならしむるもの、否其が歴史的に正當なる事が吾人をして不安ならしむる原因たるなり、云々(註四)

註四 The Pan-Germanic Doctrine, p. 18.

要之、全獨逸主義とは獨逸人民の居住する奥太利、白耳義、和蘭、ルクセンブルヒ等の諸國と母國とを先づ經濟的に次で政治的に連結し、次で將來の大連合幫助の一端たる可き瑞典、那威、丁抹、匈牙利、巴爾幹等に及び、更に之を基礎として南米、中米、小亞細亞を併せ、茲に自給自立の一大帝國を建設し、英米露の三大帝國と對峙して世界の一方に覇を稱へんとするものに外ならず。因之觀是前述べ中歐關稅同盟は明に全獨逸主義實現の一階段たるものと云ふ可く、而て此の階段すら成就せざる以

上、更に困難なる全獨逸主義將來の運命は略ぼ推察し得べき所なりと云はざるを得ず。以下少しく標的とする諸國に就て個別的觀察を下さむ。

第二款 スカンデナヴィアに對する野心

スカンデナヴィアは是れ全獨逸主義最初の憧憬者たるアルントを産めるの地なりと雖も、現在に於て獨逸人は決して此の地に歓迎せらるゝ人種にあらず。然も全獨逸主義者の夢想的なるや、瑞諾、丁、三國を併せて波羅的を獨逸の湖水となし進んで北海に及ばむとする野心制す可からざるものありて惟へらく、若しスカンデナヴィア人にして自ら獨逸民族の一部たるを悟らむか、彼等は偏狹なる愛國心を抛つて獨逸と結び港灣を開きて獨逸の軍港商港となさむと。然り乍ら吾人は未だ嘗て是等の諸國が政治的にも經濟的にも獨逸に同盟するとは勿論、接近せむとせるの徵候だに認むる能はず。若し夫れ他日異心ある強國の併呑を恐るゝに至らむか、或は轉じて獨逸の援助を求むるに至るやも測り知る可からざれども、既に獨逸が一九〇七年十一月二日英佛露と共に那威王國領土保全條約を結ぶに至りし以上、同國併呑の希望は到底實現するに由なかる可く、又一九〇八年四月二十四

日波羅的及び北海沿岸諸國現状維持に關する條約に依り列國を説きて北歐諸小國の領土保全を約せしめたるは一面私恩を賣り得たると同時に瑞典に對する野心を成就するに難からしめたるものと見る可し。唯かの波羅的沿岸國の現状維持に關する協約に英國の除外せられたるを以て英國が同地域に對し將來の容喙權を拋棄せる確證として喜ぶもの多かりしと傳へらるゝ(例ば、「例ば、フレイニツ、シュ、カ、エス、イ、ツ、チ、エ、タ、イ、ゲ、ス、ツ、ア、イ、ツ、ン、ク、等」)に至ては同海に對する獨逸の主權渴望の念如何に猛烈なるかを示すものと云ふ可し。

更に丁抹過去七十年の歴史を一言にして盡せば實に是れ衰爾たる小國が獨立維持を目的とせる奮闘史にして就中其最大なるものは對普魯西の苦闘ならざんばあらず。一八六四年普墺二國の爲に二公國を強奪されたる怨恨深うして夢寐尙ほ忘るゝ能はざる丁抹人は其舊領シユレスウイックに於ける國粹保存に焦心し之に對し獨逸政府は一意獨逸性の扶植に努めて、或は獨逸語を公用語となし、或は獨語新聞に補助金を與へ、或は排獨的言論を嚴禁し、或は排獨行動を執るものを禁錮放逐する等壓制止むなき狀を呈せり。今此の犬猿管ならざる二國民が互に平

和談笑の裡に握手すべしとは到底行ずる能はざる所、假に獨逸が曩日破竹の勢、
 ヲキンプリア半島を占領して商港軍港を獲得せし快を再びして北海上の制海權
 を握らむと欲するも英國決して之を看過すべきにあらざるなり(註一)。

註一 此の點に關してはエリス、バーカー氏の所論日本經濟新誌第一卷第十一號より第
 二卷第二號及び第三號に亘つて詳載あり。參照を乞ふ。

第三款 瑞西に對する野心

瑞西は元來古獨逸帝國の一洲たりしもの、其人民の大部分は獨逸人にして獨逸
 語を操り、風俗に於て、慣習に於て、思想に於て、亦相似る處決して少からず。されば
 全獨逸主義者は瑞西は共通の言語と智識と同情とを以て堅く連結されたる獨逸
 國の一部にして、何日かは政治上分立するの無意義なるを覺つて獨逸と同盟する
 に至るべしと公言し、極端なるは和蘭白耳義と共に純平たる獨立國なる瑞西を目
 するに愛蘭錫蘭を以てし、愛蘭錫蘭にして中立せざる以上和蘭も白耳義も瑞西も
 中立すべき理由なく、強て之を然せしむるは其實是等の諸國をして獨逸の爲に戰
 はしむる事なく依て以て英國を強め獨逸を弱めむとするに出づと邪推するに至

る。然らば獨逸人の誇張する瑞獨二國の關係は然く密接なるものなりやと云ふ
 に必ずしも然にあらず。吾人は三方面よりして之を觀察する所あらむ。

一人種方面 瑞西人は即ち獨逸人なれば宜しく和合せざる可からずと主張す
 るものなれども、之を事實に徴するに瑞西人は自ら瑞西人たるを以て誇りとなし、
 毫も獨逸人たらしむとする意思を有せず。全獨逸主義の著者は些細なる一實例を
 以て瑞西國粹主義の根底如何に深きかを教えたり。曰く

全獨逸主義を信ずるフニター(Vetter)教授嘗て瑞西にあり。一日庭園を散策し
 立派なる櫛の木を見、顧みて下女に曰く、如何に美しき獨逸櫛なるぞと。然るに
 下女は微笑して答ふらく、否是れ瑞西櫛なりと。教授即ち憤然として、獨逸にて
 は獨逸櫛と呼ぶと叫びしに下女は特有の瑞西訛にて、我等は瑞西人にして獨逸
 人にあらず(Wir Schwizer sin aber Kaini Ditsche)と答へたり(註一)。

註一 The Pan-Germanic Doctrine, pp. 177-178

二言語的方面 獨逸と瑞西とは其國語を同するが故に結合して可なりと論ず
 る者あり。勿論瑞西に於ける國勢調査は獨逸人民の遂に他語人民を超越る事を

示すと雖も(註二)佛人多數を占むる地方に住する獨逸人は力めて佛語を用ひむとし其子孫は佛語を語るに至るに拘らず、佛國人は永久佛語を固守するの傾向あり。爲にフハライスロマンツ新聞(Valais Romand)の如きは從來全く獨逸的なりしフライブルヒ(Freiburg)が今や佛語を常用語とするに至りしを論じ、次で二十世紀の終末に至らば吾人の子孫はレマン(Leman)よりフルカ(Furka)に至る迄佛語を語るに至る可しと悲觀せり。モルフ(Morf)教授即ち曰く「假令ヴリス(Wallis)シデルス(Siders)ジテン(Sitten)等従前獨逸語を用ひし地方に佛語行はるゝに至りしとするも、以て獨逸勢力の減退を説く必要存せず。何者二國の同盟上國語は左して重要ならず、人民の思想理想こそ最も重要なるに、此の點に於て吾人瑞西人は單に獨逸化せるに止らず、既に獨逸人なればなり」と(註三)。全獨逸主義者をしてモルフ教授に賛意を表せしめよ。而て吾人をして言語の方面よりする二國連合の不有望を知らしめよ。

註二 千九百年の「センサス」によるに瑞西國民中

獨語を用ゆるもの

二、三一九、一〇五人

佛語を用ゆるもの

七三、二二〇

伊語を用ゆるもの

二二二、二四七

「ローマン」シニ語を用ゆるもの

三八、六七七

其他諸國の語を用ゆるもの

一四、〇八七

之を十二年前に比するに増加數及び増加率左の如し。

獨逸語を用ゆるもの

二二六、五七五人

一割

佛蘭西語を用ゆるもの

九五、二四八人

一割四歩

伊太利語を用ゆるもの

六五、六四一人

四割二歩

註三 The Pan-Germanic Doctrine, pp. 187-188.

三 經濟的方面 は上述二理由より大に有力なる根據の上に立論するを得べし。十九世紀の末業保護貿易熱の勃興に伴ひ諸國相次て保護政策を採用するや、瑞西の對英貿易の増進に反し是等諸國との貿易は一定して進歩の徵候なきのみか、一八九三—九五年には佛國との關稅戰爭より非常なる損害を被り、茲に彈丸黒子の小國は漸く關稅同盟の必要を感じ、瑞西雜誌(Allgemeine Schweizer Zeitung)の米瑞關稅同盟說以來、英瑞關稅同盟論現はれ、三國同盟加入論起り、獨瑞關稅同盟說亦生ずるに至りぬ。瑞西の輿論は、然り乍ら此の何れにも従はず、獨逸に於ても瑞西の水力

電氣による工業より打撃を受く可き工業家の反對ありて格別重視せらるゝなく、一八九九年獨逸の「エクスポート誌」(Export)又二國關稅同盟の有利を説き、獨逸工業は新販路を得、瑞西工業は大市場を得むとなしたれども、此の如きは自國をして經濟上には自由貿易主義を捨てしめて輸入外國原料による工業を衰頹せしむ可く、政治上には確乎たる獨立を喪失し果ては獨逸の一州と零落せしむ可きを知れる瑞西の輿論は寂として何等の好反響を起さずして止めり。

惟ふに瑞西にして地理上の懸隔短く、言語上の困難少く、外國郵物物の半は獨逸に行き然も其割合益々増加の傾あるに拘らず、獨逸郵便同盟にだも賛せざる以上、政治同盟は云はずもがな、關稅同盟の如きも正に痴人夢を説く類として大過なかる可し。

第四款 和蘭及び白耳義に對する野心

トライチケの所謂百川の王、獨逸の寶庫たるライン川の海に注ぐの地、是れ即ち獨逸野心の最も痛烈に集る所なり。但白耳義は佛國的國家にして國民多く加持力敷を奉じ、又多くは佛語を用ひ、且つ佛國其他に對する經濟的關係密接にして容

易く獨逸の志望を果すを許さず。全獨逸主義者は比較的に關係深き、フレミツシユ語を用ゆる人民の「フレミツシユ」的精神を鼓舞し以て佛を離れ獨に近かしめむと欲せるも成功の望少くして茲に論ずるの價なし。

然れば以下吾人は暫く歐洲權力の分岐點たる和蘭(註一)に對し獨逸が巧言令色或は威を以て壓し、或は利を以て誘ひ、百方手段を講じて餘す所なきを見、又陽に和蘭の利益を圖るを装ひて内實自利の進捗に汲々たることを摘發し、併せて其將來の價値如何に及ばむと欲す。

註一 エリス、バーカー曰く「人或は和蘭の弱小なるを見て其政治上の地位亦ルグセンアルヒ或はサンマリノを越ゆること多からずとなすも誤なり。夫れ歴史は繰返す。和蘭は將來フイリッパ二世の時の如く、ヘンリー四世の時の如く、クロムウェル、マルボロの時の如く、特ルイ十四世ナポレオン一世の時の如く、歐洲政策の重心點となり、國際關係決定上最重要の地位を占むるの時至らむ。實に歐洲の覇者たるの途はオーストラスの占領に非ずして、ライン及びシエルト兩河々口の擁有にあり。宜なる哉過去四世紀和蘭が歐洲及び世界の支配權爭奪の大決戦場たりしことヲ見よ。(Modern Germany, 2nd Edition, pp. 86-87)」

獨逸の獨逸同盟論の理由とする所は千變萬化之を繰合すること甚だ困難なれども、今其大同を取り小異を捨て、大別すれば略ぼ甲政治上軍事上の理由、乙人種上言語上の理由、及び丙經濟上の理由となる可し。以下順を追ふて之を説明せむ。甲政治上軍事上の理由よりして獨逸同盟の必要を説くものは皆一致して英國其他の野心を云々す。即ち先づ「和蘭の國力漸次衰退し到底殖民地を支持し難きに至ると共に、英國は必ずや其野心を曝露し來る可く、就中蘭領印度の如きは濠州に對する連絡上先づ爪牙に罹る可し。蘭人は宜く南阿戰爭の教訓を思はざる可からず。若し夫れ和蘭にして早く獨逸と結びたらむには誰か又南阿殖民地の運命如何を豫言し得たらむや。徒らに南阿は南阿のみと云ふ勿れ、今日和蘭の英國に對するや正に蜘蛛の巢にかゝれる蠅の如し。注意に注意を加へざれば英吉利の係蹄に陥て「ボア」の歴史を再びせむ」と脅し、一轉して「這般和蘭の國命危殆に瀕するの際、代償として何物をも供するの力なきを知り乍ら、決然起て之を助く可きものは同胞の悲境に沈淪するを見るに忍びざる吾人獨逸國民あるのみ。其海軍力は今や漸次増進して彼英國すら輕々しく戰を開く能はず。而て其擴張は優に

英國と對抗し得るに至る迄繼續せらるべし」と説き、再轉漸く其眞意を吐露し來て「されば和蘭にして自國領土の保全を欲する以上、須く先づ獨逸と同盟す可し。これ獨逸の利益より云ふに非ずして寧ろ和蘭の利益を標準として云ふものなり。但必ずしも其主權を移轉するを要せず。唯ルクセンブルヒの如く獨逸關稅同盟に加はり、又海港を開放して獨逸海軍の用に供すれば足る(註二)。事一度茲に至らば和蘭人民は化して獨逸人となり、和蘭の領土は直に獨逸の保護する所となり、英吉利遂に一指をだも染むる能はざるに至らむ。何の幸か之に如かんや」と結ぶ。

註二「アレンツ、ポーター」は一步進めて獨逸は和蘭の政治上の事件に關して決定投票

(Voting vote)を有せざる可からずと説く。茲にはハレ教授其他一般の意見を示す。

此の他尙ほ政治上の同盟に關する主權移轉の程度に付ては異説少からずと雖も略して擧げず。

斯の如きはレキシス、ハレを始め全獨逸主義者の皆等しく稱ふる所なりと雖も、靜に之が裏面を窺ひ來らば、必ずや恐る可き野心の潜めるを見む。

第一、和蘭及び蘭領殖民地に對して禍心あるは英吉利にあらずして實に獨逸なること。固より蘭領殖民地の獨逸に取て有利なる以上は英吉利に取ても亦貴重

なる可きは疑なし。然りと雖も英吉利の現状は決して南阿の歴史を再びするの必要なく、又餘裕なし。獨り獨逸に至ては國力の對外的發展を希圖すること茲に正に四十年、圖る所悉く敗れ、成す所總て違ひ、自國殖民地の饒確を悲觀して、蘭領殖民地の豊饒に垂涎し、中歐關稅同盟の不能に失望して、和蘭本國の富力に着目せるや、茲に年あり。和蘭にして輕々しく獨逸の甘言を容れむか、眞に毛を吹いて疵を求むるの誹を受くべきのみ。

第二、獨蘭軍事同盟は獨逸に取て絶對的に必要なること。夫れ獨逸の主要軍港は二あり。キール及びウイルヘルムスハーフェン即ち是れ(此の地はデンチツヒ、ケリニツラ)。前者は港廣く水深く、全世界の艦隊を容れて尙ほ餘ありと雖も、惜い哉、波羅的海に面して北海に遠く、カイゼル、ウイルヘルム運河ありと雖も、通過に長時間を要し且つ閉塞の憂あり、一朝變あらば遠く迂廻して常に風波荒く、暗礁多く、嚴冬には氷を結びて通航難を極め、加之、丁抹よりして仔細に艦隊の勢力と移動とを觀破せらるゝを免れざるスカイガラック、カツテガット及び丁抹海峡を通過せざる可からざるを以て對大西洋策源地としては實用に遠きを覺ゆ。後者は北海に向

ふの利あれども固と是れ無限の勞力と費用とを抛つて開鑿せし小港なれば、港口狹隘干潮に際しては大艦の出入に困難を感じ、剩へ冬季は結氷して用ゆ可からず。然るに今若し和蘭を得むか、良港忽ち其手に入り、大灣忽ち其掌に落ち、碇泊の不便茲に除かれ、英國の侵略茲に易からむ。蓋しウイルヘルムスハーフェンより英吉利に至るには三十時間を要すれども、和蘭の諸港よりすれば約八時間に過ぎず。従て英吉利海峡の濃霧より受く可き危険亦少く、戰略上頗る有利なればなり。

更に若し獨逸海軍にして防禦的地位に立てりとせむか、敵國たるもの必ずや北海沿岸の封鎖を企つ可し。而て海岸線の延長僅に二百七十基米突(キライ)に過ぎざれば優勢なる海軍は容易く其志を達し得べきなり。然り乍ら實效ある封鎖は獨逸が運河を開鑿し、海港を新設すること多きに從て漸次難きを告ぐ可く、和蘭を呑むに至て全く不可能たるに至る可し。元來獨逸は地理的關係上封鎖せられたる曉にも露西亞、埃太利、匈牙利等より食料品原料品の供給を受く可く、又隣接諸國の海港を通過して製造品の輸出を行ひ得べきこと英國と異ると雖も、さればとて其封鎖より受く可き苦痛は不便の感情を醸すと物價の少しく騰貴するに止ると樂觀

(註三)し得べきにあらず。是れ彼が頻りに運河の開通を企つる一理由、而て又錯綜せる和蘭海岸を占有せむと欲する真因たり。况んや、和蘭一度旗下に加はらむか、地勢上白耳義のアントワープの咽喉を扼するを得可く、アントワープを扼すれば原料製品の出入路を此の地に求むる佛國東北部工業地方の死命を制す可く、又一舉手一投足よく以て佛國侵入を行ふ可く、斯くて佛國の地位は降つて三等國の列に入り、獨逸の地位は登つて歐洲の覇者たるに至らむの望あるに於てや。彼が獨蘭同盟を主張するのみならず、常に豫め戰時に於ては和蘭の中立てふ白紙的宣言の無効なる可きを諷して他日の自由行動に備へつゝある亦宜なりと云ふ可し。和蘭亦自ら知るの明ありて容易く獨逸に應ずべきの意を示さず。往年獨逸がクノク(Knok)に海軍根據地を設けむとするや、此の如き近距離に危険なる軍港を置かるゝに反對せし同國の輿論は最も好く獨逸に對する心事を説明するもの、獨人と雖も獨蘭政治的同盟は究極最大の目的なれども然も最も實現に難きを知り、併せて自由の爲には身命を抛つて顧みざりし祖先の血を享けたる蘭人に強力を以て迫るの愚なるを知る。是れど、即ち多數の論客が和蘭より求めざる以上、進ん

て之を強ふ可からずと説く所以なる。

デユルゴアの殖民地觀は不變の眞理を以て許す可からず。然も本國即ち幹根凋ふの際には果實は必然離去せざるを得ず。壁を抱いて憂あるもの豈小人のみならむや。吾人蘭領殖民地の内に將來の禍因の伏在せざるかを切に危み且つ怖る。

註三 Nineteenth Century & After, April 1908, Art. "German Navy & the Government," by J. Ellis Barker, p. 579.

乙人種上言語上の理由 よりして蘭獨接近の必要を説くは、一八九七年フリッツ・ブー(Hritz Bley)が一小冊子を著して「フレミッシュ語」和蘭語「下獨逸語」(Low German)の同一語形に屬するを證せしに創る。氏云へらく「蘭人は即ち獨人にして、獨人は即ち蘭人なるが故に、ライン河は兩國々境にあらずして兩國共同の養源なり。然れば佛蘭西と結んで何の得る所もなかる可き和蘭は宜しく獨逸と握手すべきなり。見よ、伯林の建築物は和蘭風を交へ、伯林の大街「ウンター・デン・リンデン」を飾るは和蘭より移植せし菩提樹なることと」と。

英人關て冷評して曰く「和蘭語と獨逸語とが同語系に屬するは敢て疑なし。然

れども英語亦同系に屬することを忘る可からず。想へ、若し英吉利が單に「フリ
スランド語」(Frisland)と英語と相通ずるを辭柄として同島を占領せむとせば獨逸
人は抑々如何なる態度に出つ可きかを。英國小學校生徒は常に獨語と清語との
酷似を認む。然ればとてこれ獨逸の對清政策に何の關係がある可き。更に英吉
利には羅馬文明の遺物多し、然も若しかるが故に英吉利伊太利に屬すと論ずる人
あらば之を評するに何の言を以てせむ。全獨逸主義者の議論の如き蓋し一顧を
も値せず」と(註四)。

註四 以上は共に「The Pan-Germanic Doctrine, pp. 116—117 p. 120よりぬく。

言妄なるの節なきにあらずと雖も、又以て對蘭要求の根據甚だ薄弱なるを示し
て餘あらむ。

丙 經濟上の理由 瑞西の國境より姪々流れ流れてロツターダムに至るライン川
の延長八百二十七基米突、中六百九十七基米突は獨逸にあり。支線及び運河を合
算せば舟楫を通ず可き同河の流域は實に二千八百五十五基米突、獨逸工業界の重
鎮たる大小無數の都市之に瀕し(註五)獨逸水運貨物の五割八歩餘は之に依る。

註五 ライン地方に位するプロシヤの二州、ロニーツシュプロシヤ及びウエストプロ
シヤの、プロシヤ全國に對する面積は一割五歩にすぎざれども、石炭消費額は全國
の七割一歩、鐵産額は八割一分、鋼産額は八割六分、而て紡績機數亦八割三歩に達す。
此の他、バーデン、アルザス、ローレン、ヘッシヤ及びバ、リアの主要工業都市亦ラ
インに位すれば、サクソニー地方を除き、獨逸製造工業はライン附近に集中せし
ものと云ふ可し。(O. Elzchner, Modern Germany, 2nd Edition, pp. 68—69)

然るに悲む可し此の大河の海に注ぐの點は即ち蘭人の有に拘るが爲、同國人は
近年に至る迄其地位を利用して漁業を獨占し、トライチケをして、和蘭人は佛蘭西
人瑞西人に對して開放するライン川を獨り獨逸人に對して封鎖すと嘆せしむる
に至り、殊に近時獨逸人は自國商工業の發達より、和蘭を有せざる獨逸は他人が門
戸を有する家に住ふが如して、フリストの唱破を愈々痛切に感ずるに至れり。ハ
レ教授がダニエーブ、ライン二河及び其要港が外人の手にあるを慨して是れ實に經
濟上の畸形なりとし、更に進んでダニエーブ河口を領すると共に、西北に迫つてライ
ン河口を奪ひ人種的に、經濟的に、從て政治的に和蘭を併呑するを要すとせざる亦
決して理なきにあらず。惟ふに獨逸が商港の不完全に苦しんで和蘭に着目し、地

理的に獨逸主要工業地ライン及びウエストファリア地方に屬し、歴史的に自國の一部たりしロツターダム、アントワープを恢復せむとせるは其經濟力の海外發展を要するに至りしと同時に始るもの、自國商工業の發展が五十年前僅々一ヶ年三十一万屯の出入貨物を有せしに止るアントワープをして今日千万屯の貨物の出入港たらしめ、又ロツターダム出入貨物をして數十万屯より八百万屯に上らしむるに寄與し乍ら、曩日歐洲第一なりし漢堡をして退いて第三位恐くは第四位に下らしめむとするを見て益々激しさを加ふるは當然の勢なり。ハレが憤慨して『和蘭は獨逸勃興の利益は之を享受して、辛苦は之を分擔せず、永く和蘭人をして獨逸國民勞働の成果に生活せしむるが如きは獨逸の福祉の爲に有害の状態なり』と(註六)叫ぶ亦宜なりと云ふ可し。一度自家希望實現の困難を覺りたる獨逸は或は鐵道特別貨率制を布き(註七)或は運河の開鑿を企て(註八)汲々として上述の不自然を補はむとし、效績擧らざるにしもあらずと雖も、是等の諸策は到底百尺竿頭一步を進めて和蘭の地圖少くとも經濟地圖上の色彩を變ずるの簡にして又便なるにしかず。獨逸經濟的同盟説の生ずる所以なり。

六 Dr. Ernst von Halle, Volks- und Seewirtschaft, Bd. II. Volkswirtschaftliche Aufgaben und weltpolitische Ziele, Berlin, 1902, S. 47 ff.

註七 一八八五年來、メッセリア、エルテルフェルト、ケルン、ハノーバー地方より北獨逸行貨物貨銀を引下げて白蘭兩國の商港に對抗せむことを期し、亞細亞、濠洲、小亞細亞、南獨逸産物も漢堡積とすれば此の特別貨率を適用せり。此の政策は獨逸の輸出を助け、獨逸海運の發達に資し、又北獨逸諸市を繁榮ならしめたり。

註八 既に成れるものは有名なるドルトムント、エムス運河にして(一八九二年起工一八九九年竣功一九〇一年開通)エムテンと獨逸の鐵石炭産地とを連絡するの目的を有し、總費用四百萬磅に達せり。其運輸量左の如し。

鐵 礦	一八九九年	一九〇五年
鐵 製 品	五一二屯	二〇七、五八二屯
穀 物	六、三七二	三六、九三六
	二八、五二二	一五四、二八五
石炭及び「コークス」	二〇、二五四	一四二、八一八

即ち六年間に主要貨物の運輸量は十倍の進歩を呈し、エムテン港出入屯數五倍して港内の狭小を嘆ずるに至れり。されば一面には同港擴張の爲百萬磅を投じ、他面二百五十萬磅の巨費を惜まざり、ドルトムントとラインとを結ばむとす。事或らばラインの貨物はエムテンに集り、和蘭諸港の繁榮を殺ぐの效ある可し。然も人

工の運河は天然の大河に如かずして種々の不便不利の存するを免かれず。是にも拘らず、彼が經營の歩を進むるは全く先年有利なる私設鐵道を買収せむとする際先づ競争線を布設して激戦數載遂に能く當初の目的を貫徹したる歴史を繰返さむとするが爲のみ。(詳細は Modern Germany, 2nd Edition, pp. 73-77)

獨逸關稅同盟說の要旨は殆んど揆を一にす。されば茲にはリスト、ハレ、ライズマン、グロートネ(Reismann-Groene)等の言論を綜合して其大要を摘むに、論者は先づ和蘭が通過貿易より受くる利益の重大なるを喋々して、

和蘭の最大財源の一は獨逸海外貿易品の通過にあり。九百萬屯の獨逸品は年々和蘭を通過し(註九)和蘭の通過貿易は五十四億馬克に達し、之を十倍の人口を擁する獨逸の八十億馬克を有するのみなるに比せば其利害關係の如何に大なるかを知るに足らむ。

註九 和蘭の貿易統計は通過貿易品の量目を示すのみにして價格を示さざるが最近に於ける同貿易發達の趨勢は左の一表に依て其一斑を窺ふ可し。

一九〇三	七、六一九百萬基瓦
〇四	七、八八九
〇五	八、五五一

〇六	九、三九二
〇七	九、五〇五

となし、次て此の重要なる財源は獨逸の一舉手一投足に依て奪はる可きを脅かさむとして

獨逸にして陸には鐵道特別貨率制を盛にし、水には運河を開きてライン河海港を造らば、ロツターダム今日の盛觀は再び見る可からず。其商業は奪はれ、其財源は失はれ、加之高率の關稅率を制定せば和蘭たるもの果して何に依て國を立てむとするか。和蘭は一言にして盡さば獨逸の經濟上の隸屬者なり。生殺與奪の權は獨逸の手中にあり。

と揚言し
されば和蘭たるもの自ら覺るの明あらむには宜く速に獨逸と握手すべし。和蘭は毫も自由貿易主義固守の必要なし。和蘭の永く繼續すべき必要あるものは一般的自由貿易制度にあらざして實に獨逸に對する自由貿易制度なり。商業上對獨關係は月に緊密を加ふるに反し對英關係は日に疎隔を増し又一九〇

○年和蘭全輸出價格の五割二歩は獨逸に行き、獨逸の和蘭向輸出は佛蘭西向輸出を越え、伊太利向輸出の三倍に達するにあらざや(註九)。和蘭の同胞よ、眼を擧げて世界の運勢を見よ。英佛露米の自給自立の國家たらむとする傾向の著しきと共に和蘭の運命は漸次没落に傾きて遂に富人の食卓より落る「パン」の屑片を以て甘んぜざる可からざるに至らむとするにあらざや。若し夫れせめて昔日の榮華の一部たりとも恢復せむと欲すれば唯速かに吾人獨逸人と和せよ。卿等は早晚獨逸と同盟せざるを得ず。而て此の際一日を遅くするは一日の不利を來す所以なり。鐵道の發達と運河の開道とに獨逸諸港は益々隆興せむとし、其隆興が和蘭諸港に如何なる結果を現はすかは卿等能く之を知る。吾人は決して事の現狀に甘んずるものにあらず。獨逸族を誦し獨逸品を運搬する船舶は獨逸の商港を出入せざるを得ず。若し其商港にしてアントワープ、アムスターダム、ロッターダムと呼べるものにあらざんば必ずやエムデン、ブレメン、ハンブルヒと呼べる可きことを記臆せよ。試にライン河を失ひたる和蘭諸港の將來を想へ。而て和蘭諸港の將來が和蘭其物の將來たらざんば眞に幸のみ。今

や一定の條件を強いて卿等を屈服せしむるは吾人に取て眞に易々たる業なれども、吾人は決して策茲に出てむとするものにあらず。卿等の頼る可きは英か、佛か、將獨ならずんばあらず。英吉利の心事如何は既に南阿戰爭之を教へ、佛國々勢の赴く所は早く普佛の一戰之を示す。吾人は唯諸君が能く頼る可き國家を判斷し保護國を擇ぶの道を誤まらざらむことを望まむのみ。急いで手を握るの必要に迫らるゝものは吾人にあらずして實に卿等に外ならざればなり云々と。

註十一九〇七年に於ける和蘭貿易統計表に倣て本論の最近の價值を検せむ。(金額の單位は百萬「ギルダー」とす)。

國名	和蘭への輸入		和蘭より輸出	
	金額	歩合	金額	歩合
普魯西	五五一、九	二〇、五	一、一一二、四	五〇、三
英吉利	三二四、五	一一、六	四四五、八	二〇、二
白耳義	二八五、六	一〇、六	二八五、〇	一一、九
蘭領東印度	四三六、九	一六、二	八二、二	三、七
露西亞	二〇九、〇	七、八	一一、一	〇、五
北米合衆國	二九四、四	一〇、九	八五、六	三、九

英領印度	六一、七	二三	—	—
佛蘭西	三四、〇	一三	一四、一	〇、七
漢	四三、八	一、六	四三、七	二、〇
	二、六九二、〇		三、二一三、〇	

嗚呼甘言茲に至てか極り、令色茲に至てか盡く。之をビスマルク公が吾人獨逸人は一人たりとも和蘭合併を夢想だもせず、蘭人は蘭人にして獨人にあらず。吾人獨逸人の目的は獨逸人の結合にあり、よし、五百萬の蘭人跪きて合併を希ふとも、之に應ずるは吾人の欲せざる所又能はざる所、蘭人は自ら其殖民地を保護して可なり」と冷語せしと比較對照一番せむか、形勢の推移も亦驚く可きにあらずや(註十一)。

註十一 勿論今日に於ても外國に對しては和蘭併吞計畫を否定する獨逸人少からず。

Karl Blind in *Nineteenth Century and After*, Nov. 1905 に *German and English War Scapes* なる論文を掲げて此の思想を普佛戰後佛人の捏造せしものなりとするが如き又 *North American Review* March, 1908, Art. "The Truth about German Expansion" by Baron von Specksteinburg, Imperial German Ambassador to the U.S. が白耳義和蘭に對する野心を存せずとなすが如し。但後者は所謂露が蘭の打消に類す。

而て今讀て以上の千言萬語以て麻痺得たる實際的效果如何を思ふに、驚く可し、

僅に蘭領東印度海底電信線共同敷設の一事あるのみ。正に是れ大山鳴動して鼠一疋の感なくんばあらず。固より二國の關係は敦厚なり。敦厚なりと雖も、敦厚は遂に敦厚に止つて敦厚以上の意味なきなり。和蘭は尙ほ其國民的傳説を愛育し、其自由の爲に奮闘せる歴史を尊崇し、歐洲大勢の推移に兵力の不足を感ずるや分立以來八十年の舊怨を抛ちて白耳義との軍事的聯合を欲し、之に達するの階段として一九〇七年十一月四日白耳義ブラッセル府に兩國經濟的聯合調査會議を開きしが如きとあるも、寸毫と雖も全獨逸主義者の意に従ふの微なきなり。又彼は昔日の銀行制度を固守し、郵便組織を維持し、獨人が熱心銳意自國と同一の制度組織を採用するの利益を説くも馬耳東風頭として聞く所なし。獨逸郵便同盟にすら加入を肯んぜざる和蘭は何すれを鐵道同盟に加はらむや。況んや貨幣同盟をや。又況んや關稅同盟をや。更に況んや政治同盟をや。疎より細に、小より大に、易より難に、漸進的政策を講ぜむと欲せるも獨逸は未だ其第一歩をだも取る能はず。加ふるに一九〇〇年和蘭の保護貿易政策採用の流説あるや、和蘭にして策一度茲に至らば直に報復關稅其他百般の手段に訴へ對獨貿易維持の爲に獨逸と特惠條約を結ばしめ、政治的同盟を時日の問題たらしめむ」と思惟せし野心家が流

説の消滅して和蘭の自由貿易依然たるを悲んで「英國が保護制度に復歸する曉には自衛上和蘭亦必ずや之に倣ふ可く次て蘭獨經濟的同盟成立せむ」と夢想して自ら慰安せるが如き、又現和蘭女皇陛下の御子なきに於ては皇位繼承の序列は獨逸一諸侯の頭上に帝冠を捧ぐるの止むを得ざるに至る可しとて額を叩いて再三の御流産を賀せし論者が昨年五月皇女御分娩の報に接して無限の失望を感じたるが如き、共に是れ吾人をして全獨逸主義者を慫慂しむべき資料たるを覺ゆ。然も尙ほ本年二月獨逸皇帝が和蘭女皇に親輪を與へ、和蘭にして英國に對し十分なる國防工事を施すにあらざれば、英獨開戦の曉獨逸は自衛上和蘭を占領すべしと警告せられたりとの風説が和蘭議會に激論を惹起したるが如き蓋し識者をして微笑せしむる所ある可きなり。

吾人は既に非全獨逸主義者の多數が鼓舞獎勵して全獨逸主義者却て沈黙せる迄に注意を惹ける南米の運命を論じ、又小亞細亞植民の事業進抄意の如くならず、斷じて豫想の如く樂觀すべからざるを述べ、更に埃太利に對する企畫の裏面には露西亞の勢力潜めるとを説けり。今又和蘭に對する強壓的前進計畫は必然英國に依て阻止せらるべきを思へば、吾人は轉た全獨逸主義の將來を弔はざるを得ず。

第五節 獨逸の將來

國際の關係略ぼ定まりて天下安きを希ふの際、競争場裡に現はれたる獨逸は勢ひ他國の間隙に乗じて奇手を弄し怪腕を揮ひ以て事を成さざるを得ず。佛蘭西と衝突し、合衆國と衝突し、英吉利と衝突し、露西亞と衝突し、要之、足跡印する處必ずや何人かの利益を侵して擾亂を醸さざれば止まざるは理の當然、露佛同盟、日英同盟、英佛協約は勿論ロビンソン氏の冷評を借つて云へば三國同盟すら其發展の障害たるの觀ある(註一)亦毫も怪しむ可きにあらず。「ノルド、ドイッチェ、アルゲマイネ、ツァイツング」が土耳其、波斯、亞富汗斯坦、極東、其他に於て獨逸が常に擾亂の張本人なりと誤解せらるゝを大に不服となし、他の獨逸新聞亦之を賛せりと云ふに拘らず(註二)最良の審判者たる事實は絶えず何等かの動亂ある毎に其裏面に隱見する鱗片あるを教ゆ。近時歐洲諸國間に結ばるゝ諸協約が直接或は間接に彼を標的とするは即ち其現狀破壊策に對する現狀維持派の對抗策の表現にして、彼が永く國際上孤立の地位に立つも其政策より生ずる當然の結果のみ。昨年六月英露

の交情密なるを報ぜられつゝあるの際、獨逸皇帝が觀兵式場列國武官の面前に於て「列國は我等を包圍し、我等を窮境に陥れむと試みつゝあるが如し。來れ、列國。

我に準備あり」と傲語せりと傳へらるゝ(註三)は、よし半官報が其誤聞なるを説明するに汲々たるにもせよ、正に直截的に真意の存する所を吐露せるものと見る可し。

前宰相ビュロー公が一九〇六年十一月十四日議會に於て列國と獨逸との關係を詳述し、終に當り獨逸は決して孤立するものに非ざる事、又孤立を恐るゝの要なきこと、并に獨逸にして其劍の尖銳を失はざる以上世界に於ける己が他位を維持し、一方に於ては友國の後援となり、他方に於ては敵國をして恐怖せしめ得べきことを縷々したるは、今も尙ほ吾人の記憶に新なる所、比公の鐵言、大問題は多人數の演說又は決議に依て定めらるゝものにあらず。唯血、唯鐵、初めて能く之を解決すべきのみと、并んで獨逸の武斷政策を説明する好材料、此の國にして初めて「權力は權利に先づ」(Macht geht vor Recht)と叫ぶ武辨を出すべく、商業政策は權力政策也」(Handelspolitik ist Machtpolitik)と論ずる學究を産すべし。

佛も敵なり、露も敵なり、米も亦敵なりと雖も、獨逸の最大當面の敵は實に一衣帶

水の英吉利にあり。近時彼が財政の困難を意とせずして(註四)銳意海軍の擴張を斷行し、爲に財源の不足を感ずるや、諸種の困難を排して總計五億馬克の増稅案を成立せしめ、而て本年度の海軍豫算に於て又もや百二十五萬磅の増額を敢てせるが如きは、明に之を證するものたらずんば、蓋し佛國との戰は將軍モルトケの云ひけむ如く陸上に決せらるべくして海軍を要せず。露は事實に於て海軍を有せず。假令彼が再び海軍國と化するの日あらむとも、獨逸の決戰は陸上に行はる可き事、佛に對すると異ならず。歐洲を去て敵手たる可きものを求むれば、東に日本あり、西に北米合衆國ありと雖も、獨逸は前者と戰ふ可きの利益なく、後者と戰ふ可きの勢力なし。加之、一度思を日英、英米の親交に馳すれば、獨逸は決して單に日英兩國の一と争ふ能はず、結局紐育東京に至る途上倫敦ありとのエリス、パリカの喝破は奇言に似て奇言にあらず。獨逸海軍の擴張は一に英國を措て他に之を求む可からざるなり。

註一 H. Perry Robinson, The Twentieth Century American New York & London, 1908, p. 30.

註二 四十一年六月二十二日東京時事所載「ロイヤル」電報及び同月二十三日大阪朝日所

歐伯林電報。

註三 外交時報第百二十九號第六頁。

註四 獨逸軍事費膨脹一覽表(單位千磅)

總額出豫算	海軍費	陸軍費	軍事費計	公債發行額
一九〇三	一一七,八六五	一一,四〇〇	三三,〇〇〇	四四,〇〇〇
〇四	一〇三,四〇〇	一〇,九〇〇	三三,三〇〇	四三,二〇〇
〇五	一〇九,二二一	一二,三〇〇	三四,八〇〇	四七,一〇〇
〇六	一一二,二七〇	一三,二〇〇	三七,一〇〇	五〇,三〇〇
〇七	一二九,八二〇	一四,五〇〇	三九,九〇〇	五四,四〇〇
〇八	一三七,五〇〇	一六,九〇〇	四二,五〇〇	五九,四〇〇

(The Economist, Feb. 12, 1908)

右の一表の數ふるが如く、一九〇三—〇八年間總出の膨脹は二億圓なるが内一億五千萬圓は軍事費なり。此の如く急速なる經費の増加は勢ひ公債の發行を以て應ずるの外なければ、獨逸の公債は非常の勢を以て増大し、一八九五年に二十一億馬克なりしもの、一九〇六年には三十五億に達しぬ。同國大蔵大臣ラインマーベック男(Baron von Rheinbaben)曰く「公債増發に於て吾人が諸國殊に英佛を凌駕するは不幸ながらも事實なり。佛國國債に何等増額なかりし間に獨逸帝國々債は約十倍せり。疑もなく此の事實は海外に於ける獨逸の政治的及び經濟的聲譽を増進す

べき所以にはあらず」云。(Dawson, The Evolution of Modern Germany, London, 1908, p. 405.)

夫れ南阿の一戦は獨逸が美名を藉つて和蘭併呑、英國侵略の宿望を遂ぐ可き絶好機會たりしもの、殊に前にデラゴア灣内獨逸船拿捕事件あり、後にはクルーゲルの遊説あり、更に全和蘭協會(Pan Dutch League)の一員の如きは一九〇一年三月二十三日書を全獨逸新報(Alldeutsche Blätter)に寄せて「獨逸皇帝がクルーゲル大統領に發せられたる祝電さへ大に和蘭數百萬の人心を鼓舞したりとせば、もし今に於て獨逸が仲裁手段を採らばその吾人蘭人及び「フレミッシュ人」に與ふる感動抑も如何許ぞや」と叫んで助を請ひたるに拘らず、獨逸皇帝及び政府が此の千載一遇の好機を逸するに任せたるは一に自國海軍力の微弱なる未だ以て英國海軍の鼎の輕重を問ふを許さずと思惟せしに因る。聞かずや、トランスバールの最後通謀後僅に一週日にして、漢堡に於ける「カール大帝號」進水式に臨める獨帝が式後同市々會議事堂に於て「若し朕が七年以前に提出せしめたる海軍擴張案にして國民の協賛を得たりしならむには獨逸帝國は今日に於て尙ほ爲すべきものありしなり」と論ぜられしことを。

是れぞ即ち從來喧かりし海軍擴張の要求(註五)が爾來益々激しさを加へ(註六)又其海軍擴張案愈々出て、愈々大規模に殆んど底止する所を知らざる所以なる。

註五 一九〇〇年レキシスが「ミューンヘン新報」Muenchen Allgemeine Zeitungに記せし所其一例なる可し。即ち彼は以て海軍根據地となす可く、又以て海外貿易發展の基礎となす可き貴重なる殖民地を有する和蘭との同盟も、若し獨逸にして強大なる海軍を有せざれば、行はれ難きを以て、靜かに未來に於て其々の間に和蘭人を動かす迄大海軍を完成すべしとせり。シヌモラーの如き亦筆に口に盛んに海軍擴張の必要を叫びし學者にして或は

フレデリック大帝のシレシヤ征服、ピスマークの獨逸帝國建設にも比すべき現在及び將來の大事業は獨逸海權の創設にあり。

と叫び或は
吾人は商工業を發展せしめ、農業的殖民地を獲得し、到る處に極端に行はれむとする「マーカンデリズム」を排し、三大帝國の土地分割を妨げ、英露の決戦に際しては權力平均を維持するため、諸國聯合の中心たらむとす。而て其途は唯一、即ち更に強大なる海軍を建設するにあり。

註六 一九〇八年十一月十九日桑港電報に曰く

獨逸宰相ビュローロ公は海陸軍擴張案を議會に提出し説明して曰く、獨逸は歐洲各國中最も不入望なり。吾人の權勢を維持する途は唯海陸軍擴張の一あるのみ。獨逸は大軍備を要す。此の際増税を負擔するは獨逸國民の愛國的義務一也」と。(二十一日大阪朝日第一面)

斯くの如きは絶えず繰返さるゝ宣言也。

土地は荒廢し、産業は亡滅し、多望なりし都市は焦土と化し、有爲の人口は三分の二を減じたる三十年戦争の損害治するに追なくして、再び大那破翁の馬蹄に蹂躪せられたる影響の遠く又大なるや、クレフェルトの絹織物の九割は一八八〇年に至る迄手織になり、銑鐵の年産額は一八六六年に至る迄百萬屯に達する能はざりき。其際其時何人か又獨逸今日の隆興を想ひたらむや。

今や世を擧げて獨逸の殖民政策を失敗と論じ、中歐關稅同盟を夢想と斷じ、全獨逸主義を無効と評し、海軍擴張の無望を豫言す。吾人と雖も亦之に反對すべき根據と勇氣を有せず。然も世事由來、往々意表に出づ。シレシヤ戦争より、ケーニッヒグレッツに至り、ロリスバツハ、ウオスタールよりセダンに至り、武力以て國民主義を完成し自由を獲得したる獨逸が自ら其將來は海上にありと叫ぶ、必ずしも

嘲笑を以て遇す可きにあらず。見ずや、最近増税案の議會通過と海軍擴張熱の旺盛とは明々白白々同國六千萬の人民が敢て増税を厭はず、又敢て危険を恐れず、一意帝國主義を奉ぜむとする牢乎たる決意を公表せることを。

論じて茲に至り、吾人は竊に獨逸ポスト新聞が揚言せる壯語を以て同國上下の眞情を道破せるものとなし掲げて以て本章を終る。曰く

「ルシテニヤ」モレテニヤは獨逸船よりも高速力を有すれば他日大西洋の「レコード」を破る可し。然も之を以て最終の勝敗となす勿れ。眞の競争は之より始まらむ。

第五章 英吉利の帝國主義

第一節 覇權の動搖

第一款 過去の盛榮

一八四一年理想の人(註一)フリードリッヒ・リスト其心血を注ぎし大著 *Das nationale System der politischen Oekonomie* を世に問ふや、「エディンバラ」評論は滔々たる長論四十二頁に涉つて之を冷評し、「一顧の價なく又眞面目なる批評を値せず」と罵り、著者は其所謂世界經濟主義を誤解せりと嘲りて尙ほ甘んぜず、進んで英國は過去及び將來を通じて世界の工場たり、又たる可きと共に、獨逸は永く農業國たる可しと論断せり。

豈エディンバラ評論記者のみならんや、十九世紀中葉の英國は上下擧げて其商權、財權、兵權及び政權の永く世界列強に冠絶すべきことを確信せり。「英國は過去に於て世界の工場たりき、將來も亦然らむ」とのリチャード・コブデンの揚言は的確に

英國人民の眞意を吐露したるものよし英吉利は全世界の工業品需要を充足し得むとも果して全世界の過剩農産物を總て購入し得べきや否や、抑又各國人口の増加遂に集約農法と雖も之を支持し難きに至らむ曉尙ほ果して彼等は永く農業國たる運命に甘んじ得べきや否やと云ふが如き明々白々英國の將來を指示せる學理すら、當時の繁榮に眩惑せられたる彼等は不問に附するの大膽と勇氣とを存せるなりき。人もしエリフ、パーリットがパーミンガムの盛榮を叙するの一節を讀まむか、當時英國の隆達如何に驚く可きものありしかの萬一を想ふを得む。蓋しパーミンガムの盛榮は即ち英國の盛榮を反射せるものなればなり。曰く

アラビヤの會長は其食事にパーミンガム市製の匙を用ひ、埃及の提督はバ市製の盆上の洋杯より清涼飲料をとり、婦人部屋を照すにバ市製燭臺を用ひ、其の快船の壁にバ市製紙を張り、バ市製玩具を飾る。北米土人の護身銃はバ市より來り、豪奢なる印度人の皿及び洋燈注文狀はバ市に達す。悍馬に鞭つて南米の野を馳る武士の拍車や、馬鐙や、扣鈕や、皆これバ市製品たり。殖民地土人の手斧や、桶や、壓搾器や亦バ市より賣す所、假想的の獨逸人は其煙管に點火するにバ市製燐

寸を要し、海外出稼人はバ市製ストロップにバ市製鋸を用ひて食事を調へ其奢侈品を貯ふる錫箱の表面尙ほバ市製造業者の氏名の刻まるゝあるを見る、云々

(註二)。

實に數百年間英國の養ひ來りし實力は正に此の時に當つて頂點に達し、燦然たる美花一時に開いて列強顔色なく、世界財權の中心はロンドン、ボード、スツリートに宿り世界船舶の過半は英國旗を翻へし、世界石炭産額の三分の二は英國より出て、歐洲大陸鐵道哩數を總計するも、尙ほ英國に及ばず、英國の綿絲及び鐵産額は世界産額の合計を超え、綿布産出國としては世界獨歩の地位を保つ。リストガ Zollvereins-Liste (關稅同盟週報) に記して、英國は自ら一個の世界にして其富に於て其力に於て迥かに爾餘の世界を抜くとせる、亦宜なりと云ふ可し。

思へば十九世紀は即ち英吉利の時代、軍事に於て文學に於て商工業に於て將學術に於て歴史あつて以來未曾有の榮華を極めたり。海にネルソンあり陸にウェリントンあり、世界に比類なき文學史はパーリンス、スコットに始つてマコーレト、ディッケンズに終り、發明發見は其獨占到歸し、天下廣しと雖も復敢て鼎の輕重を問ふ者あ

るなかりき。

註一 ミンホラーの評也。Gustav Schmoller, Zur Literatur Geschichte der Staats- und Sozialwissenschaft, Leipzig, 1888, S. 103 を見よ。彼は又キリストを以て偉大なる煽動家、熱烈なる著述家となし、既に於ては獨逸國の一偉人と許す。(S. 106.)

註二 Victor Bernard, British Imperialism and Commercial Supremacy, trans. by H. W. Foskett, London, 1906, p. 5.

第二款 貿易の均衡

然るに榮枯盛衰の理法は英國にも行はれ、流石に世界に覇權を振ひし「ジョンプ」も強敵四方に勃興するに及んで、容易く桃源の夢に耽る能はざるに至れりき。先づ金融市場に於ける英國の地位の動搖は資本制經濟組織の今日に於て蓋し最も適切に英國の經濟力其物換言せば英國の財力其物の動搖——其絶對的なると相對的なるとに拘はらず——を教ふるもの、而て一八七三年バジエットの名著、ロンパードスツリート中に

何人と雖も英蘭が世界最大の金權國たるを知る。……倫敦の銀行預金殘高は世界の他の諸市よりも數倍大にして又大英國の預金殘高は諸國のよりも數倍大なり。

と誇り得たるも二十七年を経たる一九〇〇年に其第二版を出すに際しては

倫敦は其財權上の相對的優勝の地位を完全に維持すること能はず、紐育組合銀行は偉大なる發展を遂げ、獨逸の國際金融上の地位亦甚だ重きを加へ、伯林は外國貨附の重要市場と化せり。

となすの止むを得ざるに至りしはアッシュレーが引いて悲觀の一材料となせし所(註一)加ふるに從來多く英國に行はれし歐米大陸の商業決算及び財産抵當が近時殆んど其跡を絶ちたるが如き、外國特に米國資本家が英國の各種企業を買收し或は之に投資するもの多きを報ずるが如き、又英國所有の歐洲大陸諸國政府の公債其他の投資物件が今や甚だ少額となりたるのみならず、却て英國有價證券の大陸諸國就中佛國資本家を買收せらるゝもの多きが如き孰れかこれ吾人をしてヴェクトル、レオの

英國輸入超過の大勢は今や一年一億五千萬磅にも登らむとするを見ては同國の如き債權國を以てしても到底資本を喰ひ込まざるを得ざるべしと思はる

(註二)

とせし論断を一片の謬説のみと排する能はざらしむるものに非る。
 肥して茲に至り吾人は英國輸入超過の滔々たる大勢を悲まざるを得ず。其超過額の大なるや正に次の如きものあり。

英吉利貿易大勢表(單位一磅)(註三)

輸入總額	再輸出	英國品輸出額	輸入超過額
一八九五	四一六、六九〇	五九七、七〇四	二二六、一一八
九六	四四一、八〇九	五六、二三三	二四〇、一四六
九七	四五一、〇二九	五九、九五二	二三四、二二〇
九八	四七〇、五四五	六〇、六五五	二三三、三五九
九九	四八五、〇三六	六五、〇四二	二六四、四九二
一九〇〇	五二三、〇七五	六三、一八二	二九一、一九二
〇一	五二一、九九〇	六七、八四二	二八〇、〇二二
〇二	五二八、三九一	六五、八一五	二八三、四二四
〇三	五四二、六〇〇	六九、五七四	二九〇、八〇〇
〇四	五五一、〇三八	七〇、三〇四	三〇〇、七一一
〇五	五六五、〇二〇	七七、七八〇	三二九、八二七
〇六	六〇七、八八九	八五、一〇二	三七五、五七五

〇七	六四五、九〇四	九一、九七二	四二六、二〇五	一二七、七二七
〇八	五九三、一四一	七〇、六六六	三七七、二二〇	一四五、二五六

一億五千萬磅既に憂ふるに足る。況んや一億七千萬磅をや。更に況んや一億八千萬磅をや。

モネー氏之を嘲て曰く

輸入の恐怖は保護の濫觴なり。而て其恐怖たるや非論理にして且つ無價値なり。蓋し島國たる英國は貨物入る時に富を増し貨物出る時に貧を加ふるもの、國際貿易上輸入は即ち吾人の利得たり(註四)。

と。説何ぞ夫れ奇にして又怪なるや。貿易は自由貿易論者が絶えず説明する如く交換にして贈與にあらず。既に交換にして贈與に非ずとせば現在の輸入は過去現在或は將來に於ける輸出を伴ふ可きもの、貿易の利と不利とは輸出入の内容を検して而て始めて定むるを得べく、輸入は即ち利得なりとは到底無條件に吾人が首肯する能はざる所に屬す。

氏更に言をついで英國輸入超過の理を説明して曰く

英國の海外放資より生ずる所得は逐年増加して一九〇〇年頃には既に六千萬磅を超ゆるに至れり。然も此の額は英本國內に於て受取らるゝ利子利潤及び外國或は殖民地に於ける工業企業投資より得べき利益を含まざるが故に、精密に總利得額を知る能はずと雖も、内輪に見積るも九千萬磅なりとして決して失當ならず。

更に英國船舶噸數は世界噸數の半を超え、其運賃として收入する所は諸種の方面より計算するに到底九千萬磅を下るべからず。

此の他印度帝國統治費として同國政府より英國に支拂はるゝ年額約千七百萬磅に銀行及び商人の利益手数料、古船賣却金、在外英人の送金等を加ふれば英國の有形的及び無形的輸出は輸入額を超えて餘あり、其殘額は外國及び殖民地への債權を増加す。されば有形的輸入超過は益々繼續すべく其増加の速かなる程吾人は幸福なるべきなり、云々(註五)。

這般の貿易均衡説はゴッセン以來吾人の耳朶に慣るゝ所吾人の疑を挾まむとするは其學理上の當否にあらずして實際と一致せるや否やにあり。換言すれば

英國の無形的輸出額は果してよく其有形的輸入超過を補ふて餘あるべきや、其所謂債權の利子が實は利子にあらずして元金なるが如きことなきや、世界總噸數の過半を占むると號して誇れる海運の前途は然く樂觀するを許すべきや即ち是れなり。一言以て盡さば英國の國民經濟は果して遠き將來に至る迄此の巨大なる輸入超過を許して些の動搖を感ぜざる可きや、即ち是れなり。

吾人は既に英國の海外投資に對する不祥の現象を見たり。多數有力の學者が全然樂觀的見解を保持せる(註六)今日に於てゲイトル、レオの一語は未だ以て學界の輿論を一變せしむるの威力を有せざる可きは吾人不肖と雖も之を知る、知て而て尙ほ其將來を悲觀せむと欲する蓋し據る所あり。海外放資より生ずる利得が將來に於ても現在の如く多大ならむを期せむには、金利下落の趨勢に伴ひ、益々投資額を増大せしめざる可からざる必要あるに英國は能く之を行ひ得べきか其一二なり。假に英國能く之を爲すとすも、是れ果して英國永遠の福利なる可きか、其二なり。夫れ資本に國境なし。資本家の求むる處は常に最大の利子に止つて他に存せず。利子にして大なる以上何處に之を使用するも敢て其意に關する所に

あらず。然りと雖も大陸諸國に精巧なる機械を輸出して建設したる工業が今日英國産業の強敵として其販路を減少したるを知り、米國鐵道を建設し、運賃を低廉にし、英國の農業を衰滅せしめたるものは實に英國の米國投資なるを學び、列國保護貿易熱の増進と共に英國内の會社其工場を保護貿易國に移し、英國に於ける勞働機會を減少したると多大なるを聞き、然る後靜かに斯くして得べき利子と爲に費せる犠牲と何れか果して擇ぶ可きかを思はむには、吾人は賢明なる英人が、和蘭の化して世界の債權國たるに至りし時は、即ち其國力の減退し初めたる時なりてふ古き史實に戰慄すべき教訓を發見し得べき事を信ぜむと欲す(註七)。

次に轉じて海運に及ばむか、吾人は更に更に危惧の念の大なるを覺えずんばあらず。元來十九世紀の中葉英國が世界貨物集散の中心點となり、倫敦の如きは全世界に張り渡せる網の中央に座を占むる巨大の蜘蛛と呼べるに至り、通過商業より多大の利益を享け得たる所以のものは喜望峯廻航路の長距離なるや能く堅牢なる大船を多數に擁せる英國をして爾餘の小國を壓倒せしめ得たるに出づ。然るに一旦蘇士運河の開通あるや、少數劣等の船舶を有する邦國争ふて海運業に

従事する事となり、從來支那錫蘭より倫敦を経て露國に輸入せられし茶は直接オデッサに陸揚せられ、生絲取引の中心點亦ゼノア、マルセイユに移り、印度棉の如きも直接に歐洲諸國に輸送せらるゝに至り、獨占的地位の動搖を招きしが、近時其傾向愈々著しく、衰頹の徵候歴々として指摘すべきものあり。今アッシュレーの叙述(註八)の大意を抜きて左に掲げむ。

- 一、一八九一年及び九六年に於て世界總噸數の五割七歩を占め得たる英國船も一九〇一年には五割に減ぜしこと
- 二、外國貿易の爲め英國諸港に出入せし英國船の割合も一八九〇年の七割二歩より一九〇二年の六割五歩に減ぜしこと
- 三、多數外國諸港出入の英國船の噸數は一八九六年より一九〇〇年迄の間に絶對數に於て實に僅少なる増加を示すに止り、其割合は合衆國及び葡萄牙の略ぼ同一なるを除けば孰れも皆減少の一方に傾けること、就中獨逸に於ては同國政府の熱心なる海運獎勵と保護貿易政策とに依て英國船は益々驅逐せられつゝあること

列強各々帝國主義的思潮に支配されて、自國海運業の保護獎勵に鋭意し、特に米露兩國の如きは沿岸貿易の美名の下に本國殖民地間の海運はリガ浦鹽間と云ひ紐育比律賓間と云ふが如き遠距離の交通をも一切獨占せると同時に、或は米國と地中海沿岸諸國間或は北歐と東洋間、直接航路の開設發達あり、倫敦永く商業通路の中樞を以て任ずる能はざるに至りて英國船の活動亦昔日の如きを得ず、一九〇七年度に於て獨逸汽船會社が入分一厘四毛の平均配當をなせせるに反し英國汽船會社の約三分の一は無配當の悲境に陥り、殘餘の會社の平均配當率も僅に四朱三厘四毛にして一昨年度に於ても貨物汽船會社は船舶の現價を非常に高價に見積り乍ら僅かに三分四厘八毛、旅客汽船會社も四分五厘六毛、彼阿會社を除けば僅かに四分の平均配當率を得たるに止るに對し、獨逸諸會社は非常なる不景氣に苦みつゝ尙ほ五分三厘五毛の高率を示せり(註九)と云ふを見れば英國たるもの必ずしも妥如たる能はざる可きにあらずや。

註一 W. J. Ashley, *The Tariff Problem*, 2nd Edition, London, 1904, pp. 235—237.

註二 O. Eltzbacher, *Modern Germany*, 2nd Edition, London, 1907, p. 344.

註三 Statesman's Year Book 1903—1909.

註四 L. G. Chiozza Money, *Elements of the Fiscal Problem*, London, 1903, p. 8 & p. 40.

註五 *Ibid.*, p. 188 & pp. 64—69.

註六 Schulze-Gaevernitz, *Britischer Imperialismus und englischer Freihandel*, Leipzig, 1906, S. 245, *Journal of Royal Statistical Society*, Sept. 1909, Art. "Great Britain's Capital Investment in other Lands," by G. Paish. 其論多しと雖も頗る取ひて略しつ。

註七 殆んど悉つての學者兼口一致海外投資の有害なる影響を認む。Fuchs, *Die Handelspolitik Englands und seiner Kolonien in den letzten Jahrzehnten*, Leipzig, 1893 (*Schriften des Vereins für Socialpolitik*, Bd. 4.) S. 171, S. 173. Alexander, *Die Reaktion in der englischen Handelspolitik*, Berlin, 1903, S. 60ff. カンニハヤムとヤーマフニヤムとフマンシヤノールも同意見なりしと記す。

註八 W. J. Ashley, *op. cit.*, pp. 215—223.

註九 英國海運が一面外國の保護貿易政策と他面船主の利益に反する國內立法とにより其發達を阻害されつゝある事情及び一九〇七年度の業務狀況の詳細に關しては一九〇七年十二月二十六日發行の「フエーリアブレイン」誌參照。一九〇八年度に付ては國民經濟雜誌第六卷第五號所載渡邊水太郎氏千九百八年度海運業概観參照。

抑も吾人が英國の有形的無形的輸出に就て嗷嗷すること斯の如き所以のものは、他なし、輸出の盛衰は實に根本的に英國々運の盛衰を左右するものなればなり。

自給自立に近き米露の如きに在ては輸出の消長必ずしも重視するを要せず。然れども國運の隆興を商工立國の主義に求め農業を犠牲とするを辭せざりし小英國に在ては國民の食料も工業の原料も皆輸出に依て求むるの外道なきなり。述べて茲に至り吾人は聊か英國農業の今昔を概観するの必要あるを思ふ。

第三款 農業の類廢

十八世紀の前半に於て英國は實に穀物を輸出せる農業國たるの地位を脱せず。アダムスミスが大著富國論を著したるに先づ約一年にして或期間を限り之が輸入を見るに至りたるも其割合は内國消費額の五百七十一分の一にすぎざりしが上に之に匹敵する數量の輸出ありたるものにして、眞に穀物輸入國たるに至りしは漸次製造工業勃興し綿製品の輸出國たらむとする徵候の現はれたる一七九三年にあり。然るに其後英佛戰爭結結し穀價下落の危険あるや、農業者の勢力は一八一五年の穀物條例制定となり、「クオ・タ」の價小麥は八十志、大麥は四十志、燕麥は二十六志に達するにあらざれば輸入を禁止したるが、不作に際しては高價に依て勞働者を苦め、豊作に際しては廉價を以て農業者を弱むるの結果を生じて批

難攻撃の聲頗る高く、政府は止むなく一八二八年及び一八四二年の兩度之に改正を加へたるも平準關稅法たるの特質に至ては依然として儼存せり。

斯くて農業保護政策の實施永きに亘りたれども遂に自給自立の目的を達する能はず、人爲的に不自然なる農業を維持せむが爲に穀價を高騰せしめ又不動ならしめむとせる熱心なる努力は慘憺たる失敗に了れり。されば一八三八年九月マシチエスターに組織せられたる非穀物條例同盟會(Anti-Corn Law League)の活動は夜も日も分かず、野山に降り注ぎて、英蘭には凶作を起し、愛蘭には馬鈴薯饑饉を生じ、茲に外國食物に對し異常なる需要を喚起せる一八四五年秋の大雨より百萬の援軍を得、其政治的生涯の初期に於て深く考慮を費すことなく當時諸種の政黨の間に行はれたる意見に同じ、農業保護の正常にして且つ必要なるを信じたる「ピールも饑饉の加盟せる(フライトの名句)」非穀物條例同盟會の勢力に抗する能はずして、其廢止を提案し、切迫せる困難を解決すべき良策を發見する能はざりし國會本意ならずも之を可決し、茲に穀物條例は遂に雨を以て流され終り、大地主の貴族政治と商工家の金權政治との争闘は後者の勝利を以て終結せり。

穀物條例の撤廢を目するに商工階級の勝利を以てすべき理由は、特種階級の利益より運動を開始せりとせるコブデンの自白を待たず、同運動資金の出處が工業家就中ランカンヤの綿工業家にある一事實を以て解すべく、又綿工業家が一條例撤廢の爲に敢て多額の費用を惜まざりし所以は同運動の先驅者たりしジ・セフ・ヒーム(Joseph Hume)及びリチャード・コブデン(Richard Cobden)の管見を以て悟る可し。

ヒーム思へらく「輸入なくんば輸出なし。海外に在て英國商品に大市場を求めむと欲すれば宜く先づ他國生産物を輸入せしめざる可からず。幸にして我輸入品は原料品にして輸出品は製造品なり。従て今外國穀物無税輸入を許さむには製造品の輸出増大すべく、製造品の需要増大すれば労働機會増加し、失職者減少し多数人民能く新包を購入するを得む」と。コブデン亦自問すらく「今や一日千人の割合を以て人口の増殖するに當り、労働機會の不斷の増加あるにあらずんば如何にして賃銀の下落を防ぐを得む、又もし吾人が穀物材木其他外國の生産物を輸入するにあざれば、彼等如何にして我製造品を購入し得べき」と。因是觀之、穀物條例廢止の第一目的は單に労働者をして安價の食料を得しめむとするにあらずし

て、労働機會の増加により多大の食料を消費し得べき資力を與へむとするにあり。其手段に於てこそ、今日の關稅改革論者と表裏の差あれ、期圖する所に至ては即ち是れ一なり。

ヒーム更に語を次いで曰く「歐米に於て「クオ・オート」三十志なる小麦に對し五十志を支出せしむるが如きは英國工業の生産費をして三割高からしむるもの優秀なる機械低廉なる石炭、安價なる運賃より得べき多大の利潤も之に依て皆無に歸す」と。コブデン亦曰く「穀物條例は米獨兩國をして其餘剩農産物を英國製造品と交換する能はざらしめ、以て農業資本を轉じて工業資本とし、大に外國競争を盛ならしめたり」と。是れ正に的確に英國工業家が穀物條例より被る損害を指摘し同時に彼等が同條例の廢止に熱狂せる原因を説破して、餘蘊なきものに外ならず。

然らば穀物條例の廢止は如何にして、内外製造家の負擔を平等ならしむ可きかと云ふに至てヒームとコブデンとは黑白相反する意見を抱懷せり。即ち前者が「穀物の自由輸入は供給範圍の擴大を來し、従て穀價の變動を防ぐと雖も、何人も

英國にて高價に販賣し得べき穀物を他國にて安價に賣放つとなかる可きが故に外國穀價上昇して英國穀價と同一なるに至る可しとなしたるに反し、後者は穀價の下落を確信し、之を以て自由貿易の最大福音となすに躊躇せず、従て自ら二個の新難問に逢着せり。穀價の下落は賃銀の下落を齎さざるか是れ一なり。穀價の下落は農業の衰滅を招かざるか是れ二なり。第一の危惧はやがてかの券狀黨（フナリイスト）が同條例廢止に反對したる主要原因にして、當時經濟學界を風靡せしリカード（リカード）の賃銀法則が穀價下落の賃銀に影響すべきを論述せる（註一）より見れば、學理上根據なきにしもあらずと雖も、コブデンにして之を承認せむには其主張に致命傷を受くるの窮境に陥る可し。されば彼はリカード（リカード）の説を屬るに誇張の一語を以てし、日用品市價の騰貴は既に最小賃銀に苦める農業労働者の賃銀引上の効果ある可きを反語的に賛同し乍ら、事一度工業労働者賃銀問題に入るや、工業賃銀を定むるものは一に全く労働需要の大小にあり。月の盈缺が賃銀に關係なき如く穀價の高低亦賃銀に關係なし」と自らも誇張の辯を弄して労働者を慰安せり。

進んで彼は農業者に語て曰く、もし地主にして土地に加ふるに他の生産業者が

其職業に捧ぐる資本と智識とを以てせむか、地上地下に隠れたる富源はよく穀價下落の損害を償ふて餘あるのみならず、農業家をして更に富裕幸福ならしむ可し、實に穀物條例の廢止は「エトカー」（エトカー）だも英國の耕地を減少するの憂を存せず」と。

二個の難問はかくして巧妙にコブデンに依て解かれたり。英國の民衆は翕然として彼の豫言を信じて穀令の廢止を絶叫し而て成功せり。然らば問ふ、爾後の形勢果して如何と。

一言にして盡す、コブデンの豫言は着々として適中せり、一八四二年より一八八三年に亘る期間、一八五七哩に止りし鐵道哩數一八、六六八哩に登り、九十三萬五千噸に過ぎざりし諸港出入噸數六千五百萬噸に達し、一億三百萬磅を算せし、外國貿易七億三千二百萬磅に達せる（註二）奇跡的發展の大半は完成せられ、労働者の地位亦之に伴ふて改善せられたるは云はずもがな、一時大に地主小作人を困めたる農業恐慌も一八五三年以來順調に復し、排水工事の隆盛は集約農業の發達を促し、耕作法の進歩は未曾有の收穫率を示し、小作料の騰貴も小作人の收入を減殺せず、穀物の輸入も内國農業を壓迫せず、英國の上下舉げて農商工鼎進の好況に酔ふに餘

念なかりき。

然りと雖も這般農業の隆興は一時の浮雲に過ぎず。若し東に於てクリミア戦争が露國農産物輸出の途を壯絶するなく、西に於て南北戦争が米國の機械的農業及び交通業の發達を遅延せるなからむか、コブデンの聲譽は早く一八七四年を俟たずして地に落ちたる可きなり。從て如上一時的原因消滅し、海陸交通機關の進歩莫大なる新地積の疎放的經營を可能ならしめ、又一八六〇年紐育リバープール間「ブッシュ」十二仙に登りし運賃、一八八四年には低下して僅々一仙二五となり、コブデンの所謂英國農業の受けたる自然的保護消滅したる曉に於ては、如何に集約的農業を以てするも到底老舊英國の農業は新進米露の同業者の競争に堪ふる能はず、壓迫漸く烈しきに赴くと共に農民の間自ら保護熱の復活を見、一八八五年農業組合は左の宣言をなせり。

「現状を以て推移せむか、農夫地主の眼前に迫れる運命は一に荒廢あるのみ。……

…土地にして若し耕なる可くんば即ち穀物に輸入税を賦課せざる可からず。」
農業の苦境茲に至れりと雖も、時恰かも工業品輸出増加の勢駭々たりしに加へ

自由貿易論者は當時の經濟學者に普遍なる誤謬を重ね這般英國特種の經濟狀態を基礎として其所謂世界的眞理たる國際分業説を建設し、盛に工業家の自負心を煽りたれば、さらぬだに自家生産力の優越を確信し、外人の最廉の市場に購入せむとする希望の永續を疑はざりし彼等はやがて現時開放せらるゝ門戸の他日閉鎖せられ、農業に對するコブデンの豫言の運命は亦工業に關する豫言の運命たる可きを察するに遠なく、クリミア戦後の財政難に際し避け難かりし保護制復活を排し、所得稅徵收範圍を擴張して之を永久稅とし、更に輸入稅減廢の舉に出でたる自由黨内閣に謳歌するの形勢を呈せり(註三)。彼等が農業保護の要求を容る能はざりしは當然のみ。斯くして農業は放任せられたり。放任せられたる農業は果然頽滅せり。四百餘万「エーカー」の耕地は三十五年にして草蕪と化し(註四)農地の價は二十五年にして九億磅を損し、土地より生ずる年收亦同期間に五千萬磅を減じ(註五)農業資本の損失三十年間に無慮十七億磅を算し(註六)二百萬を超えたる農業勞働者半世紀を経て九十萬にも足らざるを告ぐ(註七)。惟ふに一九〇三年十月七日グラスゴーに於けるチエンバレーンの「英國最大の産業たる農業は事實上絶滅

せりとの悲観は遂に柄として疑ふの餘地なきに似たり。

註一 リカードの賃銀法則の内容及び價值に付ては津村教授國民經濟學原論下巻五
一六頁—五二〇頁に詳論あれば付て見られむ事を希望する次第なるが、今茲に本
問題に直接の關係ある部分を抜きて左に掲げむ。

賃銀には自然賃銀即ち労働者の生存を維持するに必要な高に依て定るもの
と、市場賃銀即ち個々の場合に支拂はるゝ賃銀との二種ありて、後者は前者に一
致するの傾向を有す。社會の進歩に伴ひ、農産物の價格は漸次昂騰する傾向あ
るが故に之に依て決定せらるゝ自然賃銀も騰貴する傾向あり。但農業の進歩
及び新輸入國の發見は、時的に生活必需品騰貴の趨勢を相殺し、時としては之
を下落せしむる事ありて、其場合には自然賃銀も相當に下落するべきなり。

(Principles of Political Economy, chap. V.)

註二 Sombart, *sozialismus und soziale Bewegung*, 6te Aufl., Jena, 1908, S. 168 貿易高の一億三百萬磅は一
八四三年の数字也。本文には煩を厭ふて特記せず。茲に註す。

註三 以上の記述は専ら左の諸著による。

Quainquam, *The Rise and Decline of the Free Trade Movement*, Cambridge, 1905, pp. 57, 62, 63, 71, 72, 105, 106, 175.

Hobson, *Imperialism*, London, 1905, pp. 87—88

W. J. Ashley, *The Tariff Problem*, London, 1902, pp. 42—52

註四 英國耕地漸減表
Quainquam, *The Growth of English Industry & Commerce*, 2nd Vol., pp. 588—570

	一八七三年	一九〇八年	比
小 麥	三、六七〇、二五九	一、六六四、八六〇	減 二、〇〇五、三九九
大 麥	二、五七四、五二九	一、八二四、四一〇	同 七五〇、一一九
燕 麥	四、一九八、四九五	四、一八九、三七八	同 九、一一七
蠶 豆	六九八、一二一	二九六、九一八	同 四〇一、二〇三
豌豆	三二一、〇〇七	一六四、一八三	同 一五六、八二四
馬 鈴 薯	一、四二五、七二〇	一、一六一、一一二	同 二六四、五九八
燕 麥	二、四七九、八四七	一、八三七、九九七	同 六四一、八五〇
草 原	二二、三六三、九九〇	二七、五二三、五六二	增 四、一五九、五七二

(Nineteenth Century & After, Sept. 1908, Art. "The Land, People and the General Election" by J.E. Barker)
最近四年間燕麥の外耕地益々減少し、農法愈々疎放となれるは左の一表之を敢て
て餘あり。(耕地は千「エーカー」、産額は千「ブッシュェル」、平均收穫は「ブッシュェル」を各
單位とす)

小 麥		大 麥		燕 麥	
耕 地 産 額	「エーカー」	耕 地 産 額	「エーカー」	耕 地 産 額	「エーカー」
一九〇五	一、七九七、五八、九〇二	一、七二四、五八、一一〇	三、〇五、一一六	四、三三七、三八、一六	
〇六	一、七五六、五九、〇九二	一、七五一、六〇、五五四	三、〇四三、一一三	三、八四四、〇、五五	

〇七 一、六二五、五五七、〇六三、三三九、九六六 一、七二二、二六〇、三六九、三三三、二六六 三、一三三、一三四、三九二、四三〇、四〇八

一九〇八年年度の数字前表と一致せず。疑を存して掲ぐ。(Statesman's Year Book, 1909)

註五 一八七五年より一九〇〇年の二十五年間の損失なり。Thomas Kirkup, Progress and the

Fiscal Reform, London, 1905, pp. 137-138.

註六 エンバレーンの計算(O. Fitzhacker, op. cit., p. 361)

註七 英國農業男子労働者漸

	英國及ツボリス	スコットランド	アイルランド	合 計
一八五一	一、〇九七、八〇〇	一、四〇〇、二〇〇	八五〇、一〇〇	二、〇八八、一〇〇
六一	一、〇七三、〇〇〇	一、二五、九〇〇	六〇三、二〇〇	一、八〇一、一〇〇
七一	九〇二、八〇〇	一一一、〇〇〇	五〇九、七〇〇	一、五二三、五〇〇
八一	八〇七、六〇〇	九一、八〇〇	二九三、三〇〇	一、一九二、七〇〇
九一	七〇九、三〇〇	八五、一〇〇	二五一、七〇〇	一、〇四六、一〇〇
一九〇一	五八三、八〇〇	七三、八〇〇	二二二、二〇〇	八六九、八〇〇

(Nineteenth Century & After, Oct. 1909, Art. "The Land, the Landlords, and the People" by J. E. Barker.)

チエンバレーンを批難し、英國の衰勢を否定するに汲々たる論者と雖も此の大現象は到底否定し得べきにあらず。アベブリー卿は曰く

余は農業の不景氣には論及せざる可し。もとこれ天候の險惡に基くものなれば貿易政策を變更したりとて太陽熱の缺乏と大雨の襲來とは如何ともなしきにあらずや。英國の農業絶滅せりと云ふが如きは甚だしき邪説のみ

と。何故に英國の農業絶滅せりと云ふか如きは甚だしき邪説なりや。吾人は卿の説明を求めむと欲す。然も卿は唯單に断定を下して説明を與へず。顧みて他を云へり(註八)。即ち知る、自由貿易に心酔せる卿と雖も亦到底自由貿易に起因する農業の頹廢を否認する能はざる可きことを。太陽熱豈米國農業の勃興と伴ふて急激に缺乏するの理あらひや。大雨の襲來豈單獨以て英國農業を亡滅せしむるの力あらひや。自由貿易の罪を無辜の太陽と雨師とに歸して自ら逃る、靈あらば天日雨師と相擁して雲上に其不遇を嘆ぜむ。

速断すること勿れ、農業が自由貿易の爲に衰頹せりと説けばとて吾人は之を理由として直ちに自由貿易主義——當時の英吉利に在ては即ち商工立國主義——を不可なりとなし、エリス、バーカーの如く、是れ商工黨たる自由黨久しく地主黨たる保守黨を歴し、一八四六年穀物條例廢止以來相當の保護を加えず、適當なる處置

を採らず偏に地主農民を迫害したるによると批難する(註九)ものにあらず。否寧ろ吾人は彈丸黒子の島國たる英吉利が徒に鎖國的重農思想を奉迎せず斷乎として商工立國の大綱を確立し二兎を追ふて一兎をも得ざるの愚を演ずるに至らざりしは眞に機宜を得たる雄策を以て許すべきものなりとなすものなり(註十)。

註八 Lord Avebury, Free Trade, London, 1906, p. 8 et seq.

註九 Nineteenth Century & After Sept. 1909, Art. "The Land, The People and the General Election," by J. E. Barker

註十 國民經濟雜誌第六卷第五號津村教授我國に於ける農業保護主義を論ず(四七一—五〇頁参照)。

第四款 輸出品の變遷

されば吾人をして云はしめむか、農業の頽廢宜しく忍ぶ可し。然も農業を犠牲として建設したる工業の基礎動搖を感ずるに至ては到底是れ忍ぶ可からざる大問題なりと云はざるを得ず。

何を以て動搖ありとなすか。

既往二十餘年間工業品の輸入年々増加するに拘らず其輸出額は最近少しく増加せるを除きては、大體に於て減少の趨勢あるが爲に、工業品輸出超過額は漸次減

少の傾ある結果輸入品總額に對する工業輸出品の割合の減少より生ずる缺陷(註一)が英國の工業國たる名聲を累すること甚だしき輸出品に依て填補せられつゝある一大變遷即ち是れ。

註一 英國に於ける工業品輸出の大勢

年	總輸入額 百万鎊	内工業品 輸入額 百万鎊	工業品 輸出額 百万鎊	總輸入額 と工業品 輸出額の 差 百万鎊	工業品輸 出の工業 品輸入超 過額 百万鎊
一八八〇—八九	三三三	七九九	二〇二	一一二	一一三
八一—九〇	三三二	八一	二〇四	一一八	一二三
八二—九一	三三六	八二	二〇五	一一一	一二三
八三—九二	三三七	八四	二〇三	一一四	一一九
八四—九三	三三六	八五	二〇〇	一一六	一一五
八五—九四	三三八	八六	一九八	一一四	一一二
八六—九五	三四二	八八	一九八	一一四	一一〇
八七—九六	三五二	九一	二〇〇	一一二	一〇九
八八—九七	三六〇	九四	二〇一	一一五	一〇七
八九—九八	三六九	九七	二〇〇	一一六	一〇三
九〇—九九	三七五	一〇〇	一九九	一一七	九九

第一節 新機の動搖

二七七

第五章 英吉利の帝國主義

二七八

九一—一九〇〇	三八五	一〇四	一九九	一八六	九五
九二—〇一	三九三	一〇八	一九九	一九四	九一
九三—〇二	四〇四	一一二	二〇二	二〇二	九〇
九四—〇三	四一六	一一六	二〇六	二一〇	九〇
九五—〇四	四二九	一二一	二一二	二一七	九一
九六—〇五	四四二	一二五	二二〇	二二二	九五
九七—〇六	四五六	一三〇	二二九	二二七	九九

(日本經濟新誌第三卷第二號社説「商人及消費者本位の論」七一—八頁)

試に近時激増せる英國の輸出品を數へよ。一に曰く石炭なり(註二)。二に曰く機械なり。三に曰く粘土、四に曰く酒精、五に曰く蠟燭、六に曰く石鹼、其他曰く何、曰く何(註三)皆下等安價の勞働産物にして製造品と云はむよりは一個の原料品粗製品と名く可く、天然の富源豊ならず、曩日高等なる勞働者を供給するを以て誇となしたる英國が這般無限に繼續する望なき輸出品の増加を以て辛うじて其貿易の均衡を保たむとは工業國として人も許し我も亦任じたる其威嚴を損すること幾許なりとすべし。

註二 今石炭の輸出と其他の内國品の輸出とを五ヶ年間の平均に依て示す時は左の如

し(單位百萬噸)

	石炭	其他
一八八三—一八八七	一〇	二一四
八八—一八八二	一六	二二七
九三—一八九七	一六	二一一
九八—一九〇二	二八	二三六
一九〇三—一九〇七	三一	三一四
一九〇八	四二	三七七

(一九〇二年迄は *Altenhofer, Die Funktion in der englischen Handelspolitik, Berlin, 1909, S. 38.*)
溯つて五十年前來の趨勢を見るに

年	石炭	其他
一八五〇年	一、四万噸	
一八六〇年	三、七	
一八七〇年	六、七	
一八八〇年	一〇、八	
一八九〇年	二三、九	
一九〇〇年	三八、六	

爲に一八五〇年には輸出貿易額の二歩にすぎざりしもの一九〇八年には一割一歩を越ゆることとなり、産額より云へば、一八七二年の輸出は産額の一割二歩七厘

第一節 新機軸の動搖

二七九

第五章 英吉利の帝國主義

なりしに一九〇四年には二割八分二厘となり、一八七二—一九〇四年間生産額の増加は八割なるに輸出額の増加は二十割を示す。
尙ほ驚く可きは一八七三年—一八八二年間と一八八三—一八九二年間とを比較するに

石炭の輸出増加	四千萬磅
其他の物の輸出増加	一億〇百萬磅
なるに、一八八三—一八九二年間と一八八三—一九〇二年間とを比すれば	
石炭の輸出増加	八千四百萬磅
其他の物の輸出増加	二千八百萬磅

となり、しかも一八九三—一九〇二年の間に英國機械輸出高の増加三千六百萬磅に登るが故にもし機械の輸出膨脹なかりせば此の期間に石炭以外英國の一般輸出は實に入百萬磅の減退を呈したるべきなることこれなり。(Cunningham, The Rise & Decline of the Free Trade Movement, p. 140.) 茲に吾人は河上學士の見解を以て健全なる輸出増加と見る能はずと云ふ(日本經濟新誌第一卷第一號二二—二三頁)を基礎として津村教授の「英吉利の輸出貿易は増加せざるにあらざるも其主要原因は實に此等原料品の輸出増加にありと云ふに至ては彼等も亦遂に誇り且つ安んずる能はざるべし」とせられたる(國家學會雜誌第二十卷第七號四三頁)に賛意を表す。

註三 W. J. Ashley, The Tariff Problem, 2nd Edition, London, 1904, p. 105 et seq.

ラケナードに依て英國輸出品の内容を示す事左の如し。(金額は百萬磅を單位とし歩合は總輸出額に對する歩合とす)。

重要輸出品	金		石炭		金屬工業品		機械工業品	
	額	歩合	額	歩合	額	歩合	額	歩合
一八六二	七一、八五	五八、〇	三、八〇	三、〇六	二〇、九〇	一六、八六	四、三八	三、五三
七二	一四八、二一	五七、八	一〇、四四	四、〇七	四七、一一	二八、三四	八、五六	三、三四
七九	一〇五、五八	五五、一	七、二一	三、七六	二九、四八	一五、四〇	七、六四	三、九九
九〇	一三三、八三	四七、〇	一九、〇二	七、三三	四五、三三	一七、二一	一六、七七	六、三六
九八	一〇四、四六	四一、九	一八、一四	七、一〇	三一、六五	一三、四〇	二一、一七	八、二九
一九〇〇	一〇六、八四	三七、八	三八、六二	一三、六七	四三、五八	一五、四二	二二、一九	七、八五

(Adolf Wagner, Agrar- und Industriestatist. 2te Aufl., Jena, 1902, S. 300, S. 210.)

樂觀論者或は曲辯説をなして曰く「石炭は是れ製造品にひとし」と。アスキス然

り(註四)アベプリー亦然り(註五)。

註四 アスキス曰く坑口に於ける炭價の約八割は勞銀なり。借問す、天下果して此の如く多大の勞働よりなる製造品ありや否や」(Oct. 24, 1903 at Newcastle-on-Tyne, Trade and Empire, London, 1903, p. 43)

註五 ビ、アン曰く石炭一噸二十五志の賣價中二十志以上は勞銀及び運賃に當り石炭其物の原存場所に於ける價は六片乃至九片にすぎず。されば石炭は或る意味に

於ては原料品なれども亦他の意味に於ては製造品なり(Avenbury, op. cit., p. 55)

若し夫れ此の如き議論にして承認せらるべしとすれば一切の生産品は悉く變じて製造品となり世復一の原料品たるもの存せざるに至らむ。詳言すれば市價の大部分が勞銀或は運賃—廣義に於ける勞銀の一種なる—に基くを以て製造品なりと斷ずべくんば從來一般に粗製原料品と認められたる一切の林産物(註六)鑛産物水産物及び農産物(註七)は忽然として製造品と化し、世界廣く國多しと雖も原料輸出を以て目すべきものなく、從て又工業國を以て誇り得べきもの皆無たるに至らむ。何の愚論か之に如かんや。

註六 東京にて一尺七寸五十分の槍は原産地たる秩父地方に於ては二十錢乃至三十錢なるにすぎず(石橋文學士講義園藝地理學の一節)

註七 何者農産品の價格は最高生産費に依て定まるを原則となし、最高の生産費を要する土地は即ち最劣等なる地味地位を有する土地にして地代を負擔せず(反對說あり國家學會雜誌第廿卷第六號所載山崎博士、地代は全然生産費に含蓋せられざるか)簡にして要を盡す。但吾人は「カーディー」に從ふ曰く「地代は悉く農物の價の一部をなさず、又成す能はず」と。(内外論叢第五卷第四號福田博士「アンダーソンの地代論」と「カーディー」の地代論)前は詳細は津村教授國民經濟學原論下卷四二二—

一四三四頁參照)又資本に對する報酬は機械應用の大農に於ける銷却費或は特別に多額の肥料種子代等を支出せし場合等を除きては著しからず。從て穀價の主

要部分は勞銀と利潤との混成に外ならざればなり。

石炭製造品に敗れたる自由貿易論者は一步退いて其陣を固守せむとせり。モノ曰く「石炭の採掘に始り、運送船積航海を経て目的地に至る迄に要する諸種の勞働を思ひ、之より生ずる利益を算せむか、石炭輸出悲觀論の如き取るに足らず、况んや如何なる商品と雖も之が製造には石炭を要し、製造品の輸出は或る意味に於て石炭の輸出なるに於てあや」と(註八)。然り、石炭輸出に多大の勞働の使用せらるゝは事實なり。問題は唯其勞働の高等なりや下等なりやにあり。更に適切に云へば、半製品の輸入を禁止して自ら之を製造せむとするは高等なる勞働形態を化して下等なる勞働形態たらしむるにすぎずとせる(註九)より三十頁を経ざるに早く石炭採掘勞働を以て獎勵すべき勞働形態なるかの如く論ずるに至りしモノ、氏の學說の變遷は退化と呼ぶ可きか、進化と見る可きかにあり。氏が如何なる製造品の輸出も石炭の輸出を意味すと云ふに至ては吾人何等異論を有せず。希

望する所は直接の石炭輸出を變じて間接の石炭輸出たらしむるにあり。直接と云ひ間接と云ふも等しく是れ石炭輸出にあらずやと詰らむには答へて問はむ、鐵の輸出も機械の輸出も等しく是れ鐵の輸出に非るか」と。石炭輸出を讚美せむとする議論は畢竟自由貿易論者の最愛兒とせる英國の工業國たる面目を傷くる無くして成立すべきにあらざるなり。

工業國たる面目を傷けずして石炭輸出を讚美せむとする論者は茲に最後の窮策として二個の辯明を提出す。トーマス氏が「輸出石炭の半額は英國船の消費に拘るものにして、單純なる輸出にあらず、海運國として世界に冠たる地位を維持する資料なり」となす其一なり(註十)。シュルツェグーアニッツが「穀物棉花羊毛礦石等を輸入し來る英國船舶は運賃を得べき底荷として石炭を輸出し以て一般運賃を低廉ならしむ、從て其輸出は英國商工業上の新權てふ九天井に缺く可からざる基石なり」となす其二なり(註十一)。以上の説明は理に於て巧妙を極め、一點の非難を加ふ可からず。然もアッシュレーと共に(註十二)英國商船及び軍艦の噸數と其平均消費量とを算出し、日本炭、印度炭、新西蘭炭、米國炭等の使用額を差引して輸出炭

中英船の消費とすべきもの僅に三分の一を超ゆ可からざるを見、次て近時石炭輸出増進の速度遙かに海運發達の程度を壓し、前者の原因を後者に歸す可からざるを悟るに於て、吾人は未だ前言を撤回するの確信を得る能はざるを嘆ぜむと欲す。

註八 T. G. C. Money, op. cit., pp. 53-55

註九 Ibid. p. 25

註十 Ibid. p. 53

註十一 Schuler-Guerwitz, a. a. O., S. 288ff. 「一九〇〇年に英國輸出品總噸數五千五百七十萬噸

中石炭以外の輸出は七百七十萬噸に達せず」と。

註十二 W. J. Ashley, op. cit., pp. 250-251

第五款 販路の縮少

眼を海外に轉じて英國産業の勢力を檢せんか吾人は又もや其前日の觀なき凋落の狀に接せざるを得ず。次の拔萃は恐くは激烈なる生存競争の幾分を察せしむるを得じ乎。

一獨逸の南阿に於ける商勢は非常に進歩し安價にして比較的の使用に耐ふる多くの商品を輸入し從來の英國商品に代ふるに到り、米國は嶄新なる諸機械建築材

新電氣鐵道材料食品を盛んに輸入し斯くて獨逸と米國とは南阿貿易に成功し居れり(註一〇)。

二過去十五年間に於ける英獨兩國の對露貿易變遷の跡を顧るに實に左の如し。

國際より露國へ輸入せし額	其總輸入額に對する百分比	英國より露國へ輸入せし額	其總輸入額に對する百分比
一八九〇—一九四	一一二、五四三	一〇六、九二三	二四、
一八九五—一九九	一九二、七〇八	一一七、二五三	二〇、六
一九〇〇—〇四	二〇四、五一九	一〇九、二六六	一九、四
一九〇六	二六七、一〇九	一〇四、八八〇	一六、七

道般商勢の消長は主として獨逸が自國輸出品に對し利益ある稅率を露國と協定せるに依る(註二〇)。

三米國は墨西哥貿易を掌握せむとし、英國商館は漸次其影を窃む。昔ては英國の好得意たりし伯西に於ても今や洋燈は白耳義産たり陶磁器硝子鏡針及び裁縫機械は獨逸産たり而て寶石及び農業用諸器械は米國製たり。アルゼンチンも漸次獨逸資本及び企業の侵入に遇ひて英國の勢力減退し白獨米の産物は英品

を驅逐しつゝあり。

四一八九二年迄西班牙バルバオ市場を獨占せし英國品も漸次獨佛白埃瑞西等の爲に驅逐せられ英國人たる硝子商迄白耳義より其商品を輸入するに至れり。

五一八八九年来米國製器具類は濠洲市場に横行し外科醫師用器具玩具金具の類亦評判宜く、樂器、時計、鎖、釘、鐵管等英國製と稱すれども實は皆獨米産品なり(註三〇)。

註一 日本經濟新誌、第二卷第二號四二頁

註二 The Nineteenth Century & After, July 1908, Art. "The Triple Entente and the Triple Alliance," by J. Ellis Barker.

註三 三、四、五は英國領事の各地より發せる報告中二三を摘録したるものにして、ペラーの著書より引用せり。尙ほ參考の爲一九〇九年十一月三十日以降英吉利「モーニング・ポスト」に連載されたるスクーリング氏の論文により主なる貿易國の總輸入額に對する英吉利品の割合を示せば左の如し。(日本經濟雜誌六卷九號以下よりかゝる)

國	逸	米	國	和	蘭	露	國	支	那	伊	太	利
一八八一—一九〇	一四、八	二四、九	二四、八	—	—	—	—	二二、〇	二一、九	—	—	—
八二—九一	一四、八	二四、四	二四、一	—	—	—	—	二二、六	二一、五	—	—	—
八三—九二	一四、九	二三、五	二三、四	—	—	—	—	二二、四	二一、四	—	—	—

八四—九三	一四、八	二三、〇	二二、九	二二、八	二一、八	二一、三
八五—九四	一四、六	二二、三	二一、七	二二、九	二一、三	二一、四
八六—九五	一四、三	二二、一	二〇、九	二二、九	二〇、六	二一、四
八七—九六	一四、一	二一、九	二〇、〇	二二、一	二〇、四	二一、五
八八—九七	一三、八	二一、七	一九、四	二二、五	一九、九	二一、六
八九—九九	一三、四	二一、一	一八、二	二一、七	一九、一	二一、一
九〇—九九	一二、九	二〇、五	一七、三	二一、四	一八、四	二〇、八
九一—一九〇	一二、七	二〇、〇	一六、六	二一、二	一八、六	二〇、五
九二—〇一	一二、四	一九、四	一五、七	二〇、八	一七、九	一九、七
九三—〇二	一二、〇	一九、三	一四、八	二〇、〇	一七、七	一九、一
九四—〇三	一一、六	一九、〇	一四、〇	一九、二	一七、三	一八、五
九五—〇四	一一、二	一八、八	一三、四	一八、四	一七、〇	一七、九
九六—〇五	一〇、九	一八、三	一二、八	一七、八	一七、二	一七、六
九七—〇六	一〇、七	一七、八	一二、五	一七、一	一七、一	一七、五
九八—〇七	一〇、七	一七、四	—	—	—	—

第六款 重要産業の衰微

關於英國主要産業の一二を觀むに、ランゲンベックは曰く

造船業及び纖維工業に於ては英國未だ世界獨歩の地歩を失はずと雖も、鐵及び鋼の生産額に於ては遙かに米獨の後塵を拜せざるを得ず。一八七三年英國は鋼を産すること六十五萬三千噸、合衆國は僅に二十萬噸なりしに、一八九九年には英國の産額は五百萬噸に過ぎざるに、合衆國は一千六十四萬噸を出せり。進んで一九〇三年に至るや、英國は鐵に於て八百八十萬噸、鋼に於て五百萬噸を産し、之を獨逸の鐵産額九百八十萬噸、鋼産額八百七十萬噸に比するも大に遜色ありとなさざるを得ず(註一)。

實に米獨に於て新式のトーマスギルクリスト式又はシローメンスマルチン式を用ふるに當り未だベセマー式を株守せし英國製鐵業が漸次其地位に動搖を感ぜるは當然の理、遠き以前より衰微歴然たるものあり。試に二三の事例を掲げむか、一八九七年七月一日より翌九八年六月三十日迄に英國より米獨へ輸出せし鐵及び鐵製品十一萬九千屯、百七十萬磅なるに、米獨より英國に輸入せられ鐵額は百十八萬噸、二百六十萬磅なりし事實が兩國間の舊時の關係を一變し然も米獨品は英國品よりも高等なりしを教示する其一なり。一八九七年十二月五日紐育孟買間

定期航路の第一船「サハラ」號がマリイランド鋼鐵會社より印度國有鐵道に賣却せる軌條千七百噸を積込みて出發せるに關する質問に對し印度事務大臣が米國品は大に英品より安價なるを答辨せる其二なり。外國は勿論、英領殖民地も製品々質の優等、引渡期限の確實なるを喜んで米國に注文を發するのみならず、英國内に在ても太北 (The Great Northern) ミッドランド (The Midland) の二大鐵道會社は米國に四十臺の機關車を注文し、遂には英國政府自ら蘇丹に於けるアトバラ (Atbara) 川架橋材料を米國に求めたるが如き其三なり。モズレー工業視察員 (Mosley Industrial Commission) が異口同音或は米國製鐵所の内部設備の良好を嘆じ、或は工程の整頓し手工的勞働の少さを感じ、或は生産力の偉大生産費の低廉に驚きたる其四なり。以上四例は自ら英國商務省長官リッチーが大陸埃及び日本より嘗て英國に注文せるものは今や悉く米人の手に落ちむとし、倫敦地下鐵道材料の入札に於ても米國會社が英國工場より大に低廉迅速に供給し得るを示せり、余は獨逸よりも米國を以て十倍も恐る可き競争者と信ず、となせる所以を明ならしむるに足るものと云ふ可し。

註 1 W. Langenbeck, Englands Wirtschaft, Leipzig, 1907, S. 111.

更に詳細なる表を左に示す(一九〇三年迄は Schulze-Gaevernitz, n. n. O., S. 278 により其後は Stateman's Year Book により補ひたるものなり)

英國米鐵業比較

英 吉 利	北 米 合 衆 國		獨 逸	
	鐵 產 額 千噸	鋼 產 額 千噸	鐵 產 額 千噸	鋼 產 額 千噸
1870-1880	1,010	1,100	1,100	1,100
1881-1890	1,290	1,290	1,290	1,290
1891-1900	1,740	1,740	1,740	1,740
1901-1910	2,080	2,080	2,080	2,080
1911-1920	2,750	2,750	2,750	2,750
1921-1930	3,420	3,420	3,420	3,420
1931-1940	4,090	4,090	4,090	4,090
1941-1950	4,760	4,760	4,760	4,760
1951-1960	5,430	5,430	5,430	5,430
1961-1970	6,100	6,100	6,100	6,100
1971-1980	6,770	6,770	6,770	6,770
1981-1990	7,440	7,440	7,440	7,440
1991-2000	8,110	8,110	8,110	8,110
2001-2010	8,780	8,780	8,780	8,780
2011-2020	9,450	9,450	9,450	9,450
2021-2030	10,120	10,120	10,120	10,120
2031-2040	10,790	10,790	10,790	10,790
2041-2050	11,460	11,460	11,460	11,460
2051-2060	12,130	12,130	12,130	12,130
2061-2070	12,800	12,800	12,800	12,800
2071-2080	13,470	13,470	13,470	13,470
2081-2090	14,140	14,140	14,140	14,140
2091-2100	14,810	14,810	14,810	14,810

而てアークライトの發明以來永く英國々民經濟の背髓骨(Rückgrat)たり、今も尙ほ或意味に於て然る綿業(註二)の世界に冠たるや、ランゲンベックの言の如しと雖も、其優勝は決して昔時と同日の論にあらず。試に同業の中心マンチエスターの地位の變遷を見むか、一八〇〇年に於ては略ぼ世界の全生棉を消費し、一八五〇年に至りても世界の全消費額以上を消費し、爾後二十年間米歐兩大陸の消費合計漸く同市と相等しきにすぎざりしが、一八八〇年となるや歐大陸の消費は同市に追及して其後十年之を抜き、一八九七年米國亦同市と比肩して翌年之を超え、かくして今日ランカシャーイヤー生棉消費額は全世界棉産額の二前一步強たるに止れり。

(註三)自由貿易論者は「一八八九—九〇年度に米國棉花總産額の四割を輸入せし英國棉工業が一九〇二—〇三年度に二割六歩を輸入するに止りしは其世界的地位の衰頹なり」となす保護論者に對しては獨逸經濟學者の示教に従ひ、此の如きは同一量の棉花に加ふる資本勢力の大なる細絲を紡ぐに至りし結果にしてよく其工業上の優勝に叶ふものなり」と答ふるを得べし。(註四)然も上述せる獨占的地位の喪失に至つては遂に何の辭を以てするも辯じて餘なき能はざるを奈何せむ。否

其獨逸學者すらランカシャーの優勝は今日尙ほ危殆を感ぜずとすると同時に其地位の全く防禦的なるを承認せざる能はざるを奈何せむ。(註五)

註二 Schuler-Gaeveritz, a. a. O., S. 16 und S. 230

註三 其數字左の如し。五百對度入債一千債を單位とす

	英 國	歐洲大陸	米大陸	合 計
一八四二	一、三七二	三一六	三二七	二、五四一
一八五二	一、八七八	一一八九	七八二	三、八四九
一八六二(南北戰爭)	三、三三二	八一四	四〇	二、一八六
一八七二	三、三三五	二、〇九九	一一一四	六、六四八
一八八二	三、四二六	三、四四七	二、二五八	九、一三一
一八九二	二、八九三	三、八八五	二、五九六	九、三三四
一八九八	三、四三〇	五、〇〇六	三、八八九	一二、三二五
(以上ベラルール前編、一七四頁による)				
一八九九—一九〇〇(十月一日より)	三、三三四	四、五七六	三、八五六	一三、七七三(印度日本等を含む)
一九〇〇—〇一	三、二六九	四、五七六	三、七二七	一三、四一六
〇一—〇二	三、二五三	四、八三六	四、〇三七	一四、四一五
〇二—〇三	三、一八五	五、一四八	四、〇一五	一四、四七八
〇三—〇四	三、〇一七	五、一四八	三、九〇九	一四、三一一

第五章 英吉利の帝國主義

〇四—〇五	三、六二〇	五、一四八	四、三一〇	一五、五四二
〇五—〇六	三、七七四	五、二五二	四、七二六	一六、三八五
〇六—〇七	三、八九二	五、四六〇	四、九五〇	一六、九三二
〇七—〇八	三、六九〇	五、七二〇	四、二二七	一六、二三〇
〇八—〇九	三、七二〇	五、七二〇	四、九二二	一七、一〇五

(日本經濟新聞六卷九號三九頁による)

更に其消費の百分率をマイヤーに依て示すと左の如し。

	英 國	歐洲大陸	合衆國
一八七六—八〇	四二、二五	三四、五〇	二三、二五
八一—八五	三九、八八	三六、四一	二三、七一
八六—九〇	三三、二八	三八、〇〇	二四、六二
九一—九五	三三、二八	四〇、一六	二六、五六
九六—一九〇〇	三〇、五五	四〇、八五	二八、六〇
一九〇一	二七、八四	四一、四二	三〇、七四
一九〇二	二七、四〇	四〇、二〇	三二、四〇
一九〇三	二五、七〇	四三、八〇	三〇、五〇
一九〇四	二五、三五	四〇、三六	三四、二九

註四 (Zum handelspolitischen Streit in England, Zeitschrift f. d. g. Staatswissenschaft, 1906, 4 ter Heft, S. 674. Schulze-Gaevernitz, a. a. O., S. 295.

五 Schulze-Gaevernitz, a. a. O., S. 296. 彼が此の論断を下せし根據は Howins の左の統計表なり。
英國綿製品純額(總生産高より原棉價格を差引きたるもの)

平 均	内國市場		輸 出		合 計	生産額 合計
	消費額	生産額	輸出	輸入		
一八七六—八〇	六、九	三三、二	七、四	四〇、六	四七、五	
八一—八五	八、〇	三五、一	八、三	四三、四	五一、四	
八六—九〇	九、四	三三、八	七、九	四一、七	五一、一	
九一—九五	九、五	三二、九	七、四	四〇、三	四九、八	
九六—一九〇〇	一〇、八	三四、二	七、四	四一、六	五二、四	
一九〇一—〇四	九、〇	三七、八	六、六	四四、四	五三、四	
一九〇四	七、七	三九、五	六、八	四六、三	五三、九	

惟ふに十九世紀を紀念すべき偉大なる科學の進歩は機械の進歩となり、自動的機械が人力よりも安全に低廉に且つ均一に運轉するに至るや、從來劣等國民として蔑視せられたる印度人墨西哥人日本人支那人は勿論亞米利加の黒奴すら能く海外より招致せる少數熟練職工の指揮の下に生産業に従事し得るに至り、長年月の経験に養成せる英國労働者の技術的優越の價値大に減少すると同時に、先進國の機械製造業は發達國として居乍ら過去數十年の苦心の成果たる最新式機械を利

用して工業を開始せしむる事と成りぬ。此の變遷は後進國の保護關稅政策と俟つて所謂工業分散の傾向を現はし、幾日千里の遠きより原料品を吸収したる蕭條勞働の勢力大に衰へ、今や却つて原料産地に資本及び勞力の集中を見るに至らむとす。クロボトキンの農工業管説に服せざるものと雖も、彼が其持説の根底とせる事實は否定す可からず。曰く「過去三十年の世界商工業史は工業分散の歴史なりき、此の分散は過去に於て商業上の覇權が伊より西に、西より蘭に、蘭より英にと移動せるより遙かに重大なる意義を有し、商工業上の覇者と云ふが如き地位に達するを全く不能ならしめたり」と。(註六) 這般の變遷を名けて變化と云ふ可きか、抑又革命と云ふ可きか、其はカーネギーの好む所に任せて(註七) 吾人は唯マイヤーと共に昔時の世界經濟の自然的基礎は一變して、英國の地位を不利益ならしめたり然も此の發展の傾向は更に將來にも作用すべき趨勢あるを指摘し(註八) 以て英國人が新狀態に順應せる新政策を探るの必要あるを暗示するに止めむ。

註六 Kropotkin, *Fields, Factories, and Workshops*, New York, 1906, p. 45. 此は本書の第一章第二章は工業の分散を説いて眞に有益の文字なり。參照を望む。

註七 Andrew Carnegie, *The Empire of Business*, New York & London, 1902, pp. 319-320.

註八 A. Meyer, *Zum handelspolitischen Streit in England*, (Zeitschrift f. d. g. Staatswissenschaft, 1906, 1. o. Bd. S. 685.)

要之、在ゆる方面よりする觀察の結果保護關稅に生産力を養はれ産業合同に競争力を強められたる新進氣鋭の二大競争國の兩々善を駢べての活躍が日進月歩先づ自國市場を獨占し次で外國中立市場を攻撃し、轉じて英國殖民地市場に侵入し、連戦連りに勝つて餘勢滔々、英本國に殺到し、豪然其鼎の輕重を問はむとするの狀は炳乎として疑を挟むを許さざるの一大事實に屬し、シユルツエ、グーヴァニツツの言て、英國は資本の輸出を以て危大なる輸入超過を支拂ふ、其政治的領域の擴大は母國に寸毫の利益をだに寄與せず、實に英國の國族は他國の商業を伴ふとせる吾今や嘗に殖民地のみならず母國に就ても眞ならむとす。此の一大事實の前に立つて、英國は永く世界の工場たるべしと説くが如きは迂論にあらずんば即ち毒論なり。

夫れ英國が渺たる北海の小島に居し乍ら尙ほ居然として世界の覇者を以て任

じ敢て、光榮ある孤立を避けず、又敢て自由貿易の孤壘を捨てず、隻手頼綱を既倒に回さむと勉めたるもの一に全く軍事上にはウォーターロー、トラファルガーの昔を夢み、經濟上には世界工業の永久的中心を想ひしによる。然るに星移り物變り、曩には南阿の一戰端なくも軍事上の弱點を懸念するあり、近くは獨米の海軍擴張に二強標準の保持危きの感あり、加ふるに商界の激戦に經濟上の王冠亦永く其頭上に宿らざる可きを示すを以てす、小英國民たるもの、何んぞ煩悶なきを得むや。英吉利滅亡の説於茲乎起る。

第二節 英吉利滅亡説

若し夫れ這般の滅亡説にして、民衆の排英的氣風を挑發して爲にする所あらむと欲し、獨逸に刊行せらるゝこと多き英獨戰爭未來記の如きか、或は又一時の感情よりして諷刺的に著述せらるる英國衰滅記の如くんば、到底一顧を値するものにあらずと雖も、苟くも英本國內に英本國人に依て唱へらるゝもの少からざるに至ては、遂に是れ雲煙過眼視するを得ざるものと云はざるを得ず。聊か茲に叙述の筆を費さむとする所以也。

第一款 滅亡説の内容

クラーク氏先づ曰く、

凡そ國に榮枯盛衰あるは敢て個人と異らず。大工業發展の先鋒たりし英國は又先づ之を失はざるを得ざる可し。尤も直に之を失ふ可しと云ふにあらず。又各部門の工業を擧げて之を失ふ可しと云ふにあらず。然も其が何日かは空

前の大規模經營を行ふ邦國に奪はる可きに至ては疑を存せず。彈丸黒子の島國たる英吉利は國際競争より退いて英語國民の遊樂地たるに至らむの運命を免かる可からず。(註一)

トーマス氏は石炭を基として經濟的に立論すらく

吾人は英國石炭の絶滅を見るが如きことなかる可しと雖も今後五十年にして南ウエールズ地方炭田の最良部分の消耗し終る可きは有力なる鑛業家の見解の一致する所なり。今假りに石炭消耗の期近きたりと想像せよ。現時の四千萬噸の輸出は之れを見ると得ずして輸入却て一億五千萬噸に達す可く、炭價は登つて合衆國の數倍に達せむ。事茲に至らば如何にして中立市場に競争し得べき。否如何にして製造工業の利益を見るを得べき。

英國現時の地位の卓越は安價の燃料に基くものなるに、其の燃料騰貴せば英國工業は結局衰頹の悲運を免る可からず。然るに悲哉一八八三年合衆國の炭價は坑口に於て一噸六志五片半、英國炭價は五志七片半なりしに、一九〇一年に至ては前者は五志六片四分の三に減ぜしに反し後者は九志四片四分の一に暴騰

せり。

石炭盡きて熔鑛爐に火なく工場閉として聲なきに至らむか、吾人は抑も何を賣つてか吾人を支ふる食料を購ふ可き。吾人は遂に國を擧げて餓死するの外なきにあらずや。

或は樂觀するものありて曰く「石炭盡くるに先ち、人智の發達は必ずや動力供給の新源泉を發見せむ。何ぞ然く憂ふるの要あらむや」と。夫れ或は然らむ。然も假に新動力發見されたりとするも是れ果して英國に其石炭に於けるが如き優勢なる地位を附與すべきものなる可きや如何、誠に疑はしき問題と云はざるを得ず。

而て若し如上英國の相對的退歩が永久的にして、且吾人が國際競争場裡に敗北しつつありとせむか、是れ實に人力の以て如何ともなし難き事情に出るもの、吾人の苦心も煩悶も遂に無益の業たるに終る可し(註二)

註一 Contemporary Review, Dec. 1890, Art. "The Social Future of England," by William Clark

註二 W. J. Ashley, The Tariff Problem, London, 1904, p. 260 et seq.

第二款 滅亡説の批評

世界的生存競争場裡英國の地位の岌々乎として夫れ殆きが如き感あるに際し這般の悲觀論を聞く、吾人亦容易く之に賛すべきに似たり。然も幾多の疑問の自ら吾人の屬裡に湧き来るものあり。乞ふ左に之を開陳せむ。

(一)凡そ各國の政策は千差萬別歸一する處を知らずと雖も、要之、自然に放任せば悲運に陥るべき趨勢に對し人爲を以て反抗し、依て以て永く其繁榮を維持し、或は其隆興を増進せむとするものにあらざるか。果して然りとすれば英國將に亡びむとすを唱へて止まむよりは何等かの手段に訴へて頽勢を支ふるに務む可きにあらざるか。論者の説解す可からざるの一なり。

(二)よしや、大規模生産組織によれる他國産業生産費低廉の爲め、英國の産業は早晩衰ふ可きものなりとするも、尙ほ何等かの方策を講じて市場を擴め生産費を低め、又外國の無法の競争を絶ち、斯くして其競争力を強む可きにあらざるか。然も事志と違ひ、萬一英本國內に工業を保留し得ざる時は、此の利權を仇敵たる外國

に委ねむよりも、寧ろ密接の關係ある殖民地又は屬領地に移さむことを務む可きにあらざるか。論者の説解す可からざるの二也。

(三)英國の炭鑛産と雖も無盡蔵に非る以上、幾十百千年の後には或は技術的に或は經濟的に絶滅す可きを免れずとするも、然ればとて直ちに是れ人力の以て如何ともなし難き所なりと斷じて拱手無爲ならむよりも、寧ろ一定の政策を確立して炭脈の命數維持に務む可きにあらざるか。他日必要不可缺需要品たる可き事疑なしとすれば、今日一時の苦痛を忍んでも之が輸出を制限して國運の長久を圖る可きにあらざるか。論者の説解す可からざるの三なり。

疑ふて茲に至れば吾人は既に英國滅亡論の賛す可き所以を知らず。英國衰へたりと雖も尙ほ一片稜々の氣の存するあらむか豈容易く其覇權の失墜を肯んず可けむや。如何にして彼れ自家の勢威を維持せむと欲するか。策は分れて二となる。英米同盟説其一なり。大英帝國主義其二なり。乞ふ節を新にして之を論ぜむ。

第三節 英米同盟説

第一款 沿革

眼を擧げて眺むれば、大西洋の水、森々漫々、煙波縹渺として相達し難きの感ありと雖も、血は遂に水よりも濃し。加ふるに用ふる所は同一の國語たり、享くる所は同一の自治的政治たり、文學に於て相同く、宗教に於て相等く、法制に於て相類し、社會的氣風亦更に酷似せり。若し一朝、隱忍持久、巍然として世界重鎮の面目を發揮し來る此の母國と、進取氣鋭凜然として世界將來の霸權を望んで邁進する彼の子國との間に強固不動の一大同盟の成立するあらむか、世を擧げて復比肩するに足るものなく、政權に於て兵權に於て、財權に於て、將商權に於て、遂かに爾餘の世界を卓越し、一佛人の云ひけむ如く、加奈陀と合衆國とに依て亞米利加を支配し、埃及と喜望峯とに依て亞非利加を支配し、印度とビルマとに依て亞細亞を支配し、濠太刺利頭と新西蘭ニュー・ゼーランドとに依てオーストラレリアを支配し、其商業と工業と政策とに依て歐洲及び全世界を支配し、(註一)二十世紀をして自ら化して、アングロサクソンの

時代たらしむる事期して待つ可きののみ(註二)

註一 M. Edmond Demolins, Anglo-Saxon Supremacy, (Eng. Trans.) p. 1.

註二 John R. Doe Passos, The Anglo-Saxon Century, 2nd Edition, New York & London, 1908, Preface.

Brooks Adams, America's Economic Supremacy, New York, 1900, p. 26.

願れば十年の昔、北米合衆國が帝國主義實行の第一歩として西班牙と戦ひ着々として勝利を敗むるや、歐洲の一角、暗雲飛來し、對米同盟まさに成らむとするの徴候を示せり。然るに英國の上下一致して米國の政策に同情の意を表し、萬一事あらば直ちに起て之が援助に全力を傾注せむとするの態度を示せしが爲に、陰謀實現せず、米國は幸にして日清戦後の日本の屈辱を再びするを免れたり。感恩の情誼は茲に義侠の精神と遇ふて英米同盟論を生じ倫敦には英米協會(Anglo-American League)の成立を見、次て至大の反響を合衆國內に惹起せり。英米同盟論の現はれて大に世の注意を集めたる實に此の時を以て嚆矢とす(註三)

註三 之より先に同盟論は存せざりしにあらざる。唯著大ならざりしのみ。例ばクラ

ウドストリンは「同種同文同語の人類が異りたる政府を有するは偶然の出来事に
して、此の二國民は必ず一致同盟するの期あるべし」と説き、米國に在てもライ

マン、アホット之を唱へ、アンドリュエー、カーネギー之に和し、マンの如き亦「本同盟は兩國にとり非常に利益あるのみならず、必ず實行せざる可からざる問題なり」と云へりと云ふ。(國家學會雜誌第十二卷百四十一號所載伊吹山法學士「太平洋に於る英國の勢力」二〇二九頁)

然るに米人の健忘性なる、戰雲四散、平和の榮光煦々として輝き、英吉利の援助を要せざるに至るや、忽ち前日の熱情を失ひ、英杜の國交斷絶して彈丸矢石の地に見え英軍屢利あらずして窮境に陥るに當ても、冷然目するに對岸の火災を以てし、管に舊恩に報ゆるなきのみならず、却て惡聲を放つに至り、英米協會の如きは歴史上の遺物たり終れるかの觀を呈せり。

若し夫れ爾後寂として同盟の風評に接せざりせば吾人之を沈黙の裡に葬らむを欲すれども其餘燼の尙ほ殘存するありて、學者政客の管見を公けにするもの少からず、且つ一昨年八月米國廻航艦隊の濠洲を訪ふや、或は「太平洋は白人の太平洋たらしめざる可からず」として英米同盟論を唱ふるあり、或は以て「英國戰艦引揚による權力均衡の毀損を永久に恢復し得たり」として喜悅の情を表するあり、一犬虛に吠えて萬犬實を傳へ、紐育ヘラルドは「黃禍に囁さるゝ點に於て濠洲も合衆國も

同様なり」と説き、提督スベリーの如きも至る處所謂「白濠洲」の思潮に阿附し「一個の白人として白人たる諸君に語る」の矯語を弄して喝采を博し、暗に黃色人種排斥の精神を鼓舞し、(註四)斯くて英米同盟は「フロン」の論ぜる對獨同盟(註五)より一轉して對黃禍同盟、否適切に云へば對日本獨同盟たるかの感あるに至れり。評論の筆を惜む可からざる所以なり。

註四 明治四十一年八月二十五日發香港電報同二十七日大阪朝日新聞第一面所載、八月十一日十七日及び二十四日「發タイムス」特電二十日十八日及び二十五日同上第二面所載參照

註五 Archibald R. Colquhoun, Greater America, New York & London, 1904, p. 409.

第二款 種類及び批評

凡そ英米の同盟を稱ふるもの、千差萬態、之を統一するに難しと雖も小異を捨て、大同を採れば約三種に分つを得べし。純乎たる感情の上に立つもの一なり。軍事上の覇權を慕ふもの二なり。經濟上の優越權を望むもの三なり。乞ふ以下順を追ひて其内容を窺ひ、而て之が批評を試みむ。

一 純乎たる感情の上に立つもの。

米西戦争に際して發せしもの、及び前述米國廻航艦隊の齎せしもの等之に屬し、或は英國は米國の産業を創始保育せし恩人なりと説き、或は英國は歐洲の對米惡威の防禦者なりと喜び、或は米國は黃禍に對する保護者なりと論じ、進んで二國の間に同盟を結んで感恩の情を表現せむと欲するもの、頗る俚耳に入り易くして其實最も笑ふ可き愚説たるに過ぎざること、は既に他の同盟論者すら遺憾なく論破せる所なり。即ち曰く、

感情に基きて成立する同盟論は流砂の上に築かれたる家の如し。感恩の情操は甚だ尊しと雖も、政治上の結合に及ぼすの危険に至ては火藥よりも大なり、云々(註一)

註一 John R. Doe Passes, op. cit., p. 54.

二軍事上の覇權を基ふもの。

是れ二國間に一時的又は永久的攻守同盟條約の結ばるゝ曉には能く以て世界に横行濶歩するを得べしとなす論者にして、ベレンスフォード卿の議論は明漸に之を救ゆ。曰く「世界中最も愛國心に富み、且つ徵兵制度なくして陸海軍を備へ得る

米二國結合せむか、蓋し最強の同盟をなし、何人に對しても笑を含んで戰端を開くを得べし」と(註二)

此の説にして實現せられむには容易く世界の海權を掌握するを得るに至る可しと雖も、これ甚だ實行に遠く、よし一步を譲つて能く成立し得べしとするも一時的政策にして永遠に亘つて効果ある可きの大策にあらず。何者、此の如き攻守同盟は現在又は將來に於ける自利進歩上、障害ありと認るらるゝや、直に破壊せらる可きものなればなり(註三)

註二 The Independent, Feb. 23rd, 1899, Art. "An Anglo-American Alliance."

註三 J. R. Doe Passes, op. cit., p. 152.

三經濟の上、優越權を望むもの。

世界工業の中心たる二大雄國間に經濟的同盟成らば世界の市場は自ら其權力範圍内に入り、二國の隆盛亦自ら之に伴ふ可しとなす論者之に屬す。今一例としてドスバツンス氏の議論を紹介せむに、氏は先づ政治的に英米を打て渾然たる一國となすの不能を説き、次て兩國間に聯邦組織を採用するの困難を論じ、結局條約

上一定の事項を規約し、之に依て離る可からざる関係を組成するの一策を描いては時代の趨勢に應じて永久的結合をなすの良法なしと断じ、進んで其條約の内容として次の五項を擧示せり。

- 一、加奈陀聯邦は任意適宜に分裂して合衆國內の一州と化すること
 - 二、兩國人民間に互に公民權を認むること
 - 三、兩國及び其屬領地殖民地間の商業交通を全然自由ならしむること
 - 四、同一通貨を鑄造し且つ共通の度量衡制度を採用すること
 - 五、條約に關して生ずべき疑議解決の機關として仲裁々判所を設くる事(註四)
- 大策雄圖、讀過一遍の吾人をして轉た論者の常識如何を疑はしめざるを得ずと雖も、著者は滔々として自説を主張して止まざるなり。惟ふに列記五項孰れも皆實現に遠きものなれども、就中第一第三の兩項の如き特に其甚だしきを覺えずんばならず。一は是れ露骨なる加奈陀併呑の要求なり。他は是れ極端なる關稅同盟の主張なり。一は即ち名を同盟に借つて全米主義の完成に一步を進めむとするもの、他は即ち辭を同盟に托して全英關稅同盟制度に一段の發展を期せむとするもの、一は米大陸に於ける英國々權の絶對的消滅を來し、他は合衆國及び英領殖民地に於ける幼稚産業の衰滅破壊を招く。一は米に利にして英に損なり。他は英に益あつて米に害あり。共に實現の夢想だに難し。

米加合併論は議す可き點多しと雖も前述せる所なれば(第二章第二節)暫く之を除外に置き、茲に本節と直接の關係ある論者の關稅同盟論を拔萃して聊か之を批駁せむと欲す。論者は曰く、

英米兩國間の貿易を自由且つ無制限ならしめずして、永遠に亘る同盟を成立せしめむとするは一片の空想に過ぎず。されば兩國の商港は宜く常に之を開放し、且つ兩國間の貿易は合衆國內諸洲間の商業の如く自由ならしむ可し。モンテスキュー云へるあり、商業は戦争を豫防し、平和を増進すと。吾人は既に合衆國內に通商自由の利益を見、米加兩國間に商業制限の害毒を學べり。二例既に存するあり。何ぞ吾人の深々を要せむや。夫れ商業が平和を増し、文明を進め、國交を教うるの力あるは有決以來常に認めらるゝ所、然も商業の商業たる效果は其自由なるに於て初めて現はる可し。米の十三洲が結合し、加奈陀が

連合したるは共に此の眞理を認め、此の必要を感ぜしによる。將來英語國民と永久的に連結せむと欲すれば、必ずや先づ通商自由の制度を樹立せざるを得ず。通商の自由は明に二大利益を齎す。一に曰く兩國民間共通の商利は個人間の和衷協同を來す事、二に曰く兩國政府の協力して保護維持すべき目的物を供する事は是れなり、云々(註五)。

論旨の大要以上の如し。何ぞ其徒らに大にして而て極めて粗なるや。吾人は自由貿易が兩國間の結合力増進に有效なるを認むるの點に於て敢て論者に劣るものにあらず。然りと雖も、此の前途には明々白々四大障害の横はるあるを奈何せむ。

一合衆國は極端なる保護貿易制度を全廢し、自國工業の最大強敵たる英國工業の激烈なる競争を受くるに甘んぜざるを得ざるのみならず、關稅收入上多大の損失を被るを忍ばざる可からず。更に英國に對し以上の如き恩典を與ふる以上南米諸邦に對する大望は全く水泡に歸せしむるか、少くとも其實現を甚だ困難ならしめざるを得ず。然も斯迄の犠牲を供して得らる可き英國市場の自由競

争は現在業に既に遺憾なく享有せる所なり。是れ豈合衆國の諾すべき所ならむや。

二英吉利の自治殖民地も亦保護稅率を抛つて二大先進工業國の侵入を許可せざる可からず。事一度茲に至らば幼稚なる産業は遂に發展の途を失ひ、多年の苦心は一朝にして水泡に歸し、然も英本國にして外國農産品に對し保護制度を採用せざる以上、否假令保護稅率の復活を見るとも主要農業競争國たる合衆國の同一立脚點に立つ以上、此の犠牲の代價となる可き利權獲取の希望殆んど存せず。唯加奈陀の如きは合衆國との自由貿易に依て農業上幾分利益する所あるべしと雖も、依て被る工業上の不利益に比すれば實に九牛の一毛のみ。是れ豈殖民地の肯んず可き所ならむや。

三關稅同盟に依る對内自由貿易政策は對外保護貿易制度を俟て初めて其效果全かる可きもの、されば論者の所説の實行に先つては先づ大英國をして外に對し合衆國及び自治殖民地と同一の態度を採て保護貿易政策に出でしむるの必要を存し、もし然らずして英國獨り自由貿易主義を固守せむには一切の外國品は

一度英國に輸入し、然る後合衆國或は英領殖民地に轉送せらるゝに至る可く關稅同盟の精神は茲に全然波却せらるゝ、悲運を免る可からず。然も英國の保護貿易國化は此の如き條件の下に於ては容易に行はるべきにあらざるなり。

四 絶對的自由貿易の約定が如何なる形式の下に行はるゝにもせよ、苟も論者の言の如く英米兩國が政治上、一國と化せざる以上、諸最惠國は必ずや此の殊遇均霑を要求すべく、もし彼等をして不利益なる取扱に甘んぜしめむと欲せば、豫め先づ通商條約に於て除外例を設くるの必要ありと雖も、是れ亦甚だ困難なる可きは想像に難からず。般盤據からず、加奈陀特惠關稅の對獨逸紛争にあり。同盟論の容易く贊す可からざる略ぼ以上の如し。故に達識の士は輕々しく之に和せず、碩學アッシュレー教授の如きは經濟的見地より同盟説は勿論、同情説をも無効なりと駁撃して曰く、

經濟的に觀察せば、アングロサクソン民族同盟政策は到底不可能たるを免れず。英人は常に血統關係を過重視して、他方英國人と血族關係なき米人の多數にして且つ増加の傾向あるを輕んずるの弊あり。よし、英語を用ゆるとも、和蘭人や、

獨逸人や、スカンデナヴィヤ人等が英國に對する感情如何は凡そ察す可きにあらずや。更に一步を進めて考ふるに、英國に對する同情の強弱如何は現時の猛烈なる經濟的生存競争を緩和するに何等の效果をも有せず。資本主義的生産者は感情に拘泥せず。云ふ勿れ、是れ不道徳なりと。不道徳なるにあらざして唯非道徳なるのみ。(Not that they are immoral, they are simply non-moral)英國の一都市に贈るに教會或は圖書館を以てせし實業家は米國會社の預取として經營の必要上投資を行ひ、爲に其自ら裝飾せし都市在住人口の半數をして失職者たらしむるも決して道義上不當なりと評せらる可き理なきなり(註六)。

實にや、ホフマンの調査の如く土着アングロサクソン民族の生殖制限及び人口減少と歐州大陸人民の來住増加及び人口繁殖とに伴ふて(註七)對英の感情漸次冷却す可きは理の晴易き所、更にエミール、ライヒの云ひけむ如く極東の間斷なき開拓日本の急激なる一等國化、支那の經濟的復活に合衆國が世界經濟の中心たること恰も十五世紀末葉の英吉利の如きに至ると共に英米間の表面的なる血族關係が激烈なる商權の競争と政權の争奪とに全然粉砕せらる(註八)るも勢の然らしむ

可き所されば排英の氣自ら其間に兆しロビンソンの嘆ぜる如く、米西戦争の間に起りし事件に拘らず、英國の友情表示の努力に關せず、米人の大部分には依然として英米戦争説の流行せる(註九)決して怪しむ可きにあらず。見よ、カペン(Capen)氏は「將來紛争を生ず可き虞ある國家は世界廣しと雖も、唯英國あるのみ」と叫び、ピアース(Pierce)氏は「戦はむ故、英國と。忠良なる米國臣民は深更之を祈つて眠らざる可し」と號し、更に上院議員チャンドラー(Chandler)氏は「原因の有無を問はず、余は英吉利との開戦を賛成す」と狂す。暴言暴語固より容易く傾聽すべきにあらずと雖も、亦幾分の消息を傳ふるものならずんばあらず。宜なる哉、かの英米協會が單に「文明及び平和の爲に兩國間に最も懇切にして且つ不斷の協力を見むことを望むに止め、チエンバレーンが「永遠的又は一般的攻守同盟が國力を増進すべき所以にあらずして、却て危険惹起の源泉たる」と述べ、唯二國が親密なる關係を持續し、政策及び利益の一致する場合に限り、協同して必要なる手段を採る外なし」と説きたることや。合衆國と相結んで英國覇權の長久を圖らむと希ふが如きは、竟畢是れ一片の空想のみ。

註四 J. R. Dor Pissos, op. cit., pp. 154-157

註五 Ibid pp. 202-205

註六 W. J. Ashley, The Tariff Problem, 2nd Edition, London, 1904, pp. 201-202

註七 米國の有名なる統計學者フレイヴィック、ヒキ、ホフマンの調査の要領左の如しと云ふ。

ロイド、アイランド一九〇五年の統計

	米國婦人	外國婦人
結婚數(婦人百人につき)	七一、六	八二、五
無産兒者數(結婚者百人につき)	二八、四	一七、五
平均産兒數	二〇、六	三三、五
一人子持	二三、四	一六、四
三人子持	一九、八	三八、七

茲に婦人と云ふは十五歳以上四十五歳以下を云ふ。(太陽第十六卷第二號臨時増刊查等國八頁による)

註八 Emil Rael, Success among the Nations, London, 1904, p. 254

註九 H. Perry Robinson, The 20th Century American, New York & London, 1908 p. 46

第四節 大英帝國主義

第一款 總觀

第一項 意義

ダイシー (Dicey) 教授嘗て曰く、今や小邦の時代は去れり。時代は大會社を要求するが如くに大帝國を要求すと。

實にや、集權の趨勢は現代を風靡するもの、如何に肥沃なりとも方寸の地は以て百萬の兵を養ふに足らず、集中の傾向列強を支配しては復小英帝國の昔を夢む可からず。時代の變遷に應じて國運の發展を期する以上、小英帝國は化して大英帝國とならざるを得ず。茲に於てか知る、大英帝國主義は即ち時代の要求なることを。

夫れ英國殖民政策の特色は自治制度の容認にあり。一八三八年 ^{ダールハム (Dartmouth)} 卿が殖民地に自治を許すも憲法改正、外交政策、商業政策及び領土權處分に關する支配權は之を保留するの得策なるを主張せるに拘らず、^(註一) 本國政府は僅に

憲法改正權の幾分と外交權の全部とを保留したるのみ。是れ疑も無く殖民地の領有は利害相償はず、且つ其分離は別處避け難き運命なるが故に、今にして寧ろ其獨立を容易ならしむる處置に出るの至當なるを論斷せる自由貿易學派の殖民政策觀の發現に外ならず。殖民地より得べき利益は一に商業的利益に止るに其獨占權の拋棄せられたる時代、外國に於ける課税は英國を苦しめずして課税國を害し、從て英國は他國が從ふと否とを顧みず、自由貿易政策をとる可しとせられたる時代、殊に兎んや、自由貿易の假面の下に永久世界の工場王たらむとし、殖民地區別關税の如く此の大野心の成就を妨碍すべき制度の破棄せられたる時代——此の如き時代に在て英本國が冷然として自治制度の樹立を許し、各殖民地をして、普通の意味に於ける殖民地にあらずして、獨特の生命を有し、尊榮を有し、自覺を有する儼然たる獨立國家^(註二) たらしむるを辭せざりしは理の當に然る可き所、世界の霸王たらむとし、又たり得むとせる彼等の前に些々たる殖民地の有無の如き畢竟何するものぞ。シローレーの處眼なき吾人と雖も^(註三) 英國政府當年の殖民政策を是認するに難からざるを覺ゆ。

然るに大陸戦争及び之に伴ふ政治的變遷は國家的觀念を強め、米國農業の英國市場獨占及び之に伴ふ歐洲諸國對英貿易の不權衡は經濟的獨立心を起し、國際的平和國際的自由貿易實現の夢忽ちにして破れ、英國霸權の動搖と現はれ、世界主義の失勢と變じたる一方、他日の平和的分離を豫期し、否之が階程たらしめむとして採用せし殖民政策は若し軍に武力を以て結合を圖りたらむには崩壊を免るゝに由なかりし大帝國を武力以上の道義力を以て結合せり(註四)。願ひたるもの與へられずして願はざるもの與へらる。望みしものは、パンにして與へられしは石なるか。或は望みたるは石にして與へられしは却て「パン」ならざるか。げに奇しくも測り難きは運命の手の業なる哉。

されば南阿の一戦利あらずして母國の困苦甚しきを見るや、一八六八年チャールズ・デルクの「大英國論」(Greater Britain)に覺醒せられ、一八八三年シローの名著「英國膨脹史論」(The Expansion of England)に鼓舞せられ、其後常に列強の「新マールカンデッスム」に刺激せられたる帝國主義的思想は茲に澎湃たる大波を擧げ、諸殖民地は自ら進んで或は軍兵を出し(註五)或は軍資を贈めて其援助に努め、世界に示すに英帝國

内の連鎖未だ必ずしも悲觀すべきにあらざるを以てし、爲にロイズベリ卿の如きは千九百年一月二十三日チャザムに演説して此の一事以て優に南阿の戦費を償ふて餘ありとなすに至れり。

若し世界の形勢にして依然として一八七〇年以前の如かりせば、英本國たるもの彼の母國にして萬一の際必要あらば殖民地より得べき所、豈千人と云はむや、一萬人と限らむや、將十萬人に止まらむや、實に最後の一人をも得べしとの一片の誓言(註六)に安んじ得たらむやも計り難しと雖も、形勢の推移は兵權に於て、商權に於て、頻りに壓迫の急を告げ、晏如として階級を貪るを許さず、感情なくんば結合を見みこと能はずとは云へ、單に感情の一事を以て實效ある結合ありと爲す能はざる(註七)に至れり。炯眼早く這般時勢の變徵を察し、快辯夙に母子國連合の必要を説くもの之を稱して大英帝國主義者と云ひ、其主張を名けて大英帝國主義と云ふ。

元來大英帝國主義の意義如何に付ては甲論乙駁未だ歸一する所あるを知らず。グレイ(Gl. Edward Grey)は之を以て自治殖民地の表示せし偉大なる熱情に報ひむとする欲望なりとなし、フォルスタース(W. E. Forster)は對外關係上母子國を打て一

團と化せむとするものなりと云ひ、ローズベリ卿は、其目標とする母子國の連合は同情に於て、防禦に於て、將外交に於て最も密切なる結合を意味すと説き、ジェ、セクトは、英國族の纏る全領土を聯結し、全臣民間の同情と、同一族たるの感情とを強からしむるにありとなす。其他曰く何、曰く何、(註八)黨派により、信念により、各々所見を異にして到底之が一致を求む可からず。蓋し寒温熱の三帯に跨る英帝國の版圖の廣大にして財力の豊富なるや、世界に冠たるものありと雖も、惜むらくは政治上經濟上確固不動の連鎖なきが故に、唯人種と言語との同一なるに依て相一致するに止まり、從て其結合力微弱なるを感じ、翻つて世界の大勢が日に月に生存競争の激烈を加ふると共に、苟も此の活舞臺に立て、活動を試みむと欲せば集權の趨向に順ふの止む可からざるを覺り、何等かの手段形式に於て母子國間の連鎖を鞏固ならしめ、以て國運の長久と覇權の永續とを希圖せむとの大目的に至つては即ち、一なれども、一步進んで然らば果して如何なる手段方法に出づ可きやの問題に接するや、茲に明かに二大別を生じて、一は政治上經濟上利害共通せる一大帝國の建設を欲し、他は政治上連結の必要を認むるも之を經濟上に及ぼすを替せず(註九)

爲に自ら帝國主義に附する意義を異にすべきは理の當然に屬す。吾人が漠として其大綱を掲げて其細目に及ばざりし豈他あらむや。

註一 C.J. Fuchs, Die Handelspolitik Englands und seiner Kolonien Schriften des Vereins für Socialpolitik, Bd. 57, S. 184

註二 及註七 Viscount Milner, Dec. 14th 1906, at Manchester. Imperial Unity, London, 1907,

註三 Seeley, The Expansion of England, London, 1899, p. 86

註四 Max O'Reil, John Bull & His Island, Cheap Edition p4.

註五 陸軍大臣アロウドリック氏の報告によれば、南阿戰爭に参加せし殖民地人民の數は、漳州一五、五九六六人、^{ニエーデルラント}新西蘭六、一〇七人、加奈陀六、三一三人(外に個人的の参加者五一人)なり。

註六 ニエーデルラントスウェーデン内閣の一員ハッソーン(Hassall)氏の叫びし所。

註八 Jesselt, The Bond of Empire, London, 1902, pp. 111-112 & p. 124.

註九 例ば、サリズベリー卿は一八八五年十月七日ニューポート(Newport, Monmouthshire)に演説して「世界に於ける英國の勢力を強からしめ且つ我等をして空前の大帝國たらしむる大屬領地より得べき總ての利益を受けむと欲する英國の愛國家は先づ母子國接近の政策を奉じざるべからず」と云ひしも、同時に卿は最も熱心なる自由貿易主義者たりき。

又ローズベリ卿は自由黨首領として重きをなしたる人なるも、帝國主義に關して黨内意見の分裂を生じたれば一八九六年總理の職を辭し、後には再び同黨に席

を列ねざる可き決心をなすと共に、故意自由黨員に向つても帝國主義を鼓吹せり。一九〇一年十二月十六日、チエスターに開かれたる自由黨大會に於ける忠告演説の如き其著例たり。然も一度關稅改革問題に關するや、斷乎として反對の地に立ち、一九〇三年十一月七日、レスターに於て盛にチエンバレーンを攻撃し、自由黨員は既往を忘れ將來に於て一致協同、之に反對せざる可からずと論じたり。

第二項 沿革

一派の論者説をなして云ふらく、英國の帝國主義はキツプリングとチエンバレーンとに創せりと。何ぞ知らむ、キツプリングの前にチニンソンあり、(註一)チエンバレーンの前にデズレリーあり、(註二)雄譚の辭、痛快の辯、新時代の新精神を説て餘蘊なきことぞ。

試みにチニンソンの歌ふを譯け、

Sharers of our glorious past,

Brothers, must we part at last?

Shall we not through good and ill

Cleave to one another still?

Britain's myriad voices call,

Sons be wedded, each and all

Into one Imperial whole,

One with Britain, heart and soul —

One life, one flag, one fleet, one throne!

Britains, hold your own!

吾等の名譽ある過去に於て相提携したる吾等兄弟は遂に別れざるべからざる乎。凡ての禍福、凡ての變遷を通じ、吾等は一國民として團結する能はざる乎。耳を傾てブリテン國民の聲を聽け、子供等よ、互に力めて一帝國たれ、心よりして一ブリテンたれ。唯一個の生命、唯一個の旗幟、唯一個の王位——吁、ブリテンの子供等よ、何ぞ自ら保たざる、(註三)

何ぞ其想の深遠にして其辭の雄大なる。之をキツプリングの傑作「英吉利の答」

(England's Answer)の一節

Deeper than speech our love, stronger than lips our tether,

But we do not fall on the neck, nor kiss when we come together,
Also we will make promise. So long as the blood endures,
I shall know that your good is mine, ye shall feel that my strength is your.

我等の愛着は言葉に盡させず、強くあれど
相遇ふたればとて接吻するなく、抱くなし。

然も我等は互に約さじ、我等の血潮の積かむ限り、

我は汝が幸は我がものと知り、汝は我が力を汝のものと感じ可し」と。
に比す。吾人は何等の徑庭の存せざるを思はずんばあらざるなり。

註一 故高山林太郎氏亦明新に説く、譯牛全集第四卷五三九—五四四頁時勢と詩人「参照

註二 Schulze-Gaevernitz, Britischer Imperialismus und englischer Freihandel, Leipzig, 1906, S. 82 ff.

註三 高山氏の譯に從ふ、(前編五四三—五四四頁)

翻つてデズレリを見る、彼は實に一八六五年の昔、早く既に宇内形勢の變化は
輕々しく自由放任の主義に謳歌す可からざるに至りしを覺り、下院に於て演説し
て曰く、

今や吾人は高價を拂ひても殖民地を本國に引き着く可きか、將又甘んじて之を

失ふ可きか、二者孰れか其一を擇ばざる可からざる地位に立てり。然も殖民地
一度失はれむか、或は恐る、他日却て累を英吉利に及ぼすに至らざる可きかを
と。是れ、今日チエンパレーシンの説く所と全く符節を合するものにあらずして何
ぞや。此の後彼は一度輿論に同じて陽に自由政策に和せしと雖も、尙ほ固く自己
の所信を貫き、一八七二年六月二十四日水晶宮(Crystal Palace)に於て堂々として其
管見を發表せり。曰く、

自由主義初めて稱へられてより、正に四十年、其間幾多の能力あり才能あり、且つ
聰明なる人士の賛同援助を受け、間斷なく又巧妙に、未曾有の奮闘を以て英帝國
の崩壊を來さむとを勉めたり。

然らば其結果は果して如何と云ふに、憫む可し、撒頭撒尾失敗のみ。見よ、殖民地
は帝國の斷じて破壊す可からざるを決せるにあらずや。余は思ふ如何なる政
治家と雖も、極力我殖民帝國再建の機會利用に努めざる可からざること。

讀み來て吾人は幾分彼が自黨の爲にする強辯の跡なきにあらざるを覺ゆれども、
彼が母子國間に貫通する新思潮の到來を知り、併せて之が目的は英帝國の建設に

あるを觀破せしや、炳として疑ふ可きにあらず。否、昔に帝國主義的口吻を漏せしのみならず、彼は斷々乎として侵略發展の主義を持し、或は新殖民地を獲得して政治經濟的要求に備へ、或は軍備を擴張して歐洲列強を威嚇するの手段に出でたりしを見る。

勿論斯の如き帝國主義の時代に入りたればとて、英吉利の殖民政策は俄然として豹變せりしにはあらず。西濠洲の自治制度の創設は、概近一八九〇年にあり、ナルの如き亦一八九三年に於て自治殖民地と化せるを見れば、或は永く舊時の政策を踏襲せるかの觀ありと雖も、然も其間母國は子國の將來に嚮望して政治的經濟的協力を望み、子國は母國の難境を認識して帝國的愛國心を増し、相俟ち相扶けて、帝國を以て一體となし、其發展を圖り、其膨脹を希ひ、英帝國々際上の地位をして泰山の安きにあらしめむとする新精神は、其々の間に成熟し、一八八一年七月には利益の連鎖を以て母子國民を連結して大英帝國の基礎を強固にし、勢力を結合すべき事を綱領とする公平貿易協會(The Notional Fair Trade League)の成立あり、一八八四年十一月には母子國間の政治的連鎖を維持するに止まらず、聯邦組織を建て、

更に之を強固ならしめむとする帝國同盟協會(The Imperial Federation League)の創立あり、遂に一八八七年殖民地會議の英京倫敦に開かるゝに至りて、何人と雖も新生面の到來を認むるの外なき事となれり。同會議の席上ナリスベリ卿が演説して、希くは爾今殖民政策を遇するに帝國政策を以てし、殖民地の利益を目するに帝國の利益を以てし、慎重なる研究の末、意を決して支持せらるゝに至らむことをとせるは遺憾なく此の間の消息を道破せるものよし、何等實效ある決議を見ざりしとするも、時代は目するに美果を産すべき大木の萌芽を以てし、將來の發達を確信せり。

果然一八九四年オッタワに開催せられたる殖民地會議は一段の進境を現出し、來り、晚香港廣州間海底電線敷設問題、加奈陀經由英濠急行郵便線開設問題等を議せしに止まらず、母子國間及び子國相互間商業交通問題に入つては、條約其他帝國内各部分の互惠實行の障害となるべき約定を廢棄すべき事を宣言し更に進んで決議すらく

英帝國の安固と進運とを確保する最良の途は母子國間の連鎖を二層親密とな

し帝國内共同の利害關係を有するもの、實際的同情協力をして絶えず進歩せしむるにあり。而て此の協力を最も有效ならしむるの手段は物産の相互的且つ有利的交易の途を開設し發展せしむるにあり。(中略)故を以て本會議は母子國間に關稅を協定して對外貿易よりも帝國内の貿易を特惠せむことを希望し、併せて本國が此の政策の採用を決意するに至る迄、各殖民地は權限の許す限り特惠政策を採用せむことを切望す云々。

何ぞ其宣言の堂々として壯大なる。特惠關稅の思想すら既に已に圓熟の域に達せるにあらずや。吾人が帝國主義の創始者を以てチェンバレオンなりとなす一派の所説に服せざる、蓋し所以なきにあらざるなり。

チェンバレオンを以て帝國主義創始者と看做す可からざるや上述の如し。然りと雖も吾人は決して以て氏の效績を無視せむとするものにはあらず。一八八九年サー、ジョン、マクドナルドが合衆國對加奈陀關稅戰爭に際し之を唱へて時の殖民大臣サー、ミカエル、ヒックス、ビッチに御けられ、一八九四年セシル、ローツが南阿殖民地たるマタペルランド及びマシオナランドの爲に實行を主張して成らず、更に

同年オツタワ會議が時の殖民大臣リッポン卿に建議して容れられず、人をして轉た其將來の運命如何を危ぶましめたる特惠關稅の必要を認識するや、反對を怖れず嘲罵に屈せず、居然として大英帝國の傳道者として一身を抛ち榮位を捨て、南船北馬熱烈の辯を振ふて國民の覺醒を促し、身病床に親んで後も尙ほ機に臨み變に應じて同志の鼓舞を怠らざる彼が忠節に至つては塵ろに人をして感奮せしむるに足るものあり。ペラールが呼んで「新なる英國の先導者」となし、(註四)ジェッセットが讃して「未だ彼の如く大英帝國聯合の大目的に寄與せしものなし」となす(註五)亦所以なきに非ざるなり。カール、ヨハン、フックスが其著英國商業政策論を閉ぢむとするに近きて、英國の將來其國際的地地及び其貿易上然く重要なる母子國連合の問題に圓滿なる解決を與ふ可き先見と勇氣と精力と手腕とを兼備せる政事家の近く時機を失せざる期間に出現すべきと否とは未來能く之に答へむとなし、(註六)たりしより後十年、茲にチェンバレオンの活躍を見る、吾人の竊に同盟國の爲に祝意を表せむとする所なり。

註四 Bernard, British Imperialism and Commercial Supremacy, London, 1906, p. 41

第四節 大英帝國主義

陸軍 Jewett, op. cit., p. 155.

註六 Carl Johannes Fuchs, Die Handelspolitik Englands und seiner Kolonien in den letzten Jahrhunderten, Leipzig, 1893, S. 312.

凡そ現代國を地上に建て帝國主義を奉ずるもの少きにあらざると雖も之に對する駁撃の盛なる英國の如きは蓋し甚だ稀なり。然るに今此の國民を化して總てロイズベリ卿の所謂「或る意味に於ける」——一句頗る曖昧にして不得要領なるを覺ゆと雖も——帝國主義者となし、又烟に靡く赫遊のあるが如くなきが如かりし帝國一體の思潮を改めて明確なる大政策となす、時勢の影響固より多きに居る可しと雖も亦チエンバレーン一派の勢に基く所決して少しとせず。然らば此の主義は如何にして如何なる方面に現はれしか、以下款を分ちて之が大要を傳へじ。

第二款 軍事的大英國主義

第一項 獨逸の戰備

一八七〇年來歐洲諸國は争ふて徵兵制度を採用して武力の増進を圖り、露國は一令の下に二百萬人以上、佛國は百五十萬、獨逸は百三十萬、奧の如きにして尙ほ且

つ優に五十萬の大兵の動かし得るに至り、武装的平和の聲漸く高く、英國亦永く昔日の平和を樂む能はざるに至れり。

若し形勢の推移にして茲に止まらむか英國は唯印度の危險を感ずるのみなりけむと雖も、時勢は更に一段の發展を呈して列強漸く海軍の擴張に腐心し、一面自國商業及び屬領地の防備を堅うすると共に、他面一朝風雲の變に際會せば以て豺狼無飽の慾を逞うせむとするに至れり。於茲乎海の女王たらずんば即ち海の犧牲たるの外なきを自覺せる英國は自衛上所謂二強標準を樹て、自國に次ぐ二箇の最強海軍國の主要軍艦を合併せるより尙ほ一割の優勢を持せむ事を圖り、一八八九年より一九〇〇年に至る迄露佛の二國を標的として其海軍力の充實に従ひ又排佛排露の政策に出でたりしが十九世紀の終末より獨米二國が海軍擴張を斷行して頭角を擡ぐるあると共に露國海軍は極東の一戰殆んど全滅の悲運に陥りしを以て標準たるべき二強國は露佛を去り獨米に移つて今日に及べり。

夫れ海軍の擴張は方今世界を風靡せる一大大勢たり。敢て強國に限らず、又必ずしも富國に止らず、苟も渾圓球上多少の志を有せる邦國は舉て此の事に従ふ。

敗餘の露國然り、脆弱の清國、希臘然り、積弊の西班牙、土耳其然り、後進の伯西アルゼンチン亦然り。然れば獨米の如き新興の意氣、天に冲せむとする雄邦が相胥ひて之に走れる毫も怪むべきにあらず。然り、吾人を以て見る、毫も怪むべきにあらずと雖も一旦地を替へて之を英國より觀ひ乎、頗る異なるものあり。

米國海軍擴張の目的、那邊に存するかは姑く措て之を問はず。唯一衣帶水英國と相對せる獨逸の軍備の發展に汲々たるは決して輕々に看過すべからざる所に屬す。彼が一八九七年初めて海軍擴張案を立て、海軍競争の列に加はりし當時歐洲には英佛戰爭又は英國對露佛の戰爭の豫想勢力を有せしが故に獨逸當局者は必ずしも自國海軍力を甚だしく強大ならしめむと欲せず、唯英國艦隊が露佛と戦ひ重大なる損害を受くるに乗じて之を威壓し又は攻撃し以て英人の屈辱的讓歩を強ひむことを謀りしが、時勢の變轉遂に其意を遂げ難からしむるを見るや、猛然として獨力以て英國に對峙し得べき艦隊を建設せむとするに至れり。即ち一九〇〇年第二回擴張案を提出し議會の討議行惱むに際しては皇帝自ら風發の長廣舌を揮ひ、朕は祖父が陸軍を改造せるが如く不屈の精神を以て海軍を改造し

て陸軍と同等の地位に至らしめ、其力を藉て獨逸帝國を未曾有の地位に達せしめむと欲すと激語して通過せしめ、其進行半ならずして一九〇五年更に大規模の擴張案を成立せしめ、越えて一九〇七年艦齡短縮(戰艦の艦齡を二十五年より二十年に)による巧妙なる擴張案を編みたるのみならず、エルベ河口のブルンスブツタルに一大船渠を作つてウキルヘムスハーフェンの缺を補はむとせる、ドレツドノールに型艦艇通航の爲め一億圓の巨費を抛つてウキルヘルム運河改鑿工事に着手せる、北海の要樞ヘリゴランド島に完全なる築城工事を起し水雷根據地兼貯炭所とせむが爲百五十萬磅を惜まざる、一九〇四年度に於て英國の約三分の一なりし製艦費をして四年後には略ぼ相匹敵せしめ、(註一)更に千九百十年海軍豫算は總計四億三千四百萬馬克前年度より増加せること二千八百五十萬馬克にして殊に製艦費に至ては英國の一千三百二十八萬磅と大差なからしめたる、最近二年間に巨艦を製造すること英の五隻に對し九隻に上らしめたる、然も海岸線少く殖民地なく脅迫せらるべき貿易通路を有せざる塊國を便嘆し一に侵襲的なる海軍建設を斷行せしめたる等々、吾人をして規畫の偉圖謀の壯を三嘆せしむるものなく

んばあらざるなり。

註一 英國白文書は英米獨艦製造左の如しと稱す。

一九〇四	一三、一八四	獨艦	六、五四〇
〇五	一一、三八九	四、九六九	一一、三七五
〇六	一〇、四八六	五、三四二	八、六〇一
〇七	九、一六七	六、二八五	六、七八四
〇八	八、六六〇	八、三六六	七、七九九

而て一八九九年英國海軍大臣ゴッペン卿が獨逸の一艦を造る間に英國は二艦否三艦をも建造し得べしと誇り得たるは正に過去の一夢と化し、獨逸最初の「ドレドノート」型戰艦たる「ナッソウ」號は龍骨据附後七ヶ月にして進水を終り、且つ今後は更に短期に進水せしめ得べしと傳へられ、其五私人造船所の如きも毎年十七隻の「ドレドノート」型艦の建造に着手し二十ヶ月乃至二十四ヶ月にして完成し得べしと宣言するに及び、海軍大臣ライビッツ氏は帝國議會場裡明漸に自國製艦力の英國に優るを主張せり。殊に英國自由黨政府が徒に軍備制限の空想に耽溺し、建艦計畫を縮少せる間を利し、各所の官私造船所に艦體建造、汽鐘大砲製造に必要な

設備の大擴張を成さしめられたれば、二年前私立造船所の一二の船架以外に「ドレドノート」を建設し得べきものなかりしに早く其數増して十四となり、英國人が見て以て紙上の空計畫となしたる一九〇八年編成の毎年戰艦三隻裝甲巡洋艦一隻建造案の實行易々たりしは勿論、一九〇九年度に着手すべき戰艦をも繰上げ起工するの繰々たる餘裕を示し、一年前新式戰艦建造に於て獨逸は卅ヶ月を要し英國は廿四ヶ月にて足ると公言せしアスキスをして、今や獨逸は建艦の速力に於て實際英國を凌ぐに至れり。是れ眞に驚駭すべき事實なりと論じて英國の上下に一大恐怖を興へしめぬ。

説て茲に至れば一疑問の湧出するものあり、曰く獨逸は抑々如何なる海軍を建設せむとするものなりや即ち是れなり。獨逸海軍省は之に答へて云ふ 一海岸防護艦隊 二敵艦攻撃艦隊 三商船保護巡洋艦隊の建設即ち其目的なりと。然れども吾人を以て見る、此の如きは畢竟名を假れるもの而已。何を以てか然云ふ。甲獨逸の實際建造する所は殆んど大戰艦に限りて快速巡洋艦に及ばず、且つ其噸量少くして續航力を缺如せる事、其一なり。

乙州及び淺灘多き獨逸の海岸は其防禦に海軍を要せざる事其二なり。一八八四年將軍モルトケ既に曰く「獨逸は其防禦に海軍を要せず」と。遅るゝ事四年時の獨逸海軍司令長官スト、シユ提督亦曰く「北海々岸諸港は能く自ら守る。其限りなき砂州は歳々變化するを以て一朝浮標を除き去らむか最も熟達せる水先案内と雖も之に入るに危険を感ぜざるを得ず」と(註二)。加之、獨逸の主要商港は漢堡と云ひ、ブレメンと云ひ、皆遠く海岸と離隔したる河岸に臨めるを以て、縱令海岸に近接し得たりとするも何等實效ある攻撃を加ふるに由なきなり。

見る可し、獨逸の眞意が強大なる海軍力の全部を擧げて敵國攻撃の用に供せむとするにあるの證據歴然として蔽ふ可からず、獨逸海軍大臣が一九一〇年度豫算討議に際し、帝國海軍は敢て攻戰の用に供するものにあらず、唯沿岸貿易運輸業を保護せむとするものなりとなせるが如き(註三)一顧の價值なき宣言たることを。

勢既に此の如し。ウイールヘルム二世陛下が或は、獨逸海軍の目的は海外に大獨逸を發見するにあり」と言ひ、或は「獨逸の將來は海上に在り」と叫び、又或は「三叉戟(Triident)は朕が手中になくばある可からず」と號し、更に進んで、今や獨逸及び獨逸

皇帝の參與協贊なくして天下の事一として決せらるべきにあらず」と揚言して尙ほ飽かず、遂にレツルに於て「太平洋の提督露帝ニコラス二世陛下に對し自ら擬するに大西洋の提督を以てするに至れる、必ずしも一場の大言壯語として遇するを得ざるなり。

一九〇〇年度海軍擴張豫算案序言中には明々白々炳として火を見るが如き宣言あり。曰く「獨逸は世界最強の海軍と戰ふに當りても尙ほ劣等の地位に立つ虞なき海軍を要す」と。其所謂世界最強の海軍が何を意味せるやは問ふて而て後初めて知る可き問題にあらざるなり。

前宰相公ビュローをして「英獨戰爭の如き夢想するだに猶是れ非常なる罪惡なり」と辯せしめよ(註四)。海軍大臣ライビツをして「獨逸が英國に對し海上霸權を争ふと云ふが如きは究竟齊東野人の言のみ」と説かしめよ(註五)而て殖民大臣デンプルヒをして「獨逸の英國侵略に付て恐慌を起すは狂氣の沙汰なり」と嘲らしめよ(註六)更に又獨逸をして詭語一番、將來英獨兩國が太平洋上の問題を議するに當り英國は獨逸が偉大なる海軍を有するを喜ぶの日あるべし」と語らしめよ(註七)。

特言美語。开は三相一帝各之を競ふに任す。然も獨逸皇帝にして三又戟を保持して大西洋上の提督たり、獨逸帝國にして世界最強の海軍と戦ふも劣等の地位に立たざる海軍國たらむとする以上、而て翻つてロイズベリ卿が一八九六年三月四日「我海軍と商業との衰ふる時は即ち我大帝國の没ぶべき秋なり」と云爲せる言の當り、テニソンの歌へる

The Fleet of England is her all-in-all

.....

.....

艦隊は英國の生命なり。而て

艦隊の運命は英國の運命なり。

が今に至て眞なるを失はざる以上、將來の事今にして略ぼ測知すべからずや、如何。

註二 Nineteenth Century & After, April 1906, Art. "The Future of Anglo-German Relations" by J. E. Barker.

註三 四十二年三月八日大阪毎日二面六日「ロイズベリ」發電

註四 Nineteenth Century & After, Dec. 1904, Art. "Great Britain and Germany" by J. L. Pashford, p. 689

註五 四十一年一月三十一日大阪朝日二面三十日發「ロイズベリ」發電

註六 四十二年十一月十二日大阪毎日一面十日伯林發電

註七 四十一年十月三十一日讀賣新聞第二面所載

第二項 英國の覺悟

我々たる獨逸の軍備擴張に對し英國の採るべき策果して如何と云ふに自ら二様の見解の對立せるを見る。

一は獨逸には毫も英國侵略の意思なくして却て英國の攻撃を恐るとなし、他は英國には何等獨逸侵略の意思なくして單に獨逸の襲撃に備へむとするのみと云ひ、一は英國の軍備過大に失し爲に危惧の餘り獨逸をして海軍の擴張に走らしむると觀じ、他は獨逸の戦備に汲々たる以上止むなく英國亦之に應ぜざるを得ずと論じ、一は之を以て英國にして海軍競争の愚を免れむと欲せば宜く其擴張の度を緩うして他意なきを示すべく、能ふ可くんば列強と協商して、國際仲裁裁判所を設くるの策に出づべしと唱へ、他は元來英國の海軍擴張は獨逸の政策に起因するものなれば獨逸先づ其無益の競争を止む可く、現實に獨逸が其誠意を表はすにあらざれば國際仲裁々判の如く、一片の白紙以て世界の平和を維持せむこと夢想だに